

普通の日常に輝きを

ルコロン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

至極一般的な高校生石崎翔斗<sup>いしざきしょうと</sup>。

急に元女子校の花咲川学園に転校になった。そこで彼に待ち受ける非日常みたいな日常とは……？

2022/3/2 このお話のリクエストボックスを作りました。

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid=276568&uid=363789>

入れてくれたリクエストは、前向きに検討致します。

2022/5/11 タグを追加しました。

## 目次

新たな出会い	1
新しい友達	4
バンドの生演奏ってすごいよね	8
商店街巡り（其ノ壱）	13
商店街巡り（其ノ二）	18
初バイトは色々起こる？	22
テストが好きな人はごく少数だと思う	27
友達に頼まれたら……	31
ゲームと現実でエンカウント	38
羽沢珈琲店での出来事	44
猫とゲーム好きに悪い人なんていない	51
Afterglowとの共演（勉強）	56
アイドルの練習風景を見に行く（強制）	61
笑顔を育むバンドとの出会い	66
RPGゲームでは役割分担は必須 前	72
RPGゲームでは役割分担が必須 後	76
遊園地は非日常感あって好き	80
風邪とお見舞いと過去話	86
突発。水族館デート!?	94
翔斗、CIRCLEへライブを見に行く	99
突撃、翔斗の家!!	105
翔斗、花見しようぜ!!	113
羽沢珈琲店でのお手伝い	119
翔's cooking. 始動!!	125

ライブと出会いとお手伝い

130

頑張ってる彼女に素敵な一日を（羽沢つぐみ誕生日回）

137

後悔と1つの希望

142

甘え甘えられる関係っていいよね

148

## 新たな出会い

「転校……ねえ。正直辛くはないんだけどな。学校が学校だからな」

俺は石崎翔斗<sup>いしざきしょうと</sup>、年齢的に高1だ。今日から転校先の学校に行かないならないんだが……

「なんで元女子校なんだ？」

そう、俺が転入する高校は花咲川学園という、今年から男女共学になった高校だ。

まあ俺が選んだなら絶対選ばないけど、親が選んだから仕方がない。

「そういうえば、あの学校の校長に早く来るように言われてたんだわ。少し早いけど制服着ていくか」

速攻で着替えて花咲川へ向かった。

学校に着いた時、その風紀委員に止められた。

「その男子生徒、もしかして校長先生が仰つてた人ですか？」

「多分……合ってると思います」

「お待ちしてました。私は花咲川学園の風紀委員の氷川紗夜と言います」

「ご丁寧にも。俺は石崎翔斗と言います。ここに居るってことは職員室に案内してくれるのですか？」

「そうですね。あなたが来たら職員室に連れてくるように言われましたので。それでは行きましようか」

そう言つて、職員室まで連れて行ってもらった。

「目的の場所まで着いたので、私はここで失礼します」

「ありがとうございます」

俺は氷川さんにお礼をして職員室に入る。

色々ありましたが、朝は特に何も無かったですよ。ただ、朝の集会の時に壇上に立って男女比に絶望しただけだから。

「それじゃあ行こっか。翔斗君」

「わかりました市川先生。ところで俺が行くクラスって何組なんでしょうか？」

「あつ伝えてなかったね。君のクラスは私のクラスで1年A組だね。朗報か悲報かは君次第だけど、このクラスの中には男子生徒はいないね」

市川先生……それはもうちょっと早く行ってくださいよ。あんまり女子と関わってこなかったんだけどなく。

「もうちょっと早く言っただけです。クラスに入る直前じゃないだけマシな気がしますけど」

こんなことを話していると俺の新クラスの前に着いた。

「それじゃ、私が入っていいって言うまで外で待っててね」

「了解です」

先に先生だけ入る。

これからどうなるんだろうか……今までとは違う環境だから何が起るのかも分からない。少し気楽に行こうかな!!

「入ってきて」 「はい、わかりました」

扉を開け、黒板を背にして先生の横に立つ。その途中で先生が黒板に俺の名前を書いてくれていた。

「それじゃあ自己紹介どうぞ」

「名前は石崎翔斗です。途中からクラスに参加なので馴染めるかは不安ですが、皆さんと仲良くなれたらいいと思います。よろしくお願います」

囁まずに言えたことに少し驚きながら、頭を下げる。

クラスの中から拍手が起こる。一応歓迎はしてくれているようで少し安心した。

「それじゃあここからは質問タイムにしよつか。なにか質問ある人〜」

そう言われたら半数の人くらいが手を挙げた。

「こんなにいるんだ……」

「じゃあ適当に指名するね〜なら……」

そうやって、俺の質問だけで授業時間の3分の2くらい時間を取ってしまった。

「さてと、質問はここまで。残りは休憩時間にしてね。石崎君は、廊下

側に空いている席があるからそこに座ってもらうね」

「了解です」

少し奇怪な視線を集めながら指定された席に座る。

そして、隣の席にいた黒髪のショートヘアの子に話しかける。

「えっと、さつきも前で言ったけど……石崎翔斗です。これからよろしくね」

「え、えっと、牛込りみって言います。よ、よろしくね石崎くん」

緊張しているよう言葉に少し詰まっているようで、目線も少し泳いでいるようだ。

「こういう時は……」

「落ち着いて、深呼吸しよっか」

『スーハー』

「落ち着いた？」

「お、落ち着いたよ。ありがとう」

「それでは、次の時間から普通の授業に石崎君も入るから、牛込さん石崎君のことよろしくね」

急にそんな事言われても……教科書は明日くれるって聞いているから今日は……

「……ってことは」

「そういうことだろうな」

こうして、ちよっぴり波乱の学校生活が幕を開けた。

## 新しい友達

先生の急な連絡から3時間程度、隣の牛込さんの教科書を見せてもらい、周りの目を気にしながら授業をした俺。

授業内容はそこまで難しくない模様で、転校前の学校がそこまで賢くない俺が今までの知識で何とかできるレベルだった。まあ、転校前にある程度勉強してましたけどね。

そして昼休憩。俺は転校する前みたいに一人で弁当を食べようと包みを開こうとしたら……

「あ、あの、石崎くん」

「牛込さん、どうしたの？」

「えつとね、その……私たちと一緒にお昼ご飯食べない？」

少し言いよんでいる様子が目に見てわかる。男の人にあまり慣れていないのかな？とか考える前に提案してくれてるんだから、それに答えないと。

「あつ、うん。俺はいいけど、一緒に食べる人の方は大丈夫なのかな？」

「それに関しては大丈夫だよ。みんなにはちやんと許可を取ってるから」

「ふーん。それならお邪魔させてもらうね」

という感じで今日のお昼は牛込さんのグループで食べさせてもらうことになった。

　　～花咲川学園中庭～

「石崎くん、私たちここでいつもお昼食べてるんだ」

「そっか。いい所だな」

りりりりりり

りりりんって誰だ……って思ったんだが牛込さんの下の名前って「りみ」だったよな？ふと隣を見ると声に気づいてない様子だったので

「……牛込さん、呼ばれてるよ」



「えっ、どこから?」

「りくみりん!!」

「きゃっ」

「えっ、ちよっ、まつ!!」

声の聞こえた方から猫耳?みたいな髪をした少女に牛込さんが横から抱きつかれ、2人揃ってこちら側に倒れてきたのをギリギリ受け止めた。

「……2人とも、大丈夫?」

「……だ、だだだだ大丈夫だよ」

ほんとに大丈夫なのか?

「そっちの猫耳の子は?」

「猫耳じゃないです。でも、ありがとうね」

「そうか。色々ごめんね?」

かゝすゝみゝ!!

また何かが起こる気がするよ。そして2人は気づいてないし。

「かゝすゝみゝ!!」

後ろから起こった声が聞こえた。

「あゝりさゝ。遅いよ」

「香澄が早いんだよ!!」

なんか俺入る隙ないし、空気なんですけど。

「ところで、りみの隣にいる人って誰?」

やっと気づいてくれた。

「俺は1年A組に編入した石崎翔斗です」

「そっか、あんたが噂の転校生か。私は市ヶ谷有咲。有咲でいいよ」

「私は戸山香澄だよ。私も下の名前でもいいよ。よろしくね、翔斗くん」

「私は花園たえ。おたえでいいよ」

「最後は私かな? 私は山吹沙綾。さーやでいいよ」

「よろしく。有咲、香澄、おたえ、さーや」

なんでか、牛込さん以外下の名前で呼ぶことになった。後で牛込さんに下の名前で呼んでいいか聞いてみよう。

今はそれより、聞きたいことを優先しよう。

「そういや、この5人で何かやってるの?」

「よくわかったね。私たちPoppin' Partyって言うバンドをしてるんだよ」

「知ってるよ。というか友達がかなりの大ファンだから色々曲を聞いてたよ」

「そうなんだ。ありがとう」

「ねえねえ、翔斗くんはどの曲が好きなの?」

「うーんそうだなあ…… 走り始めたばかりのキミに」かな」

「そうなんだね。あの曲に思い入れがあるから好きって言ってくれて嬉しいな」

こんなことを話しながらお昼を6人で過ごした。

昼休憩が終わる前に俺の席の近くから髪がオレンジの人が走ってきた。

「ねえねえ、君が新しく来た転校生でしょ?」

「あっはい。転校生の石崎翔斗です」

「私のはぐみ。北沢はぐみだよ。よろしくね、しょうくん」

「こちらこそよろしく!!」

なんだか元気な子だなあ。まあ、こういう子なら全然OKですけどね。

少し喋ってたらチャイムがなったので北沢さんと別れ、席に戻った。

そこから残りの時間も牛込さんの力を借りて何とかこなした。

少し時が流れ放課後

「牛込さん、今日はありがとう」

「うん、困った時はお互い様だもん。そうだ、今日ポピパの練習があるんだけど、見に来る?」

「俺が行ってもいいの?」

「たまには他の人に見てもらいたいっていうのもあるけど、香澄ちゃん呼びに来るかなって思って先に言ってみたの」

「へー、いつもは香澄が引っ張ってるのか。そういう事ならそろそろ来るかな?」

「りーみりん!!翔斗くん!!」

「噂をすれば」

「ってやつだね」

「2人で何話してたの?」

「ただの雑談だよ。ね、石崎くん」

「そうだな。ところで香澄こそどうしたんだ。俺に用でもあったのか?」

「そうだった。翔斗くん、ポピパの練習にこない?」

「その事ね……別にいいよ。というか、ついさっき牛込さんにも同じこと聞かれてたんだよ」

「そうなんだ。それなら早く行こ!!」

「香澄ちゃん、待ってろ!!」

「香澄!!バンドメンバー置いていくなよ!!牛込さん、走るよ!!」

## バンドの生演奏ってすごいよね

香澄が走って行ってしまった。それだけ練習が楽しみなのかな？  
と思っていたのだけど……

「香澄走るの早すぎだろ。俺があんまり運動してないのもあるかもしれ  
ないけどさ……キッツ」

そう思ってしまうくらいに速かった。途中でさーややおたえにも  
会った。

この2人も香澄があんな速度で走っていったのは初めて見たらし  
い。

ちなみに、有咲は先に練習場へ行ってるらしい。てか場所聞いてな  
いんだが!?

「今日の練習場所は有咲ちゃんの蔵だよ」

「ありがとう牛込さん……って蔵!？」

「えっ?何か変なこと言ったかな?」

「蔵ってあの蔵だよね?」

「思ってる蔵で合ってると思うよ。場所分らないと思うからここか  
ら一緒に行こっか」

「お願いします牛込さんm( ) ( )m」

牛込さんに連れられて有咲の蔵に着いた。

「ここが有咲ちゃんの蔵だよ。早く行こ!!」

「お、お邪魔します」

そのまま牛込さんに連れられて蔵の地下に行く

「やつと来た」

「おつかれ。りみも翔斗くん連れて来てくれてありがとうね」

「やつととか言わないでくれよ。香澄が場所を教えてくれなかったか  
らだな」

「えへへく忘れてた」

「今回は牛込さんがいたからいいけどさ……もし居なかったらど  
うするつもりだったんだよ」

みんなが苦笑いしてる…… 香澄はこんなことよくやってそう

だ。

「まあいいけどさ……俺は何したらいいの？」

「そこに座って私たちの演奏を聞いて欲しいな」

「人に教えることがあまり無いから伝えるのが下手かもしれないがそれでもいい？」

「そんなの気にしないよ」

「了解」

「それじゃあ行くよ」

5人の演奏が始まった。曲は俺が好きな。走り始めたばかりのキミに。だった。練習とはいえ本番さながらの空気が蔵の中に走った。(CDで聞いてたのとは全く違う。やっぱりベースの音だったりドラムの音だったり感じがしつかり聞こえてくる。やっぱり生で聞けるのっていいな)

そう考えてるうちに、演奏が終わってしまった。

香澄が汗を額に浮かべてた。ほかの4人も肩で息をしている人や、汗を浮かべている。みんな練習でも必死にやってるんだな。俺が練習する時とは大違いだと思った。

「どう、だった……かな？」

「すげえ……凄えよみんな!!俺興奮した!!俺からはほとんど言うことないと思う!!」

「よかった」

「ただ……」

「ただ…… (ゴクリ)」

「香澄は少し歌ってるって走るかな？」

「ホントに!？」

「うん。ベースとかドラムといったリズム隊の音を聞いてみるといいかもね」

「わかった!!少し意識してみるね」

「あとは……牛込さん」

「わ、わたし？」

「少し自信が無い箇所があったように聞こえたかな？」

「うっ……なんでわかったの?」

「少しテンポが遅れてたからね。もうちよつと自信もつてやれるように練習してみる?」

「うん、そうしてみるね!!」

「あとの人は特に問題なしかな?」

「じゃあ次は翔斗くんの番ね?」

「ふえ?俺の番?」

「うん。だってギター弾けるでしょ?」

「どこでそれを!?!」

牛込さんからすつとスマホを差し出された。そこに映っていたのは。

(うわあああ!!昔撮って練習してた弾き語りのやつ!!なんで牛込さんが知ってるの!?!)

そんなことを思っていると、おたえが蔵にあったアコギを持ってきてた。

「……分かったよ。みんなが演奏を聴かせてくれたお礼だよ。何やればいい?」

5人で相談し始めた。数分待つて牛込さんがリクエストしてくれた。

「それじゃあ、”宿命”をお願いしてもいいかな」

「了解。それじゃあ聞いてください」

　　少年弾き語りを披露する

久しぶりに弾いた。引越しなどでここ1週間弾いてすらいなかったけど大きなミスは特になかったと思う。

「どうかな?」

『……………』

これはどつちなんだ!?無言つて1番反応に困るんだよ。誰か何か言ってくれ。

「す、凄いよ!!翔斗くん」

「そ、そんなになかな?」

「うん。私は翔斗くんの声好きだな」

「そう行ってくれる人いなかったから少し嬉しいな」  
「ねえ翔斗くん」

「どうしたの牛込さん？」  
「私にベースを教えてくれないかな？」

「……教えて欲しいって言ってくれてるんだからその思いを無下にしちゃダメだよ。俺でよければ教えるよ」

こんなことを言っちゃったから今日はしっかり教えることにした。  
「このフレーズはここをこう押さえる方が牛込さんは弾きやすいかな？」

「……ホントだ!!かなり弾きやすくなったよ。ありがとう石崎くん」  
そうやって教えてたら練習終わりの時間になった。

「久しぶりに弾くと楽しいな」  
「久しぶりだったんだ!!」

「引越しの準備とかしてて弾く時間なかったからこんなにも上手く弾けるとは思ってたけどね?w」

「また聴かせてね」  
「マジすか……タイミングが合えばな」

さくつと片付けをして蔵を後にした。4人とはいえ、女子高生のみだから一緒に帰っていった。香澄やおたえ、さーやと別れ、牛込さんと2人になった。

「今日はお疲れ様!!」  
「ホントだよ。まだこれ転校初日なんだよね」

「そうだったね。でも楽しかったでしょ？」  
「もちろん!!」

そこから少し無言で夜の街を歩いた。  
「……あのねっ!!」

「どうしたの？」  
「これ、俺の連絡先だから。ベース教えるんだったら知ってた方がいいでしょ?予定も合わせやすいし」

「ありがとう。またベース教えてね？」  
「俺なんかでよければ」

俺は新しい連絡先、しかも女の子のものを手に入れた。



## 商店街巡り（其ノ壺）

花咲川学園に転校してから早いもので一週間が経ち、学校生活は毎日楽しかった。

今日は転校してからの初めての土曜日。予定としては、10時からバイトの面接があるけど、それが終わり次第フリーなんだよな。

とりあえずバイト先のファストフード店へ向かうことにした。

「つとここだな。とりあえず中に入るか」

「いらっしやいませ!!」

「バイトの面接しに来ました、石崎です」

「君が石崎くんね。店長呼んでくるから少し待っていてくれるかな?」

「わかりました」

言われた通り待つことにした。

「石崎翔斗君だね」

「はい」

「なぜこのタイミングでバイトを始めようと思ったんだい?」

「最近ここに引越してきたので、バイトをやってみようと思いました」

「いつシフト入れる?」

「基本的に水、土、日の3日間です」

「それなら明日からよろしくな」

「はい、わかりました」

バイトの面接ってこんなだっけ? まあいいや。文句は主にいくだろうし? w

(メタすぎるんだよなあ)

面接が終わってスマホを見るとGINEが来てた。

「石崎くん今大丈夫かな?」

「今バイトの面接終わったからここからはフリーだよ。どうかし

た?」

「いや、特に何も無いんだけどね」

「石崎くんがここに来てからあまり経ってないから、この街を案内しようと思って」

「言われてみたらそうだ。」

学校までの道のりに商店街があるのは覚えてるけど、その中になんの店があるか分かんないし、近くに何かあるのかとか知ついても損は無いもんね。

「ありがと。ならこの後行こつか。1時くらいでいい?」

「うん、ちょうど練習が終わるタイミングだよ」

「じゃあ自分がそっちに迎えに行くよ」

「ほんとに?それなら、C i R C L Eで待ってるね」

「そうと決まれば早く家に帰って準備しますか」

2時間ほどが経って、C i R C L Eで待っていると牛込さんたちが外に出てきた。

「あつ、翔斗くん!!」

「おー香澄。って抱きつくな!!」

学校と変わらないなあとか思ったけど、現在9月中頃なの。美少女にハグされて嬉しいって思うじゃん。外じゃなかったら良かったかもだけど、現実暑いと思えないんだよね。こんな事してたら本題忘れるところだったわ。

「そういや、いったん帰る?流石にベース持ったままだときついよね?」

「そうやねくやからちよつと待ってて欲しいな」

「えっなになに、どこか行くの?」

「牛込さんが行ってる最中に話すから、ちよつと待っててくれ。それなら待ってるから早く行ってきな!!」

「うん!!」

そう言っつて、一旦ベースを置きに帰った牛込さんを視界端に収めながら、香澄たちに説明を始める。

少年説明中

「え〜!! いいないいな〜!! 私も連れて行ってよ」

「わかったわかった。他のみんなはどうする?」

「楽しそうだし私もついて行こうかな?」

「私は家の用事があるからパスかな」

「私は行かねえからな」

「え〜有咲〜。一緒に行こうよ!!」

いつもあんな調子なのか…:…なんか用事あったりするかもしれないのよね。

「お待たせ〜」

「おっ、りみりん戻ってきた!!」

「そうだな。じゃあここで解散ってことで」

来たのは、誘ってくれた牛込さんに香澄とおたえの4人になった。

「どこから行こっか?」

「まあ3人に任せるよ」

「それならあそこからだよね」

3人の意見が揃ったようだ。俺はどこに行くのかはわからないので、香澄たちの後を歩くことにした。

「着いた〜。まずはここからだよ」

「山吹ベ〜カレー…:…ってまさか」

「あつ、気づいた?」

「まあまあ中に入る?」

「いらっしやいませ!!」

「さーや!!」

「わわっ香澄〜」

「やっぱりさーやの家の店だったか」

「うん。このパンはどれも美味しいんだよ!!」

「じゃあ何買おうかな?」

「私のおすすめはチョココロネだよ」

「ゆ(・ヾ・\*) フムフム…:それじゃ俺はチョココロネとメロンパンにしようかな」

「はい、チョココロネとメロンパンで280円になります」

「どうぞ」

「これからもよろしくね」

「おう。手伝い頑張ってなさーや」

こんな感じで山吹ベーカリーを後にし、次のお店へ向かった

「次はね〜近くにある北沢精肉店に行くよ〜」

「なんでだろう…：また知り合いがいる気がする」

〜数分後〜

「あつ、かーくん!!」

「はーぐみ!!」

こころ辺は知り合いが多いんだなあ。

「こんにちは、北沢さん。なにかおすすめのないの?」

「しようくんもいたんだ!!おすすめはコロツケだよ〜」

「コロツケね〜ならそれ4個もらおうかな?」

「はーい合計120円ね」

「はいよー」

「ありがとね〜」

「そーいやなんで4つ買ったの?」

「ほい」

『えっ?』

「これが答えだよ…：欲しくなかったか?」

「ありがと!!」

「でも、貰ってもいいの?」

「ほら、商店街の案内に付き合ってくれたし…：」

なんかこつちが恥ずかしくなってきたな。

「ほれ」

「はむっ…：」

「貰える時に貰つとかなないと、のちのち後悔することもあるんだぞ」

そーい言いながら笑って見せた。

「ほれ、食べながらでもいいから歩み進めよ?ほかにもあるでしょ」

「もちろん。ほら、3人とも次行くよ!!」

香澄がおたえと牛込さんの手を握って走る。その後を俺が追うと

……案内する人置いていくのかよ？w

他にもあるらしいので追うと3人が足を止めた。その店の看板を  
見ると……

《羽沢珈琲店》……ここには知り合いないよな？

## 商店街巡り（其ノ二）

前回の最後に『羽沢珈琲店』に辿り着いた。4人は店の中に入る。  
〃カランカラン〃

「いらつしやいませ。あつ、香澄ちゃんたち。ここに来るの珍しいね。何かあったの？」

「つぐみちゃん!!今日はね、翔斗くんを案内しに来たんだ!!」

そう言つて俺の事を指さす。まあ多分だけど、自己紹介した方がいいよね？

「さつき香澄からさらつと口から出てきた翔斗くんこと石崎翔斗です。花咲川学園の1年で、先日転校してきました」

「石崎くんね。私は羽沢つぐみです。学校は羽丘学園だけど学年は一緒だから、タメ語でもいいよ」

「了解。羽沢さん、よろしくね」

「こちらこそ!!つて忘れるところだった。香澄ちゃん、今日は4名?」「うん」

「それでは席にご案内しますね」

そう言われて羽沢さんに案内してもらつた席は、窓側のBOX席だった。

「ご注文が決まりましたらお呼びください」

そう言つて、羽沢さんはカウンターの奥に戻つて行つた。

俺たちは駄乗りながら注文する品を決めた。香澄がアイ斯拉テ、おたえと牛込さんはアイスカプチーノ、俺はアイスコーヒーを頼み、軽食としてミックスサンドを4人で分けて食べることにした。

「お待たせしました。アイ斯拉テとアイスカプチーノ2つとアイスコーヒーです。サンドイッチはもう少々お待ちください」

そう言つてすぐにサンドイッチも持つてきてくれた。

「サンドイッチもお持ちしました。ごゆつくり「つぐぐ」ってひまりちゃんたち!!」

誰か来たようだ。

「来たよ」

「蘭ちゃんたちも!!いつもの席でいい?」

「うん。願うするね」

俺らの隣に來た。

「あつそうだ。隣に香澄ちゃんたちがいるからね」

「香澄たちが?…珍しいね」

「なんでも、新しく來た子に商店街の案内をしてるんだってき」

「付き添いつてどんな子?」

「ひまりちゃん落ち着いて」

これは隣の席に行つた方がいよね?多分…確認取るか。

「香澄、牛込さん、おたえ。ちよつと隣の席に行つてきていい?」ゴ

ニヨ

「隣の席に?なんで?」ゴニヨ

「なんか交友関係広げれそうだからかな」ゴニヨ

「私達も一緒に行こうか?」ゴニヨ

「いや、俺一人だけで行くわ。隣の席にいてて空気が険悪になりそう

だつたら止めてくれ」ゴニヨ

『了解(\*・ω・)ゞ』ゴニヨ

そう言つて俺はトイレを借りに行く振りをして、隣の席の子たちに接触を試みようとする…

「うわつ!」「わつ!!すみません」

タイミングが被つて隣の席の人とぶつかつてしまった。

「大丈夫ですか?」

「あつはい。大丈夫です。こちらこそすみません」

「ひまり、大丈夫?」

「うん、何とかね」

「翔斗くん大丈夫?」

「あつ、牛込さん。大丈夫だよ」

「あつりみく!!」

「わつ、ひまりちゃん」

「やつほー蘭ちゃん」

香澄は赤メツシユをしている子に抱きついていた。

「香澄、あんまり抱きつかないで」

「とか言いながら、嬉しいと思っっている蘭なのでした〜」

「モカ〜!!」

仲がいいことがこれでわかった気がする。ところでこの人たち（羽沢さんも含む）を、俺はどこかで見たことがある気がする……

そんな時に羽沢さんが近づいてきた。

「みんな、注文の品持ってきたよ〜」

「ちようど良かった。羽沢さん、このプチカオスな空間をどうにかしてほしいかな」

「確かにプチカオスな空間が……この空間が無くなるまで2人で話でもする?」

「あつ、はい」

プチカオスな空間を横目に見ながら喋っていた。その時に見たことがある事を伝えたら、羽沢さん曰く

「私たち、5人でバンドやってるんだよ。Afterglowって言うんだけどね」

言われて考えてみると、友達が見せてくれたライブ映像の中に映っていた記憶がある。『ガルジャム』だったっけ? って言うことを伝えたら。

「はい、出ましたよ。あの時から成長してるのでまたライブを見に来てくださいいね」

「やっぱりそうだったんだ。Afterglowのキーボードの子が正確に弾いてたから印象に残ってたんだ」

「えっ!？」

「なんならギターの子のソロだったりヴォーカルの子もみんな上手だったけど、曲調に合わせて鍵盤のタッチを変えてたからバンドのことを考えてるんだなって思ったんだ」

「……／／」ボン

ここまで言っつて羽沢さんの方を見ると、少し顔が赤くなっていた。

「あ、ありがとう、翔斗くん／／」

そう言われて手を握られていた。ここの街の女子たちはいかなんせ



ん距離が近い気がする。俺の元々いた街の子は、ここまで近くなかった気がするぞ。

その後、羽沢さんが元に戻ったのでAfterglowのみんなの自己紹介してもらった。その時に知ったのだが、Afterglowの皆は5人とも幼なじみだそうだ。

その後美竹さんに呼ばれて、

『あたしの幼なじみを泣かせたらどうなるか……わかってるよね』

とかなり怖い顔で言われたので頷くしかなかった。

『絶対に怒らせないようにしよう』

そう心に強く思った。

初バイトは色々起こる？

商店街巡りの翌日、昨日面接の終わりのタイミングで「明日から」と言われたのでバイト先であるハンバーガー店に向かう。

「おはようございます!!」

「おはよう、石崎君。今日は昼から女子が2人来るからよろしくな」  
「了解です」

とりあえず、店長に言われた人が来るまで店長にレジの使い方を教えてもらい、午前中はレジを中心とした接客をした。午前中の仕事の終わり際に、見た事がある人が来た。

「いらっしやいませ。って氷川さん」

「あら、石崎さん。バイトですか？」

「はい、と言っても今日からですが。ところで、ご注文はお決まりですか?」

「ポテトのLサイズを2つと、アイスのミルクティーのMサイズで」

「はい。ポテトのLサイズを2つとアイスミルクティーのMサイズです。ね。他にご注文はございますか?」

「いいえ」

「かしこまりました。合計で800円になります」

「ここで疑問に思ったことがあります、接客しながら質問することにした。」

「少し気になったんですけど、氷川さんポテト好きなんですか?」

「……どうしてそう思ったのですか?」

「いや、Lサイズのポテト2つって、自分からしたら昼から食べる量じゃないし、ハンバーガーを頼まずにポテトと飲み物だけってことはもしかしたら……って思ったので」

氷川さんはコクつと小さく頷いた。多分肯定なんでしょう。そのあと、氷川さんは

「この事は他言無用でお願いしますね」ボソツ

と言つて頼んだ商品を持ちレジを離れた。

その後、店長から昼休憩の時に、なにか店の商品を頼んでいいと言

われたので、ハンバーガーのセットを頼み、それを昼休憩の時に食べた。もちろん、お金は支払ったよ。

午後になると、厨房の仕事に変わり、どこに何が置かれてるかを確認した。確認が終わった時に、朝店長が言っていたバイトの方が来た。

「丸山さん、松原さん。この子が新入りの石崎君だ。色々教えてやってくれよ」

「石崎翔斗です。よろしくお願いします」

「丸山彩です。これからよろしくね!!」

「松原花音です。よろしくお願いします」

自己紹介をした後、午前中と同じことを続けた。ちなみに、丸山さんと松原さんもレジの方をしてくれたので、午前中より仕事が捗ったのは言うまでもないだろう。

バイトが終わり、彩さんと花音さんも同じタイミングでバイトが終わったようなので、一緒に帰ることにした。

「そういえば翔斗君はこの高校に通ってるの?」

「花咲川です。最近転校してきたばかりですけどね」

「そうなんだ〜ということとは噂の転校生って翔斗くんのことだったんだ〜」

そう言うつてことは2人つて先輩なのか。呼び方変えなきやな。それよりも噂だよ。すっごい気になるから聞いてみよう。

「噂ってどんな……?」

「えつとね、普通だけどなにか裏がありそうな転校生」だったかな?」

「なにか裏がありそうになって……無いわけじゃないですけどね」

少しだけ顔をひきつりながらそう答えた。

「まあ、今は何も聞かないでおくね」

「そうしてもらえると助かります。それより、なにか飲み物いります?買ってきますよ」

「そうだね〜、私はアイステイーをお願いしますようかな」

「私は飲み物よりアイスが食べたいな」

「それなら適当に買ってきますね」

そう言つてコンビニに入った。

「イラツシャイマセー」 「シャツセー」

とりあえず、アイステイーとお茶をドリンクホルダーから取り、彩先輩から頼まれたアイスを手に取り、レジに向かう。そこにはモカがバイトをしていた。

「おつす、モカ。今日バイトだったのか」

「あつ、しよーくん。今日はどうしたの？」

「バイトの帰り道になにか欲しいなつて思ったから買いに來ただけだよ」

「そうなんだ。えつとね、合計480円になりまゝす」

そう言われたので、丁度の量の小銭を支払った。

「んじゃバイト頑張れよ、モカ」

「アリガトウゴザイマシタ」 「アーシタ」

外へ出ると、彩先輩と花音先輩がガラの悪い男たちに絡まれていた。

「ねえねえ君たちく！俺たちと一緒に遊ぼうよく！」

「いや、えつと、私たち待ち合わせしてる人がいるので」

「別にいいじゃく。その人に断り入れてさく」

「金ならあるからさく！一緒に行こうぜく！」

嫌がつてるのが目に見えてわかる……のに無理やり連れていこうとしている。

「……あのさ」

『……ん？』

『翔斗くん!!』

「嫌がつてるじゃん。手、離してあげたら？」

「なんだてめえ。俺たちとやり合うつて言うのか？」

「別にやり合いたい訳じゃないんですが……」

「それじゃあとつとと去りな。それともなんだ？痛い目に合わないをやめねえつてか？」

相手も戦闘態勢に入る。まあ止めないなら痛い目にあうのも仕方

ないかなと思ってる。

「止めないよ？君たちが2人から離れるまではね」

「そうかそうか。ならば文句はないな」

そう言っつて不良の1人が俺の顔面めがけて殴りかかってきた。

バチン!!

それを俺は片手で受け止めた。そして、殴ってきた手を少し強めの力で握り返す。

「イデデデデデデ」

「どうします？これ以上続けるならもうちよつと力加えますけど？」

そういうと、殴ってきた奴の首が横に振られた。

ということに離してやることにした。

しつぽを巻いて逃げていったことを確認し、彩先輩たちのところに行く。

「ごめんなさい、遅くなりました」

「翔斗くん、怖かったよぉ」

「うえっ、彩先輩!？」

彩先輩が抱きついてきた。そう思った次の瞬間、服の裾を引っ張られた。引っ張られた方向を見ると、少し涙目になっている花音先輩が引っ張っていた。

「……怖かった。ものすごく怖かったよぉ……」

どうしたもんか。落ち着いてもらえないと買ってきたものを渡せないな。とか考えてたら、彩先輩が離れてくれた。

「ごめんね、あんな事しちゃって」

「謝らないでください。それより、アイス買ってきたので食べてください」

「うん、ありがとう」

あとは花音先輩だけだ。

「花音先輩、歩けますか？」

小さく頷いてくれたので、2人の家の方向まで歩いていくことにした。

「ありがとうね、翔斗くん」

「いえいえ。あんなことの後で女の子を一人で帰らせるなんて出来な  
いですよ」

「それじゃあまた次のバイトの時にね」

「はい、それじゃあ」

そうやって彩先輩を見送った。さてと、あとは花音先輩だけだな。

「それじゃあ行きましょっか」

「……う、うん」

ん？歯切れがすっごく悪いぞ。何かあったのか？そう思いながら  
花音先輩に先導を任せた……のだが、

「ふええ……どこどこ？」

花音先輩の声が商店街中にこだましました。

その後、花音先輩がスマホに住所を入力し地図を見ながら帰って  
行ったのだが、地図が見れないようなので俺がそのスマホを見ながら  
道案内をして帰った。のだが……

「花音先輩、この先を左に……ってどこ行くんですか!?!そっち右です  
よ?。」

「えっ?ふええ!!間違えてた〜」

こんな感じのことが何回も起きた。本来30分くらいで着くはず  
なのにこういう事をしていたら50分かかった。

「ここだよ、ありがとう翔斗くん」

「こちらこそ良かったです」

「あの、さ」

「どうしたんですか?」

花音先輩がスマホを出してきた。

「連絡先交換してくれる……かな?」

「分かりました」

こうして、牛込さんに続いて2人目の女子の連絡先を手に入れた。

テストが好きな人はごく少数だと思う

転校から1ヶ月たったある日、終わりのHRで担任からこんなことが言われた。

「はい、明日からテスト期間ね。赤点を取らないように勉強頑張つてね〜」

先生も……。テスト作り頑張ってください。なんて思ってもテスト期間が変更されるわけじゃないから、俺もそろそろ勉強しますか。

「後、石崎君はHRの後で職員室来てね」

……what!!俺なんもしてないんだが……みんながこつちを見るしよお。まあ仕方ないか……

そんなことを思いながら職員室に行つて先生の席に進んだら、先生がこんなことを話し始めた。

「石崎君、学校にはもう慣れた?」

「そうですね。クラスに男子がいらないから馴染めるかなって思ってたけど、何とか慣れました」

「そう。なら、これやってみない?」

そう言つて渡されたのは1枚の紙で、そこには「生徒会推薦状」と書かれていた。

「へっ……えっ!!なんで俺なんかに」

「だって、石崎君ってしっかりしてるもの。周りの子のこともしっかり見てるし、生徒会にいたら助かる人材なのよ!!」

先生からそう言われると断りづらいな……まあ舞い降りてきたチャンスだから当たって砕けるだ!!いやまあ砕けちやダメなんだけどな?w

「……先生、やってみてもいいですか?」

「それじゃあ、生徒会長の人に連絡しとくわね。それじゃあ先生からの連絡は終わり。帰っていいわよ」

「はい、失礼します」

やっぱり職員室は苦手だ。この学校はそんなことないけど、前の学校の職員室はすごいピリピリした雰囲気があるんだもん。あと、タ

バコ臭かったし。

まあ、そんな話はさておき、今日はバイトないから勉強やろつと。家に帰ってから先に勉強を済ませた。と言っても前回のテスト範囲が分からないから最近習った部分を中心に復習したから1時間程度で終わった。

その後、スマホを見たら牛込さんからGINEが来てた。

「今週の土曜日に勉強会しようと思うんだけど一緒にしない？」

「そうなんだ。一緒にやってもいい？」

「うん。香澄ちゃんたちに連絡しとくね」

「お願いするね」

場所は明日言ってくれると信じてもう少し勉強しよう。もしかしたら教えないといけなかったり……そんな訳ないか。

連絡から2日経ち、勉強会の日になった。場所は前に行ったことがある。有咲のこの蔵だった。一応お邪魔する立場だから個別包装お菓子でも持っていこう。

「お邪魔しまーす」

「おお、来たか。香澄たちはまだ来てないぞ、と言うより翔斗が一番なんだよな」

「マジ？そんな早いかな？」

そう言ってから時計を見ると待ち合わせ時間の15分前だった。

「確かに早い気はするが、遅いよりマジだろ？」

「それはそうだ。まあゆっくりしといてくれよ」

「うっす(？・・？・・?)!!」

そう言って有咲は蔵から出たので、俺は教える準備をした。教えられるのは数学と理科ぐらいだけだね。

そんな事考えてたら香澄以外が全員揃ってた。

「香澄が遅いのはいつも通りなの？」

「まあ遅刻はしないけど結構ギリギリに来ることが多いね」

「あつやっぱり？」 ガチャ



「みんなくお待たせ〜」

「かくす〜み〜!!遅いぞ〜!!」

「確かに遅かったね。とりあえず勉強会初めよつか」

こうして、Poppin, Party+俺という組み合わせで勉強会がスタートした。

勉強会は2人1組でやることになっていて、俺と香澄、おたえと有咲、牛込さんとさーやという組み合わせだ。

というか、俺はいつまで牛込さんって呼ぶんだ？そろそろ香澄たちみたいに下の名前で呼びたいんだが……勝手に呼んだらいかん気がするから、後で本人に了承取ろうかな。

という訳だから俺は香澄と勉強している。ちなみに、今は数学を2人ともしている。

「香澄、そこ計算ミスってるぞ」

「えっ……ホントだ。もう1回計算してみる」

香澄が計算してる間に俺も別の問題を解く。えっと、『3本の当たりを含む10本のくじを3人の人が1本ずつ引く時、2人目だけが当たりくじを引く確率を求めなさい。ただし、引いたくじは元に戻さないこととする』……こりやあれだな。7/10×3/9×6/8……つまり7/40ってことになるはずだ。

この計算し終わった時に、ちょうど香澄も計算が終わったようで、話しかけに来た。

「出来た〜!!」

「タイミングよすぎん？まあ確認するな」

さつき指摘したところは直ってるし……新たに指摘するところも……ないな。多分あってるだろ。

「俺が見る感じ直ってるから、そのまま進めてみ？応用以外は出来ると思うから」

「うん、やってみる!!」

香澄がこれから問題は、今回のテスト範囲の肝となりそうな箇所だから、間違えてたら丁寧に教えようと思う。

〜数時間後〜

「つ、疲れた〜」

「お疲れ、香澄。きりがいいから休憩する?」  
「する〜」

俺は鞆の中に入れてたシェア用のお菓子じゃないのを取り出して食べた。それを香澄がじつと見てた。

「いる? ビターチョコだけど」

香澄は目を輝かせて頷いた。という訳でチョコを1粒渡した。

渡してから周りを見たらみんなの視線が俺に向いていた。

「な、なんだ……?」

みんなの視線を追うと、俺の持っているチョコレートだった。

「あーこれか。言ってくれたらあげるのに」

苦笑いしながら机の上にチョコレートの袋を置いた。そしたら、ほかの3人より牛込さんの手が素早く動いた。

うん、みんな可愛い。ほんとに尊死するかもしれない。

ちよつとした小休憩を挟みつつ、俺たちは来るテストに向けて勉強会をがんばった。

勉強会で香澄は集中的に数学をしたおかげか、テストでは平均点よりちよつとした点数だったけど、赤点は余裕で回避してた。他の子も赤点はなかったようではほんとに良かったよ。

ちなみに、教えてたかいがあったのか、数学の点が俺の中で過去最高点(96点)を取ってしまった。順位も10番台だったから良かったよかった。

あつ、牛込さんの呼び方は下の名前でもいいし、あだ名でもいいってことを本人が言ってくれたので、俺は「りみ」呼びをするようになった。さすがに「りみりん」呼びはキツイですから。

また、勉強会したことを何故か上原さんにバレてたように、羽沢珈琲店に行った時に色々聞かれてビックリしたことはまた別のお話。

友達に頼まれたら……

テストが終わって数日が経ち、バイトとかでもへまをかまさないの  
で特に平和な日常をすごしていた。

「翔斗くん!!」

「おう、さーや。どうした?」

「明日って暇?」

「ちよつと待つてる。予定確認するからな……明日は空いてるぞ?」

「それじゃあ手伝って!!」

「ええと……何をだ?」

「明日、私の店で新商品が発売されるんだけど、その時って大体お店が  
超満員になるのね」

「つまり、さーやの店の手伝いに入ってくれということだな」

「そういうこと。お願いできるかな?」

「分かった。何時にそっちに行ったらいい?」

「6時とかでもいいかな?」

「……起きねえかもしれないや」

「それじゃ今日うちに泊まりに来る?」

「へっ!?!」

「まあ帰ってから親に聞かなきゃ行けないんだけどね」

逃げ場がないのかと思っちゃったよ。でも、さーやの親の許可が取  
れたとして、年頃の男女がひとつ屋根の下で一夜を過ごすんだろ……  
ヤバくね?さーやの親が居るとはいえね。

「……さーやは、いいのか?」

「へ?……どういうこと?」

まさかの無自覚かよ!?

「いや、だってさ。年頃の男子を家に泊めるんだぞ。さーやの親に  
だって迷惑がかかるし……」

「私は気にしないよ?だって私の家弟と妹がいるし、手伝ってくれる  
ならそれ相応の報酬的なものは渡さないといけないしね」

「そう……なら、許可が取れたら連絡してくれ……と言っても連絡先

知らないんだったな」

こんな事があつたからさーやと連絡先を交換した。

さーやから午後6時くらいに連絡が来た。

「今日、私の家に泊まっていいってさ」

「そつか。なら今からそつちに向かうけど、何か買う物とかある？」

〃

「ちよつと待ってて。今から聞いてくるから」

さて、連絡が来るまでに準備をすませますか。服とか、タオルとか財布とかね。

準備し終わって、家を出ようとした時に連絡が来た。

「特に無いらしいからそのまま来ても大丈夫だよ」

「了解(\*・ω・)ゞ」

さてさてさくて、向かうとしますか。

「来たぞ〜」

「いらつしやい、翔斗くん。とりあえず中に入って!!」

「お邪魔しますペコリ(・ω・)——)」

「いらつしやい翔斗君」

「今日明日とよろしくお願いします。千紘さん」

やまぶきちひろ

山吹千紘さん。さーやこと山吹沙綾の母親であり、沙綾の下に弟と妹の2人いて計3人姉弟の母親だそうだ。だとしたら若く見える。その反面、身体が弱いようで、沙綾から休んで欲しいと裏側で偶に聞いている。

「いいのよ。今日明日って手伝ってくれるんだもの、これぐらいなら当然ですよ。ただ……」

「ただ……」

なんでだろう……ヤバい爆弾発言が飛び出してきそうな気がする。「手伝ってくれる子が男の子だとはね。うちの紗綾にも春が来たのかと……」

「えちよ、急に何言い出す」「お母さん!!」「えちよ、さーやまで!!」

「あらあら〜ごめんなさいね!!」

「もお……ごめんね私のお母さんが変なこと言い出しちゃって……」

「あはは……まあ別に慣れてるからいいよ。正直、そう思われても不思議ではないし」

「へっ!?」

「俺も親だったらさーや位の年の女の子が家に男の子を泊めるって言われたら、俺も千紘さんみたいに思うかも……って」

「翔斗くんまでそんなこと言うの〜!!」

数分間、さーやが口を聞いてくれなくなったのは言うまでもないだろう。

「……ところで、沙綾さん」

「……何」

「……明日って何すればいいんですかね」

「……言うの忘れてたね。はいこれ」

そう言って渡されたのはマニュアルだった。

「基本的に接客+レジ打ちだから頑張ってね」

そう言ってさーやは立ち去って行った。……後で謝らなきゃな、さすがにずっとこのままだと歯切れ悪いし。

一応マニュアルを確認しておいた。まあバイトのやつと特に変わらなかつたかな。

マニュアルを読み終わり、千紘さんに沙綾の部屋を確認してから部屋に向かった。

コンコン「さーや、石崎だ。入るぞ」

「……どうぞ」

そう言われたので入る。要件を早く伝えなきゃ。

「……ごめん、言いすぎた」

「……怒ってないよ?」

「へっ!?だってあの時」

「あの時は心の整理をしたの」

「おっおう。ならいいんだがな……ハア心配して損した」

「なんの心配?」

「さーやに嫌われたかと思った」

「あんなことで翔斗くんのことを嫌わないよ!!」ところで、本当の目的は?」

「ああ、忘れてた。俺の寝る場所ってどこなんだ?」

「……あつ!!」

「〃あつ〃てなに、〃あつ〃て」

「……忘れてた」

「……………へっ?」

「だから忘れてたの!!」

「マジ?」

「マジマジ!!」

「俺適当な場所でもいいよ。なんならリビングの椅子とかでも。身体さえ休まればいいからさ……」

「それはダメ!!」

「あっはい」

さて、どうしたもんかね。椅子とかじゃダメ。かといって、俺の泊まる部屋がない……………八方塞がりじゃねコレ?

「……………寝る?」

「へっ、今なんて…………?」

「だから、〃私の部屋で寝る?〃って言ったの」

固まっちゃったよね……………思考はもちろんんだけど、体も。

「ちなみに、拒否権は…………?」

「ないよ?」

マジかく詰んだ／( ^ 〇 ^ )／

この日はあまり寝れなかったことは言うまでもないだろう。ちなみに、何も起きてないですよ、ええ。決して、香澄たちにバレたとかそんな事は決してないので。(訳：ポピパの定期通話会でさーやがポロツと口走ってましたね。その後の反応は風呂入ってたからわかんなかったけど。)

翌日、6時に目が覚めた俺は、階段をつたって1階に降りた。もちろん、服を着替えるためだ。

服を着替えた俺は、山吹家のリビングに向かうと千紘さんたち親組が起きてた。

「おはようございます」

「あら、早いよね？もう少し遅いのかと思ったわ」

「休みの日なら、いつもは7時起きですからね。こんなに早い時間に起きたのは今日だけですよ」

「朝ご飯ができるまでもう少しあるから、ゆっくりしといていいわよ」  
「いえ、そんな訳には行かないですよ」

「あらそう？なら、手伝ってもらおうかしら」

少しお願いしたら、手伝わせてもらえた。主に食器類を出すことだったり、出来た品々を机に持っていくとかだったんだけどね。まあこんなことをしたら時刻は6時半になっていた。

「それじゃあ、翔斗君に私から最後の仕事。沙綾たち3人を起こしてきてもらえないかしら」

「了解しました」

さてと、起こしに行きますか。とは言っても、誰から起こすべきなのかなんて、全くわかんないんだけどね。

ちなみに、沙綾の下2人……純くと紗南ちゃんは同じ部屋で過ごしてるようなので、先に2人を起こそうかな。その方が楽そうだし。

「純くん、紗南ちゃん。朝だよ起きてね〜」

1人ずつ体を揺すったらすぐに起きてくれた。

「おはよう、純くん、紗南ちゃん。朝ご飯できたってさ。下降りてきてね」

『はい』

うん。一人っ子だからこんな感じの弟や妹がほしかったなうんて言つて変わるほど世界は甘くないもんね。切り替えてさーや起こしに行こう。

コンコン「さーや、起きてるか。千紘さんが朝ご飯できてるから降りてきてだつてさ」

「んー分かったー」

起きてるようで何より。さてと、呼び終わったから俺も降ります

か。

俺が下に降りたら、純くんと紗南ちゃんが抱きつきに来た。

「お兄ちゃん。お姉ちゃん起きてきた？」

「タブンネ。今頃顔を洗ってるんじゃないかな？」

とか言ってたらさーやがりビングに入ってきた。

「おはよう、さーや。さて、全員揃ったことだし食べよつか？」

「そうだね。それじゃあ……」

『いただきます』

朝ごはんを食べ、手伝いのために山吹ベーカリーのエプロンを着た。来てから鏡みただけどあんまり変わんねえや？w

「……んじややりますか。今日はよろしくね、さーや」

「こちらこそよろしくね、翔斗くん」

お店を開けたら、このお店の常連客の人が多く来た。その時に常連さんから「あら、新しい子？」って結構な頻度で聞かれて、その時に毎回毎回「今日だけのピンチヒッターですよ」って適当に言っていました。ほとんど事実だしさ。さらにさらに、途中であの方が……

「どもども〜」

モカが来た……1人で。

「新作のパン買いに来たよ〜ってしよー君なんているの？」

「それはカクカクシカジカウマウマサンカクってことなんだよ。そして、新作のパンはここにあるよ。」

「おお、ありがとうねー」

まあモカは新作パン以外にも色々買って行ったんだけどね。トレイ2つつ買っててビックリしちゃったよ。さすがにレジ打ちも時間かかるよ。

「ところでモカ、いつもこんな量買ってるの？」

「うん。沙綾のところのパンは美味しいからね」

「それはわかるが……こんな量のパン1食で食べないぞ。こんな量を買った1日の食事がパンでも行けるレベルだし……太らないの？」



「大丈夫。ひーちゃんにカロリー送ってるから」

上原さん……どんまいです。まあホントなわけがないと思いますけどね。

まあこんな感じのことも起きたけど、それ以外は特に何も起きなかつた。空いた時間に沙綾と変わって商品の品出しをしたりもした。

午後からは沙綾1人で捌ききれなくて言われたし、心做しか客足が減ってる気がしたので、お言葉に甘えて純くんと紗南ちゃんの遊び相手になった。子供って体力あるね。俺も体力付けないといけないかな……H A H A?。

ちなみに、いつも以上に繁盛していたようで、俺の給料はメロンパン2個と食パン2斤だった。また機会が出来たら手伝おうかな……あつ、今度はお泊まりなしで。

まあ、《沙綾の家にお泊まりしたこと》についてはかなり質問責めされたけどね？w（特に沙綾以外のポピパのメンバー）

## ゲームと現実でエンカウント

さーやのうちに手伝いに行った翌日、夜が暇だったので、久しぶりにパソコンを起動した。

パソコンを開いてやることはNeo Fantasy Online。通称NFOというオンラインゲームだ。

このゲームはリリース初期からやっているものの、最近は引越しや学校のことにも慣れなきやいけないこともあり、めつきりとNFOとにらめっこするする機会が減ってしまっていた。

ログインしたら、Rin-Rinさんと聖墮天使あこ姫さんがオンラインになっていた。迷惑じゃなかったら一緒にやらせてもらおうかなと思つてたら、Rin-Rinさんからパーティー申請が来たので了承をしてパーティーに入った。

“りんりんさん、あこ姫さん、こんにちは”

“あつ、シヨウさん!!久しぶり!!”

“引越しとか大丈夫そうでしたか?”

“まあ、引越し先の学校が元女子校だから慣れるまでは時間かかったかな。でも、引越しから2ヶ月くらい経ったから慣れたよ”

“そう。それなら今日から復帰に……なるのかな?”

“そうだね。テスト期間とかバイトがある日以外ならやれるようになるかな”

“そうなんだ。じゃあ今日は3人で一緒にできるね!!”

“そうだね。それじゃあ今日はどこ行こうか?”

“それならこことかどうでしょう?”

言ってくれたクエストは最近スタートしたらしいイベントクエストの1番上の難易度だった。

“マジ!?これってイベントの1番上の難易度じゃん!!このメンバーで勝てるの?”

“勝てる……と思います”

“なんでそんな歯切れ悪いの?”

“このクエスト、2人で挑んだらギリギリ勝てなかったんです”

“だから俺を誘ってこのクエストに挑むわけですね”

“そう!!お願いしてもいいかな?”

“とりあえずやってみよう。勝てたらそれでいいし、負けたら作戦を練ろう!!頑張るぞ!!”

“(・▽・) / おー!”

りんりんさんがクエストを受注し、目的の場所に向かう。その途中に、3人での連携を試した。

ちなみに、りんりんさんウィザード。あこ姫さんはネクロマンサー。俺はグラディエーターだから、バランスがいい。まあ、ヒーラーはいないけどそこら辺はアイテムを使って何とかなるだろう。

“目的地ってここら辺ですかね”

“そうだよ。ここら辺だから気合い入れといてね”

“了解(\*・ω・)ゞ”

“敵ってどんな感じなんですか?”

“確か、水色のドラゴンだったよ。引つ掻きと咆哮とブレスをやつて来たよ!!”

“それ以外は?”

“特殊行動とかは見えないかな。あるとしたら、尻尾を使つての範囲攻撃ぐらいだと思うよ”

“そうか。りんりんさんたちは魔法系の職業だから基本的にはタンク役になりますか。その間に、りんりんさんたちは高威力の技を叩き込んでください”

“了解(\*・ω・)ゞ”

“うん!!”

“それじゃ、やるぞ”

そう言つて奥に進むと、青白いドラゴンがいた。

“情報通りの外見だな……さて、やりますか”

俺は剣を抜いてドラゴンの前に立ち、戦闘を開始した。

初めの方はりんりんさんが《エクスプロージョン》の魔法を使ってダメージを与え、あこ姫さんは魔物の下僕を召喚し、魔物にダメージを与えていた。



「分かったよ（\*^\*）!!」

りんりんさんが《ソフト》を放つてからすぐ、あこ姫さんが聖属性の魔法《ホーリーストーム》を放った。

ドラゴンに魔法がしつかり当たって、奴は倒れた。

「ふう、終わったな。お疲れ様です」

「流石だね、あこちゃん」

「やった〜、りんりに褒められた〜」

「結構時間がかかったから。今日はここまでにしますね」

「はい、それじゃあまた」

「またね〜!!」

ログアウトしたら22時を超えてたのでさくつと風呂に入り、明日の準備をしてから就寝した。

〜YO☆KU☆ZI☆TU〜

「今日から生徒会の人になるのか。あんまり気が乗らないけど……先生からの推薦だから仕方ないな」

学校に行く前からこんな感じがいいのか……なんて思いながら学校の授業が進めた。まあ、あんまり授業内容は頭の中に入らなかつただけどね？w。

放課後になって、生徒会室に向かった。

「失礼します」

「いらつしやいましたね、石崎君」

なんと氷川先輩と有咲が生徒会室の中にいた。

「氷川先輩……しかも有咲もいたのか」

「私がいたら悪いか？」

「全然構わない。それより、お2人の奥にいる人は？」

「わ、私は……生徒会長の……白金、燐子……です」

うわお!!まさかの生徒会長さんもお出迎えですか。

「あつ、俺は石崎翔斗です。これからよろしくお願いします」

「はい……よろしく、お願いします」

3人から仕事の内容を聞き、6人くらいの人数でこの量の仕事をこなしてたのかと思うとゾツとしてしまった。

「仕事は分かりましたか？」

「あっはい、何とか……ですが」

「それなら良かったです」

「教えてもらっただけで日が暮れていたので、氷川さんと白金さんと帰った。」

「今日帰ったら、昨日みたいにNFOのイベント回さないとな」

「えっ、翔斗さんってNFOやってるんですか？」

「昨日まで忙しくて出来なかったの。氷川先輩もやってるんですか？」

「ええ。白金さんに誘われてやってみたら意外と面白かったの」

「先輩のイメージと違う……けど、同じ趣味で話せる人が増えて良かったです」

「私たちも、翔斗君の……お手伝いしましょうか？」

「ありがとうございます。でしたらお2人とも、NFOで俺とフレンドになりませんか？」

「そういつて、小さめにちぎった紙に自分のキャラ名とIDを書いてお2人に渡した。」

「帰ったらフレンド申請しておきますね」

「氷川先輩は笑顔でそう言ってくれた。」

「あれ、この名前って……もしかして」

「白金先輩、どうかしましたか？」

「……石崎君って、NFOでのプレイヤーネームって『シヨウ』なんですか？」

「ええ。それがどうしたんですか？」

『Rin—Rin』ってプレイヤーご存知ないですか？」

「知ってますよ」

「その『Rin—Rin』ってプレイヤー……私、なんです／＼」

「………へっ!？」

まさか……昨日一緒のパーティーでプレイしている方が隣にいますか?!?これって夢!?

「あら、お2人はゲーム内で知り合いなんですか？」

「……そうだったみたいですね。自分、驚きを隠せないですよ」

「私も……です／＼」

そんな事もありながら氷川先輩と白金先輩を家に送った。まあ、氷川先輩を送った時に先輩の妹さんらしき人が氷川先輩に抱きついてた光景を見たり、白金先輩とNFO以外の共通の趣味(読書のこと)について話したりした。

## 羽沢珈琲店での出来事

俺が生徒会に入ってはや1週間が経ち、久しぶりに羽沢珈琲店に行くとうふと思いいったので、すぐに支度をして家を出た。

商店街に繰り出して数分が経った時、とある声が聞こえた。

「ふええ……また迷っちゃったよ」

これって花音先輩だよ。俺の知り合いでふええなんて言う人1人しか居ないもん。

「花音先輩。大丈夫ですか？」

「あつ、翔斗くん。大丈夫……じゃないかな」

あつやっぱり？今日はどこに行こうとしてるんだろう？

「今日は羽沢珈琲店に行こうとしたんだけどね、迷っちゃったんだ」

まさかの目的地が一緒だった。なら一緒に行った方がいいよな？行かなかつたらまた迷いそうだし。

「それなら、一緒に行きませんか？」

「えっ、いいの？」

「俺も羽沢珈琲店に向かう途中だったので大丈夫ですよ」

「それなら……お願いしようかな」

「はい、それじゃあ行きましょうか」

羽沢珈琲店に向かおうとした時、花音先輩に俺の肩を叩かれた。

「どうしました？」

「今回は……手、繋いでもらってもいい、かな？」

断ろうとかは微塵も思わなかったし、思えなかった。何故なら、花音先輩が上目遣いをしながらお願いしてるんだよ？うちのクラスの男子なら全員倒れるするんじゃないやね？とか思ったけどうちのクラス男子いないんだったわ。

「分かりました。絶対に離さないでくださいね」

く松原花音視点く



今日は千聖ちゃんと羽沢珈琲店でお茶会の予定だから、道に迷うことも考えて20分前には家を出ただけ……

「ふええ……また迷っちゃったよ」

何回も通ってるはずの道なのに迷っちゃいました。うーん、どうにかしなきゃなって思ってたら……

「花音先輩。大丈夫ですか？」

彼が……翔斗くんが来てくれた。

「翔斗くん。大丈夫……じゃないかな」

「今日は羽沢珈琲店に行こうとしたんだけど、迷っちゃったんだ」

翔斗くんはまたかみみたいな顔をしてるのかなって思ってたけど、そんな素振りを一切見せずに

「それなら一緒に行きませんか？」

って言うてくれた。

「えっ、いいの？」

「俺も羽沢珈琲店に向かう途中だったので大丈夫ですよ」

「それなら……お願いしようかな」

「はい、それじゃあ行きましょうか」

って言うてくれたのはいいんだけど……このままじゃ、前みたいに私が道を間違えるよね。翔斗くんは気づいてないし。こうなったら

……エイツ!! (—ム—) \* ) 〃 o (・▽・c) ヽツ

「どうしました？」

「今回は……手、繋いでもらってもいい、かな？」

我ながらあざといことをしたなって思った。だって、男の子に上目遣いしてるんだよ。こっちが恥ずかしいって／

「分かりました。絶対に離さないでくださいね」

そう言うて手を差し出してくれた。あの時と同じで安心するな。

↳石崎翔斗視点↳

花音先輩の手を握りながら羽沢珈琲店に向かって数分が経ったと

き、ふと思ったことがあるので聞いてみた。

「そういえばなんですけど、待ち合わせの人とか居ないんですか？」

「……あつ。ど、どうしよう。その子に連絡してないよ〜」

「なら、今から連絡しましょう。その友達も心配してるかもしれないですよ？」

花音先輩は鞆を探し始めた。30秒くらいで見つかったようで、そのまま友達に連絡していた。電話の内容を聞こうとしたら周りの人から不審者に思われるので、少し距離を離して。しかし、花音先輩を見失わないような距離を保っていた。

「俺が、もう少し早くこっちに来てたら……もうちよつといい人生歩めたのかな」ボソツ

「うん。どうかしたの？」

「いや、なんでもありませんよ。それより早く行きましょう？」

柄にもなくそんなことを呟いてしまったが、花音先輩には聞こえていないようだった。

羽沢珈琲店に着くと、店の前で花音先輩を待つてる人がいた。

「花音!!どこにいたの!!電話にも出てくれなかったから何があったのかと……」

「ごめんね、千聖ちゃん。また道に迷っちゃって……でも、翔斗くんに助けてもらったんだ」

「そうなのね」

花音先輩を心配してくれた人は人……千聖さんだったかな?その人が微笑みながらこちらに向いた。

「白鷺千聖です。花音を助けてくれてありがとうございます」

「石崎翔斗です。たまたま通りかかった時に花音先輩が見えたので、助けただけです。それじゃあ、花音先輩。楽しんできてくださいね」

「あら、逃がさないわよ。」

「へっ?」

「一緒にお茶していけばいいのに」

「千聖さん……逃げるなんて人聞きの悪い。それに、花音先輩とお茶

会してるお2人の中に俺が入ったって話すことないですよ?」

「最近、花音から『翔斗くんがね』って結構言ってるからそこら辺のことが気になってるのよ。同席してくれるわね?」

千聖さんの顔は笑ってるけど、後ろに纏ってるオーラが怖い……ふと花音先輩の方を見ると、〃私は構わないよ〃って感じの雰囲気醸し出してる。断ったら断ったで、千聖さんに(社会的に)殺される気がするから、逃げ場なんてないんですね。理解しました。

「……分かりました」

「ふふ。それじゃあ行きましょう」

俺は悟った。千聖さんは絶対に怒らせてはいけない……と。

千聖さん先導で羽沢珈琲店の中に入る。

「いらっしやいませ!!チサトさんカノンさん。それにシヨウトさん!!」

「若宮さん!?!ここでバイトしてたの!?!」

「あら、イヴちゃんと知り合いなの?」

「そうですね。あんまり……というか1度も話したことがない気もしいんですが、同じクラスの一員なので」

「そうですよ。なかなか話す機会がないので、ワタシ寂しいんですよ」

「そっか。次に学校で会う時には俺から話に行くよ」

「本当ですか!!ワタシ待ってますね」

俺がこう言うと、若宮さんは目を輝かせながら俺の手を握られた。こんな感じだと、若宮さんは香澄やはぐみと同じ感じなんだろうな。

「イヴちゃん、積もる話も程々にしてね。今日は私たちお客さんだから席にご案内してね」

「分かりました!!それではこちらにどうぞ!!」

ああヒヤツとした。まあ千聖さんと花音先輩は俺の驚いている顔を見てニヤニヤしてたけどね。

あの後、千聖さんが花咲川に通ってて、しかも俺の1つ上で、さらに女優をしていることを知って驚いたりした。さらには、

「私、女優でありながらアイドルバンドのベーシストでもあるの」

なんて言われてさらに驚いたのは言わなくても驚くだろう。

「あら、彩ちゃんと同じバイト先だからってつきり彩ちゃんから聞いているものだと思っただけど〜」

「そうですね。そういった話はあまりしないので……」

「また機会があれば練習見に来てもいいのよ?」

「……前向きに検討致します」

「よろしい。さて、本題に入ろうかしら。あなた、花音とどんな関係なの?」

「どんな関係と言われましても……友達ですかね?」

「なんで疑問形なのかしらね」

「それは……俺が『女性のことが苦手だから』だと思います」

「なぜそう思うのかしら?」

「……これに関しては今は話したくないんですが」

「そう……わかったわ」

すみません千聖さん。俺の中で整理出来たら話しますよ。

「でも、いつかは話してもらおうからね」

「いつになるかは分かんないですけどね」

そこからは当たり障りのない普通の会話が続き、そのままお茶会?的なものはお開きになった。そのまま俺は店に残り、閉店ギリギリまでゆったりと過ごした。

その間に感じた違和感は、注文の品を持ってきてくれた時に見た羽沢さんが少しフラついてたことかな?まあ、本人に聞いても隠しそうだけど、ダメ元で聞いてみるとするか。

「羽沢さん。ちよつと来てくれるかな?」

「ん?どうしたの、石崎くん」

笑顔で話してくれるけど、少し顔色が悪いように感じた。

「俺の思い過ぎしだといいんだけど。羽沢さん、体調悪い?」

「えっ?どうしたの急に」

「歩き方もフラフラしてたし、顔色も普段より悪いように感じたから体調が悪いのかなって思ったんだ」

「うーん……どうなんだろう? 仕事中に立ちくらみとかはしたけどそれ以外は特に違和感はないかな」

いやバリバリあるじゃん。さては我慢してたな。それはそうとして、分かったのはいいがどうやって休ませるかな。

「そっか……とりあえず今日の仕事はほぼ終わりだろうから、それが終わったらしっかり休むこと。それでもいつもの体調に戻らなさそうなら、明日の朝ここに連絡して」

「うん、そうさせてもらうよ。ありがとう」

そう言っつて羽沢さんはまた笑顔を作ってくれた。残りのことは大丈夫そうだなと思つた俺はお会計をし、家に帰つた。

↳羽沢宅 つぐみの部屋↳

「どうしよう、石崎くんと連絡先交換しちゃつたよ」

GINEにある彼とのトーク画面を見ながら呟いた。

彼が些細な体調の変化に気づいてくれた。それだけでも嬉しいのに、連絡先も交換出来た。

「やつぱり石崎くんは、私のことをしっかり見てくれてるんだなあ……」

彼と初めて会つて話した時もそう。あの時だって、バンドの中で私の音が印象に残つて言つてくれた。

蘭ちゃんの歌声やモカちゃんのギターの音色じゃなくつて、私の音を覚えてるつて言つてくれた。

こんな事を考えてるだけで頬が熱くなってくる。

もうちよつと彼のことを知りたいな……つてどうしたの私!!こんなこと考えるなんて。石崎くんが言つた通り、ほんとに風邪ひいちやつたのかな。

そう思つた私は体温計を探しに下に向かつたついでに、洗面所に向かつた。

「顔が赤くなつてる……今日は早く寝ようかな」

そう思つたから、お母さんたちに寝ることを伝え部屋に入った。

く石崎視点く

「今日も色々あったな。花音先輩たちとお茶しながらお話したし、羽沢さんとは連絡先交換したし」

そんなことを呟きながら帰っていると、電柱の近くにダンボールが置かれてた。その中にいたのは……

「子猫……か。しかも白色の。律儀にダンボールに拾ってくださいって書いてる。やっぱり、ここでもこんなことをする人はいるんだな。」  
子猫の顔を見ようとしたらその子と目が合った。

今にも泣きそうな目。その子の体は、寒さからなのか少し震えていた。推定だが、生後4ヶ月も経ってないだろう。

「誰も見てないよな……よし」

俺はダンボールを持ち上げ、その子猫を持ち帰った。

そのまま帰宅し、子猫の足を拭きながら羽沢さんのGINEを見る。そこには交換してすぐの何も話をしてない画面が映っていた。

「勢い任せとはいえ、いきなり交換は悪手だったかな」

なんて考えながら猫のことについてパソコンで調べた。

そうしたら、猫を育てるのに色々と道具が必要らしいので、明日の帰り道にペットショップによるかな。

猫の餌は……市販のだとお金がかかるらしいし、自分で作っても何とかなるだろう。自炊ついでに作ってあげたらいいしね。

あとはこの子の名前だけだ。何にしようかな、白色だし、宝石系統の名前がいいかな……ムーンストーンとかダイヤモンドとかパールとか。ん？パール……これでいいじゃん!!

「よし、今日から君の名前は『パール』だ。これからよろしくな」

小声で子猫にそう言うと、眠りながら笑ったているような顔になった。

翌朝、羽沢さんから「体調戻ったよ。心配してくれてありがとう」というGINEが来たことで安心したのは、言うまでもないだろう。

猫とゲーム好きに悪い人なんていない

子猫を拾った翌日、猫用品を探すためにショッピングモールの中にあるペットショップに向かった。

「イラツシヤイマセー」

「さてと、猫用品の売り場は……つとここにあつたのか」

お目当ての猫用品を探しに来たのだが……いかにせん種類が多いな。猫砂だけで数十種類もあるぞ。どれ選べばいいんだろう。

数分悩んで、そこまで大きくない猫用トイレと、飛び散りにくい効果がある猫砂を買った。キャットタワーとかはすぐに買えなかったので、爪とぎ用のマットと、もしかしたら外に出るかもしれないで小さめのゲージも買った。

にしても、ベットなんて買わないからこんなに準備用品に値段がかかるなんて思いもなかった。

猫用品を買ったあと、最近ゲームセンターに行つてないことに気づいたのでゲーセンに向かった。

「うおー!!ゲーセンも広いな。ここならあれが多くあるかn……おつ5台もあるじゃん!!つてあそこにいるのは……」

俺が探した台は、和太鼓が1台の筐体に2台付いていて、右から流れる赤と青の音符をタイミングよく叩くゲームだ。

そこに、高身長で姉御肌である巴と巴の妹さん?っぽい人が2人でやっていた。俺が気づいたのが1クレのラストの曲の途中だったので終わるのを待つてから声をかけることにした。

「よお巴!!」

「おお翔斗か!!奇遇だな!!お前がこんなところに来るとはな。何しに来たんだ?」

「最近子猫を飼ったから、猫用品を買いに来た帰りにここに寄つただけだよ。そういう巴はなんで来たんだ?」

「アタシか?アタシはあこと遊びに来てるんだよ!!」

「あこ……つて隣にいる子かな?」

「はい!!私は宇田川あこつて言います!!」

おおくすっごい元気だ。俺こういうった感じの子は好きだぞ。

「俺は石崎翔斗って言います。これからよろしくね、あこちゃん」

「はい!!これからよろしくね、しょう兄!!」

しょう兄って……そう言うってことは俺より年下なのかな?まあいいや。

それから、巴&あこVS俺で太鼓の○人のバトルを2クレに分けてした。なんか知らんけど巴もあこも高難易度曲2回連続で投げてきたので、仕返しとして最後の曲で超高難易度の曲を投げてやった。まあ俺が投げた曲はみんなズタボロだったけど何やかんやで楽しかった。

その後、クレインゲームにみんなで挑戦中である。というのも、あこが好きなゲームの限定ぬいぐるみがあったからだ。

「うーん、取れないよ(泣)!!」

そう、現在彼女はこのクレインゲームに湯水のように百円玉を溶かしていた。金額で言うると2500円くらいだろうか……

「ねえあこちゃん。ちよつと変わってくれないかな?」

「うん、いいよ。けどね、あこも取れなかったからしょう兄も苦戦するかも」

「やって見なきゃわかんないさ」

そう言うって俺は300円筐体に滑り込ませた。1回目を取り出し口に近いところに置き、2回目でぬいぐるみの向きを変えた。そして、3回目は重心を考慮してぬいぐるみの後ろの方を持ち上げたら……

「……うっし!!取れた」

なんと取れてしまったのだ。普段なら失敗しやすいやり方なので、ワンセットでやれたことに驚いてしまった。

「ほい。これどうぞ、あこちゃん」

「えっ、でもしょう兄が取ったから、しょう兄が貰ったらいいのに……」

「欲しかったから挑戦したんでしょ?だから、これはあげるよ」

「うう……しょう兄、ありがとう!!」



そう言われたあと、あこに抱きつかれた。可愛い妹さんの願いを叶えただけで抱きつかれたのだから、役得なのかな？

そのまま、巴たちと別れて公園によるとかすかに猫の声がしたので、その公園に立ち寄ることにした。

「確かここら辺から聞こえたはず “ニヤーン” ……ってこんなところにいたわ」

公園の端っこの方で猫が6匹くらいいた。可愛い……………ってこんな事してたらうちの子猫のパールがお腹空かせちやうって思ったのだが、この空間から離れることは許されないような目線で猫たちに見られた。

「……………仕方ないか。今日だけだぞ」

「友希那く今日もあそこ行くの？」

「当たり前じゃない、リサ」

猫たちと触れ合って数分後、こんな声がかすかに聞こえたのだが、そんなに気にせず猫たちと触れ合っていた。

「ねえ友希那。先客がいるみたいだよ？」

「あら、珍しいわね」

その声に驚いた俺は、後ろを振り向くと2人の女性がこちらを見ていた。

「えっと……………その……………見なかったことにしてくれませんか？」

「いや〜ビックリしましたよ。公園の隅だからなかなか人が来ないとばかり思ってたので」

「それはごつちのセリフよ。あそこには誰もいないと思ってたもの」

「ね、ねえ友希那。なんで急に仲良くなってるの？彼とは初対面だよね？」

『猫好きには悪い人はいないのよ（んですよ）』

「そ、そうなんだ」

この人とはいい関係になりそうだ。(小並感)

「あつ、自己紹介忘れてました。俺は石崎翔斗です。1ヶ月半前に引越してきて、今は花咲川に通ってます。一応1年です」

「そう、私は湊友希那よ。羽丘2年よ」

「アタシは今井リサ、友希那と一緒に羽丘2年だよ」

「友希那先輩とリサ先輩ですね」

「翔斗くん、アタシのことはリサって呼んでね」

「さすがに先輩なので……リサさんで許してください」

「まあ、本当は敬語も無しで話したいんだけどね……初日だからこれで許してあげる」

「そういえば、友希那先輩「友希那さん」……友希那さんって猫が好きなんですすよね?」

「ええ、そうよ」

「俺、新しく猫を飼い始めたんですよ。見ます?」

「ええ、見させてもらおうわ」ズン (食い気味)

「わ、分かりました……この子なんですよ」

そう言って昨日撮った写真を友希那さん達に見せた。

「これって……子猫だよね」

「そうなんです。ただ、この子は捨て猫だったんですよ」

「……そういう事ね」

「分かったっぽいのであまり深くは言いませんが、この子が心を開いてくれる接し方ってありますかね?」

「……少なくとも、このにいてる子たちとは、接し方を変えないといけないわね。距離を今のままにしておくとか、猫と目が合ったらすぐにそらしたりとかね。今ならネットで色んな情報が出てくるからなんとも言えないけどね」

「なるほどです。ありがとうございます」

「いいのよ、こんなところでやーんちゃん好きな人に出会えるなんて思ってたのだから」

「ごちらこそ、引越す前は猫好きなんてほとんど居ないに等しかったですから」

「それなら、にやーんちゃん好き同盟組みましょう。連絡先を交換しましょう」

「いいですね。家のにやんこの可愛い写真撮れたら送りますね」

「あつ、アタシとも連絡先交換しよ!!」

「分かりました。友希那さんついでにリサさんにも送りますね」

「おつアタシにもくれるんだ。ありがとね!!」

「それじゃあそろそろ帰ります。猫がお腹すかせて待ってると思うので」

「ええ。これから仲良くしましょう」

「アタシとも仲良くしてね」

「もちろんですよ」

俺は順番に2人と握手してから家に帰った。

帰宅してすぐパールにご飯をあげた。パールにバレないように動画を撮って、友希那さんとリサさんに送った。

あとからリサさんに聞いた話だが、動画見たあとに友希那さんが尊死しそうになったらしい。

その動画を送った数分後に羽沢さんからGINEが来た

「今週の平日の放課後で暇な日ってある?」

「月曜と木曜は生徒会で水曜はバイトだから、火曜と金曜なら今のところは暇だよ」

「それじゃあ金曜日の放課後に私の店に来てくれないかな?」

「了解した。何持っていけばいい?」

「筆箱があれば何とかなるよ」

「了解。それなら金曜日は4時半くらいにそっち行くな」

「うん、お願いね」

## A f t e r g l o wとの共演（勉強）

前回のラスト、羽沢さんに連絡を貰ったのでその日までまったりと過した。

ただ、木曜日に英語の抜き打ち小テストがあつて香澄とおたえが再テストになったから、生徒会が終わったあとに有咲と一緒に教えまくった。2人とも英語苦手すぎだったので教える側も辛かったです、はい。

その間も、パールの可愛いシーンが多く撮れたから、撮るたびに友希那さんに送りまくったら毎回毎回尊死したことを友希那さん本人から聞いてしまった。

よし、友希那さんに何かしら交渉する時はこれを使おう。まあ交渉することは今のところないんですけどね。

そして、現在金曜日の放課後……そう、羽沢さんに呼ばれた日である。

カランカラン「いらっしやいませ!!」

「こんにちは羽沢さん」

「あつ、石崎くん。来てくれたんだ!!」

「まあ羽沢さんのお願いだからね。(・▽・) イイコトイツヨ!!」

「みんなはもう来てるから、ちよつとの間お願いね」

そう言われながら、羽沢さんに席を案内してもらおう。

「蘭ちゃん、石崎くん来たよ」

席にいたのはA f t e r g l o wのメンバーだった。

「ありがとう、つぐみ。手伝い頑張つてね」

「うん、頑張つてくるよ!!」

羽沢さんが手伝いに戻る。とりあえず案内されたから、席に座る。見た感じテスト勉強……だよな？範囲もうちと似てるしな。

若干2名は顔が死んでるよ。そんなに嫌かね。

「石崎、何教えられる?」

「英語以外ならどれでもいいけど……人手足りないなら英語でもいいぞ」

「見ての通り、ひまりと巴の第4回補修回避ミッションだよ。いつもなら私たちが教えてるんだけど、今回は範囲が広くて自分自身の勉強で精一杯なんだよね」

「それで、俺が呼ばれたと。とりあえず、テスト範囲書いてるやつあるか?」

「それならここにあるよ」

「おつ、ありがとう青葉さん」

羽丘のテスト範囲をチェックする。確かに広いな。数学は三角比全般に二次関数の最後の方をちよこつとか完全に殺す気やん。

「ん、何となくわかった。先に聞く、三角比嫌いな人。正直に手を挙げてみ?」

4人とも上がつちやつたよ。どうすつかない……そういえば、家で1人で勉強した時に三角比の公式とかまとめたノート作ったなよな。それを使おう。

「美竹さん。三角比の公式まとめたノート持って来たいんだけどいいかな?」

「うん、分かった。早く持ってきて」

「ダツシュで持ってきます」ダツ!!

〜翔斗が出て少し経った羽沢珈琲店の内部〜

「蘭ちゃん、ブレンドティー持ってきたよ……ってあれ、石崎くんは?」

「石崎なら今三角比の公式をまとめたノートを取りに帰ってる。あと数分したら戻ってくると思う」

「そうなんだ。私も教えてもらおうかな?」

「いいんじゃない。つぐみもできるか怪しいんでしょ?」

「そうなんだよね。三角比の初めの方はできるんだけどsinθとか出てきた辺りからこんがらがってきちゃって……」

「あたしもそこら辺からはやばいかも……」カランカラン

「持ってきたぞ。ほい、三角比のことをまとめたノート。つて羽沢

さんいたんだ」

「うん、今日は早めに仕事上がらせてもらっただ」

「そっか。なら、一緒にやる？」

「お願いしてもいいかな」

「喜んで」

席の場所は俺の左右に美竹さんと羽沢さん。向かいに左から青葉さん、巴、ひまりの順で座っている。

「おかえり、とりあえず中見ていい？」

「どうぞ。そこまで綺麗な字じゃないから、見ずらかったら言つて「了解」

自分なりにまとめたノートが人の役に立つなんて思ってもみなかったわ。

本人以上に使いこなしてくれてるんだが……特に巴とひまりの解くスピードが上がってるんですけど。写してる……訳ではなさそう。

所々ミスがあるけど計算慣れしたら無くせるミスだから、数こなせばできると思いたいです。

そんなでもって、美竹さんと羽沢さんが古典だとさ。

「それじゃあ美竹さん。助動詞『る』、『らる』の意味を答えられるだけ答えてみて」

「えっと……尊敬、受身、可能、あとなんだっけ。つぐみわかる？」

「私もその3つしか覚えてないかな。モカちゃんは覚えてる？」

「残り1個は自発でしょ？アタシは「うそかじ」で覚えたよ」

「そう。テストで聞かれやすい箇所だからしっかり覚えとこうな」

「わかりました、石崎先生!!」

「ちよい待ち。いつから俺は先生になってたんだ？」

「えっ、私たちに教え始めた時からだよ」

「マジイ!?!ならしっかり教えるからな」

そう言つて隣を見た瞬間、巴とひまりの顔が青ざめていくのが見えた。

「おふたりさーん。ハイライト戻しt…… そうだ、こうしよう」

「何かいい方法があるの？」

「今回のテストで俺のだす課題をクリアしたら1つだけお願い聞いてあげるよ」

「マジか!？」

「マジマジ!!」

「やった〜!!私頑張るよ!!」

ちなみに、出した課題は

美竹さん：学年順位150位以内

青葉さん：学年順位50位以内

羽沢さん：学年順位30位以内

巴とひまり：英語と数学50点以上+他全ての教科で赤点回避

その後、6人で勉強してたのだが、終わろうと思った時に事件は起きた。

「どうしてこうなった」

状況を説明しよう。羽沢さんが寝てる……いや、単に寝てるだけならいいんだけどね。俺の肩に顔を乗せて寝ちやつてるのよ。ちなみに、学習会は終わったよ。羽沢さんを起こさないようにね。

美竹さんいわく、「いつもお店の手伝いとか生徒会とかで忙しく働いてるから疲れが溜まってると思うからそつとしてあげて」どのこと。

俺は動けないからブレンドコーヒーを飲みながら苦手な英語を勉強している。すっごい飲みづらいけど。

「うーむ、寝てることに気づいてから約半時間。そろそろ肩がこるんだけど、起こすのは癪に障るから羽沢さんの部屋に背負っていくかな?」

マスターに許可をとって羽沢さんの部屋に向かう。女子の部屋つて入ったことないからわかんないけど、自分の家の中より整理されるよな。そんでもって清潔だ。

「とりあえず、羽沢さんとベッドに下ろしてつと。さて、ここからどうするか」

考えられることは2つ、羽沢さんが起きるのを待つのかそのまま去

るのか……どつちがいいんだろう。

俺なら起きた時に人がいたら焦るもんな……去るか。

そのまま外に出てお店の方に戻ると、少しお店が忙しそうに見えた。

「マスター、手伝った方がいいですか？」

「おお、ありがとう。でもそろそろ閉店時間だから大丈夫だよ」

「良かったです」

「それより、引越してきて2ヶ月くらい経つけどここでの生活には慣れたかい？」

「そうですね……通ってる学校が元女子校ってこともあったり、今までにやった事のないことをやってるといいうのもあったんですけど、流石に慣れました」

「そうか。君のお母さんにこの地域に引越すことを勧めて良かったよ」

そうだったのか。お母さんからは「友達に勧めてもらった」としか聞いてなかったから。色々と判明してきた。というかうちのお母さん、羽沢さんの親と友達だったの!?意外と世間って狭いんだなあ。「君の過去も、お母さんから聞いているよ。だけど、知っているのは私だけだし、誰にも伝えることは無い。だから安心して生活するのいい」

「ありがとうございます。それじゃあそろそろ帰りますね。お代置いときますね」

そう言ってお店を後にした。

「いつから聞いてたんだい、つぐみ」

「お父さんが石崎くんのお母さんにこのら辺土地を勧めた所くらいからかな」

「そうか。今日は疲れてるだろうから、勉強も程々にして早めに寝なさい」

「わかった、お父さん」バタン

「さて、君ならどの子に話すかな……翔斗くん」



## アイドルの練習風景を見に行く（強制）

「翔斗くん。今度私たちの練習見にこない？」

俺は絶賛困惑中である。そりゃいきなりこんなこと言われたらこくなるよな。しかもバイトの帰り道にである。

「彩先輩、いきなりですね。急にどうしたんですか？」

「いや、特に何も無いんだけどね……」

「特に何も無いならパスしたいんですがダメですかね？」

「…… 千聖ちゃんに何されてもいいんだね？」

「どうしてこのタイミングで千聖さんのことが出てくるんですかね」

「…… なんとなく？」

「なんとなくなんです。でも、千聖さんの場合ほんとに何でもできそう…… 「私が高なだって？」ンヒイイイイイイイ!!いい、いい、いつからそこに居たんですか!？」

「彩ちゃんと翔斗くんが2人で帰つてるところを見つけたから、走つて来たわ。ところで、何を話してたのかしら？」

「それはね…… 翔斗くんに練習を見に来てって言ってみただけど、なかなかいいって言ってくれなくて困ってたんだ」

「そう。なら……」

千聖さんがこちらに向いた。あれこの感じデジャブ……

「翔斗くんなら練習来てくれるよね（圧）」ニッコリ

うそん（。D。）拒否権消えた。だって千聖さんが微笑みながらお願いしてるんだよ。断ったら社会的に抹消される微笑みだよ!?!許可するしかねえじゃんこんなん。

「…… 分かりました。いつ見に行ったらいいんですか？」

「明日なら練習あるわよ」

「了解です。何時にどこへ行ったらいいですか？」

「あら、潔いわね」

「アンタ分かってんでしようが!!」

その後、場所と時間を聞いて解散した。

帰宅後羽沢さんから「全員目標達成したよ」というGINEとともに

に写真が送付されて来てたので確認し、呆気にとられてました。

「あの約束。言わなきゃ良かったや」

後悔先に立たずである。覚悟はしておこう。

翌日、昼から来てとの事なので午前中に手土産という名の差し入れを買いに行ってから、指定場所（事務所）に向かった。

着いてから先ず思ったことは……

「広!!。そして俺の格好つて不審者に思われてないよね」

こういったところにあまり入ったことがないから、開放感があることにまず驚いた。とりあえず受付にいる人に声をかけよう。

「すみません。パスパレの丸山さんと白鷺さんに呼ばれて来た石崎翔斗ですが……」

「石崎様ですね。確認を取りますのでこちらで少々お待ちください」

そう言っただけ……だよね。ガチで不審者とか思われてたらどうしよう。

そんなことを考えたら受付の人じゃない人が戻ってきた。多分この人が担当の人なのだろう。

「石崎様でしたね。確認が取れましたので、Pastel\*Paletteのスタジオまでご案内させていただきますね」

「あ、ありがとうございます」

「こちらこそ来ていただいてありがとうございます。では、参りましょう」

こう言われて、俺は事務所の中を進み、パスパレの練習部屋に進むことになった。

「こちらが、Pastel\*Paletteの練習スタジオになります」

受付から少し歩き、エレベーターに乗り、その後少し歩くとパスパ

レの練習部屋に着いたようだ。

「案内ありがとうございます。おかげで迷わずに済みました」

「いえいえ。何かありましたらご連絡ください」

そう言っつて、案内してくれた人は去っていった。

さて、着いたようなので中に入りますか。彩先輩と千聖さんに何度か面識はあるし、若宮さんはクラスで毎日あつてるから大丈夫だと思っうけど、残りの人も面識あつたりして……んまあそんなことないと思っうけどね。

コンコン「すみません、石崎です」

ノックをした時にめっちゃ心臓バクバクになりながらドアが開かれるのを待っていた。

「翔斗くん、来てくれたんだね!!」

彩先輩のお出迎えがあつた。知らない人が出てきたらどうしようっと思つてた俺の数秒を返してくれよw

なんてことは彩先輩に言っうわけもなく笑顔で、

「はい、来ましたよ」

とだけ言っうのであつた。

中に入ると、白鷺さんと若宮さん以外に知らない人が2人程いた。

とりあえず近くにいた彩先輩に差し入れを渡すことにした。

「彩先輩、これあげます」

「わあ、これっつて話題のカップケーキ!?翔斗くんが買っつてきてくれたの!?!」

「はい。ただ、ああいう系統のお店には俺1人だけでは並びたくないですっね……」

そう。俺が差し入れとして買っつていったのは、女性に話題沸騰中らしいカップケーキである。女性に話題沸騰中ということもあつてか、行列にはほとんど女性しかおらず、かろうじて男性が数人いたのだが、その人たちは全員女性の付き添いだつたため、男性1人で行列に並んでいたのは俺だけだつた。

ただ、売っつているカップケーキはデコレーションが可愛くなつており、見てるだけでこれは女性に人気沸騰中と分かるものだつた。

味はどうかのかつて?..... 売ってる種類は多かったですよ。

実食してないのかつて?..... 食べてないんで分かんないです。

調べたところによると、美味しいらしいですよ。

「翔斗くんから貰ったことだし、休憩にしましょうか」

『賛成(です)(\*▽▽)ノ』

白鷺さんの一声でパスパレのみんなが休憩に入った。その瞬間にこんなことを言われた。

「しようくん、自己紹介やってよ」

「自己紹介ですか?」

「うん。だってあたししようくんのことなーんにも知らないもん」

「確かにそうですね。俺は石崎翔斗と言います。2ヶ月くらい前にここに引越してきて、現在は花咲川に通ってます。一応、若宮さんと同じく1年です」

「へへ。あたしは氷川日菜って言うんだく」

「そうなんですな..... ってあれ?氷川さんにお姉さんか妹さんがいるんですか?」

「えくなんで分かったの?!」

「まあ、俺の知り合いに氷川さんいますし」

「そういえばお姉ちゃんが新しく転校してきた生徒がいるって言うってたけど、それってしようくんの事だったんだね」

「多分そうだと思います」

もしかしたらただけど、氷川さんって先輩かな?彩先輩や白鷺さんにタメ語だし。

「後はジブンですね。ジブンは大和麻弥って言います。日菜さんと一緒に2年で羽丘に通ってます」

「そうなんですな」

この後、俺を含めたみんなが雑談に10分くらい花を咲かせましたとき。

「それじゃあ、積もる話もそろそろ終わりにして練習再開しましょう

か」

「翔斗くん、しっかり見といてね」

「わかりました」

練習を再開してからすぐに思ったことは、ON/OFFのメリハリがしっかりしてるなと思って思った。休憩中は女子高生って感じなんだけど、練習中はしっかりアイドルになってる。なんて言うんだろ。う……そう!!纏ってる雰囲気ガラリと変わったって言うたら伝わりやすいかな。

「それじゃあ今日の練習は終わりにしよっか!!」

『お疲れ様でした!!』

練習を再開してから1時間ほどが経ち、彩先輩から練習終わりの掛け声があった。

「皆さんお疲れ様です。凄かったですよ」

「そう? そうだったら嬉しいな」

「ただ、彩先輩は噛みやすいのが少し目立ちましたかね」

「ガ————(OΔO)————」

『アハハハハ!!』

すみません彩先輩。ここまでみんなが笑うと思ってなかったです。

「でも、皆さん本当にかっこよかったですよ」

「また来てくれる?」

「……考えておきますね」

そう言いながらパスパレの皆さんと帰宅した。やっぱり日菜先輩は紗夜先輩に玄関前で抱きついてました。日菜先輩は紗夜先輩が大好きなんだな。ほんとに眼福眼福。

## 笑顔を育むバンドとの出会い

とある日の昼休憩の事

「体育ヤダ〜（。 ㇏。 ） キュウエエエエエエエエア!!」

「急にどうしたの？翔斗くん」

「おう、りみか。今週から男子も女子も体育が持久走になるのは知ってるだろう？」

「そうだね、私もあんまり走るの得意じゃないから体育の時間来ないでっけて思ってるもん」

「今日の6限目……奴があるんだよ」

「えっ……あつ」

「しかも男子少ないじゃん、注目浴びたくないんだけど……」

「それは……まあご愁傷さまとしか言えないね」

「んな事言うなよさーや!!」

「嫌だっけて言っても時間は止まらないんだから腹くくれよ。それでも男か!!」

「（。 。 ?。 。 ） ゴフツ」

「たかが持久走ごときでここまで喚くとは……翔斗くんの見方変わりそう」

「(o≡(3・)◎)) (3。o)・(3。)！：；・ アベシ!! チ——

（。 — ω — ） —— ン」

さーやと有咲とおたえの一撃で俺のメンタルが粉々になって、その場に倒れ込んだ。

「（。 ㇏。 ;三;。 ㇏。 ） アゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ翔

斗くんが精神的ダメージを負って殺られてる〜!!誰か救急車〜」

「香澄ちゃん、落ち着いて〜」

数分間こんなやり取りが続いたそうです。そのまま時は流れ、体育の時間になった。

「やりたくね〜。というか、最近走ってないから距離によっては絶望に変わるんだが」

「ほんとだよ。私も距離長かったらヤバいかもしれない」

「私も……」

「あの3人はできそうな顔してるし……俺たちは自分なりのペースで頑張ろうな。りみ、有咲」

「う、うん」「お、おう」

こんなやり取りをしていたら授業始まりのチャイムが鳴り、今日の走る距離が発表された。男子2000m、女子1000mだそうだし、しかも次回から距離伸び、最終的には男子9000mになるとか……終わった。

とりあえず今日の授業を乗り越えようと頑張ったのだが……男子の中で1番遅かった。

（苦手だから多少時間かかると思ってたけど、13分超えて男子の中では最下位か……流石にこのままマラソン大会に行くのはマズいな）と1人で考え込んでたら……

「あら？元気がなさそうね。どうしたのかしら？」

隣に金髪の女の子がいた。

「走るのが苦手だから、マラソン大会のためにも朝走ろうかなって思ってたんだよ……っていつから隣に？」

「ついさっきよ。それよりあなたは長距離を走れるようになりたいのね」

「うん、まあ走れるようになれるなら越したことはないんだけど……」「なら私にいい考えがあるわ」

そう言っって少女は離れていった。制服が花咲川のものだったので、もしかしたら同じクラスだったのかとクラスメイトの顔を思い出すけど、彼女の顔は出てこない……というか、嵐のように来て嵐のように去っていったから名前も聞いてないや。

「おまたせ。トレーニングしてくれる人を連れてきたわ」

「へ？」

いやいや、勝手にトレーニングできるようになったんだけど!?

とか思ってたら、女の子の後ろからスーツを着てる人が出てきた。ついでに黒いリムジンに乗せられて拉致られた。

拉致られて数分が経ち、よく分かんないうちにデカイ豪邸にリムジンが止まった。

「石崎様、到着しました」

「あ、ありがとうございます?」

リムジンから外に出ると、多分豪邸の中にある庭的などところに降り立った。迷いながら、豪邸の玄関にらしき場所にたどり着いた。家の前に金髪の女の子と他に4人いることが分かった。

「あら、やっと来たのね翔斗。遅かったわね」

「あつ、しょうくん!!」

「あれ、翔斗くん。なんでここに?」

「えっ!?はぐみに花音先輩!!どうしてここにいるんですか!」

「あら。はぐみ、花音。知り合いだったの?」

「うん。だって同じクラスなんだもん」

「私は同じバイト先の後輩だからね」

「あく前に花音先輩が言ってた人ですか」

「うん (\*^^\*)」

「儂い……」

儂いとか言わない人もいるけど、なんか前にも似たようなことあった気がするなく。多分自己紹介すべきだよな?まあそうじゃなくともやるけどさ。

「は〜い、自己紹介します。石崎翔斗です。花咲川に通ってる1年でひゅ……」

あつ、噛んだ……穴の中に埋もれたいくらい恥ずい／＼／

「あたしは弦巻ごころよ。よろしくね、翔斗」

「次は私ね、奥沢美咲って言います。よろしくね、翔斗くん」



「最後は私だね、私は瀬田薫だ。よろしくお願いするよ、石崎くん」

「はい、よろしく願います。弦巻さん、奥沢さん、瀬田さん」

「そんな堅苦しいのはダメよ、翔斗」

「そうだね、私としても苗字にさん付けで呼ばれるのは嫌だね」

「私も下の名前で呼んで欲しいな……なんてね」

「そこまで言うなら……分かりま、分かった。こころ、美咲、薫」

「ところで中入ろうよ。このまま外にいると寒くて凍えちゃうよ」

はぐみに言われて気づいた。この会話はずっと外でしてただわ。

「そうだな。とりあえず中に入るけど、入ってもいいか？」

「ええ。入っていいわよ」

こころから許可をいただいたので、恐る恐る中に入った。というか、はぐみは躊躇しないのね。薫も!?……美咲も花音先輩も躊躇わないし……あれ？俺がおかしいのかな。

「いえ、おかしくありませんよ。むしろ、初めは私も同じ反応だったので」

「あつそう……つて、美咲は何回もここに来てるのか？」

「私だけじゃなく、はぐみも、薫先輩も、花音先輩もこころの召集がある度に何度も来てるから躊躇いなんて無くなったよ」

「何回も……か。もしかして、すごい人に目をつけられたのかもしれないな」

「そういえばなんですけど、翔斗くんはなんでここに来たんですか？」

「それはな……噛み砕いて言うとしたらこころに拉致、もとい連れてこられた」

「あはは……それはお疲れ様です」

「そう言う美咲や花音先輩たちはどうしてここに？」

「私たちはこれから会議するんです」

「会議って何の？」

「私たち5人でハローハッピーワールド……通称ハロハピのことで  
す」

ほへえ。花音先輩がバンドか……ちよつと見てみたいかも。

「なるほど。それで、会議の中身とか分かんないのか？」

「さあ？だいたい突拍子もないことをこころが言い出して、それにはぐみも薫さんも乗っちゃうからね〜」

「んで、そのストツパーが美咲と花音先輩って事ですか」

「大体あたりかな。翔斗くんがどっち側の人間かによって疲労感が変わるんだよね〜」

「まあ、変なことは言わない様にするけど……俺に3人が止められるかは定かじゃないぞ」

「美咲〜花音〜早く入りましょ？もちろん、翔斗も」

あつ逃げ場なんてなかったんですね……というか、こころは最初の目的覚えてるのかな？

「了解。早く行かないとこころに怒られそうだな」

「ですね。後で話しましょうか」

俺たちが入ると、ハロハピの会議が始まった……のだが、考えが色々つぶつ飛んでたわ。まず、スカイダイビングしながら演奏したって言い出したんだぞ!?遊園地とか動物園とかでライブするとかならまだ百歩譲ってわかる。けどな、空を飛んでる中でライブだぞ!?もちろん止めに入ったのだが、黒いスーツを着た人……通称黒服さんが了承したので何故かやれることに。

ドラムとかアンプとかどうやって持っていくのやら……

他にも、世界各国を渡り歩くワールドツアーをしたいとかはぐみが言い出したのだ。まあこれは知名度上げてからやりたいって意見が多かった。(まあ、主にあの3人だけだね)

それ以外にも色々ありながら、無茶ぶりの多かった会議は終わり、俺はこころ以外の4人と一緒に帰っていた。

「なんかどつと疲れた気がする……」

「なんで疲れてるの？」

「ん？気にしたらダメだよ」

俺は死んだ目をしながらそう言った。

これを毎回聞かされてる美咲や花音先輩がすごいと思ったよ。俺には無理だあ。

「とりあえず、俺の家の方向はこっちだから。それじゃあ」

そう言つて逃げるように帰つた俺は、すぐに風呂に入りパールに餌をあげたあと、死んでるかのように眠るのであった。

## RPGゲームでは役割分担は必須 前

こころに拉致られてから数日がたったある日、燐子先輩から「今週末って空いてますか？」って聞かれた。

特に予定とかなかったので、二つ返事で了承し、どこに行くのかを聞くとネットカフェだそうだ。

そして、場所や詳細を聞いて、当日向かったら……Roseliaの皆さんがいた。

「燐子先輩、何故ここにRoseliaのメンバーが全員揃ってるんですか？」

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

「言っただけじゃありません……まあいいですけど。それより、中入りましょ？」

「うん、そうだね」

俺たち6人はネカフェに入った。横並びに6つ空いてる部屋はなかった。通路を挟んで3、3で別れてはいることにした。

ちなみに部屋割りは

紗夜 俺 燐子

通路という名の廊下

友希那 あこ リサ

って感じに決まっていた。そして、燐子先輩からは「いつもの垢でよろしくね」って言われた。サブ垢なんて持ってないんだけどなあ。持ってるって思われたのかな？

そのまま6人でNFOをやり始めた。友希那さんとリサさんの感を取り戻すためにやってる組の適性よりちよつと下のクエストで肩慣らしをした。

一応解説しとくと、友希那さんが詩人、リサさんがクレリック、紗夜先輩がロイヤルパラディンだ。パーティーバランス良すぎだわ。

俺含めて考えると……

タンク1、アタッカー3（前1、後2）、ヒーラー1、エンチャンター

ただ、俺を抜くと前衛が紗夜先輩しかないからそう考えるとバランス悪いかもしれんけど、今日は気にしないことにする。

肩慣らしのクエストが終わって、珍しく俺のレベルが上がったと同時に新スキルを獲得したようだ。しかもパッシブスキルって……取るに決まってるじゃん!!

このパッシブスキルの効果を見た時、とあることに気づいた。関係がありそうなりサさんのチャットに「俺が合図出したら俺以外にヒールし続けてください」とだけ打っておいた。

「りんりんさん、肩慣らし終わったんで本題に入りませんか?」

「そうだね。今回このメンバーでやりたいのは、このイベントの新設された難易度のところですよ」

と言われて見せてくれたクエストは、昔ソロでこなしてた防衛イベントのリメイクだった。

「えっ、これやるんですか?」

「しよう兄、どうかしたの?」

「いや、昔このイベントをソロで回してた時期があつて、辛かった記憶が蘇るなくって思ったただだよ」

「一緒にやってくれる友達いなかったの?」

「そうだね。その分、1人チームでランキングに乗れたのは嬉しかったよな」

「そういえば、その時のランキングの8位くらいにいたよな?」

「うん。そのランキングを見てた人からいっぱいパーティー申請やら、ギルド勧誘やらをいっぱい送られてきたよな」

「シヨウさん、あなたは一体……?」

「当時のことは思い出たくは無いです。ただひとつ言えることがあるとすれば、何もかもが嫌になってオンラインゲームに……このNFOに逃げてただけですかね」

「」「……」「」

やっべえ、空気を悪くしてしまった。

「そろそろやりましょうか。昔の時より敵が多いと思うので気を付けてくださいな」

逃げるようにクエストを受注し、専用ステージに入っていた。

「ここってどんなところなんですか？」

「簡単に言うと、NPCが住んでる村をモンスターの襲撃から護るのが第1WAVE。守りきってからモンスターの住処に行つて、敵部隊を撤退させるのが第2WAVE……つていう2部構成のはず」

「ふむふむ」

「ただ、魔物の住処に行くために謎解きをしないとイケなかったんです」

「それって前回の話でしょ？」

「そうですね。ただ、何もなしてつてことはないと思うので、そこら辺は注意ときましよう」

防衛をする前にこんな話をしていたのだが、防衛戦は特に変化がなかった。ただ、出てくる敵がオークやゾンビの他にリザードマンやゴブリンも混じっていた。

「防衛戦はこんな感じで終わりですかね……つとクエストログの更新が来たようです」

紗夜先輩に言われてクエストログを確認した。

〃モンスターの住処に向かい、親玉を討伐せよ。

ただし、親玉を討伐するまでモンスターの進行は止まらず、30分毎にモンスターが村に襲いかかる。」

「マジか……今回は部隊を分けましょう。俺とサヨ先輩は別れるほうがいいから別れるとして、リサさんとユキナさんはサヨさんの方にくとして……問題はアコ姫さんとりんりんさんだよな」

「人数的に考えるのならお2人はショウウさんの方がいいのでは？」

「それはそうなんですけど、その場合はサヨさんの負担が大きいかかって思つたのでアコ姫さんも防衛側に残ってもらってもいいですか？」

「残るのはいいんだけどね、2人で討伐できるのかな？」

「多分大丈夫だと思います。これに関しては、前回のイベントの時と違って、討伐しに行つていいる時にも防衛しなきゃならないので、敵も分散してると思ふんです。そこで、敵の親玉をりんりんさんと2人で

叩きに行きます」

「それじゃあ、私たちはここに残って防衛してたらいいのね」

「早い目に攻略しようと思いますが、時間かかるかもなので頼みますね。それじゃありんりんさん行きましようか」

「了解です（\*・ω・）ゞ」

村に襲撃してきた敵の逃げた方向を確認してから、親玉の所へ向かうのであった。

## RPGゲームでは役割分担が必須 後

りんりんさんと2人で親玉を討伐しようと出発したらすぐに天候が霧に変わり視界が悪くなった。とりあえず、あぜ道が舗装されていたので、その通りに進むと、分かれ道を見つけついでに看板があった。その看板には……

〃右に進むと洞窟に着くと書いてあり、左に進むと洞窟に着く〃  
と書いていた。何言ってるか分からないだろう。俺も分からないし、りんりんさんも驚いている。

「りんりんさん、とりあえず左に行きましょう」

「理由は？」

「勘です」

「シヨウさんらしいですね」

そう言って彼女は左方向に歩みを進める。

俺もその後を追って進むと、次は3方向に分かれ道が伸びていて、3方向とも洞窟に続いているというではありませんか。

「おう。次は3方向に別れてるのか……りんりんさん、どの方向に進みますか？」

「私なら……ここは直進かな」

そう言いながら、前に進んだ。俺もはぐれないように後を追う。

今度は2方向に道が枝分かれし、両方とも洞窟に進むと。今回の魔物は優しくないか？

そう思いながら右に進むと、また2方向に道が枝分かれし、またまた両方とも洞窟に進むって書いてる。でも、なにか違和感が……あつ多分これだわ。

「なるほど。これそういうギミックなのね」

「なにか気づいたことかがありましたか？」

「多分ですけど、間違えたルートに進むと1番初めの分岐点に強制的に戻されるギミックだと思います」

「そう思った理由とかあつたりしますか？」

「この看板、どこかで見覚えありませんか？」



「えっ……特に何の変哲のない看板だと思いますけど」

「それじゃあこの写真を見てください」

そう言って、とある写真をりんりんさんに送る。

「この写真って……初めに通った道にあった看板だよね」

「はい、その写真の看板とここにある看板をよく見比べてください」

「……………同じにしか見えないね」

「って事は、どこかしらに突破するための鍵があるんだと思います」

「なるほど。それなら風潰しでも良さそうだけど」

「今回は早く親玉がいるところに行かないと、防衛をしてくれてる人たちが長時間拘束することになっちゃいます」

「確かにそうだね。それじゃあ何かないかを探してみるね」

「はい、お願いします」

なにか手がかりは無いものかと思いついて探し始めてみたのだが、特に進展はなし。しかも、村を出発してから15分が経っていた。そんな時りんりんさんに呼ばれた。

「シヨウくん。なにか看板の下の方に書いてあるよ?」

「どれどれ」

〃一〓〇 十〓一 五〓一 &〓?〃

?〓1なら右に。?〓2なら左に進め〃

……………なるほどね。だから左に進んだら道が変わったのか」

「早くない? 私まだ解けてないんだけど」

「後で教えますよ。とりあえず進みましょうか」

「ええと次は

〃毎月シヨートケーキの日というものがありますその日は何日?〃

?〓20なら左に。?〓21なら真ん中に。?〓22なら右に進

め〃

ほーん……全くわからん」

「あつ私わかったかも」

そう言いながらりんりんさんは右に進む。急いで後を追うと洞窟にたどり着きました。

「どうやら謎は2問だけだったようですね」

「時間は……残り10分くらいですね。早く討伐して戻りましょう」  
そのまま洞窟の奥に進むと、みんな出払っているようで、ボス部屋らしき場所にすんなり着いた。

「なんかそんな気はしてましたけど、ここまで敵が少ないとは思ってなかったですね」

「そうですね。それじゃあチャチャつとやりますか」

扉を開けると、周りの松明に火が灯りボスの姿が頭になる。

「いるのは、トロールと傍付きが沢山か」

「私は範囲攻撃で傍付きを一掃するね。その間に」

「俺がいつものようにヘイトを取ればいいんですよ」

そう言い合って、りんりんさんは詠唱を開始する。詠唱中に攻撃を受けて怯んでしまうと、詠唱を初めからやり直しなので、挑発スキルでヘイトを稼ぐ。

敵の攻撃を受けて数秒が経つと、りんりんさんの範囲攻撃で傍付きを一掃してくれた。視界が少し悪くなったがボスの姿は確認できるので、小回りが効くスキルでスタンを誘発しようと奮闘する。

そうやってボスを削っていると、体力が4分の1くらいになっていったようで、攻撃が過激になってきた。少しづつ消耗していて、残り体力が3割を切ったので、回復をしている。その間もりんりんさんは攻撃を続けてくれていた。すると、ボスが俺の方を見向きもせずりんりんさんに攻撃しようとしたため始める。

「りんりんさん、そっち狙ってます!!」

伝えるのが遅かったようで、ボスの攻撃がりんりんさんに向かう。

「もう、誰も俺の目の前で死ぬ姿を見たくないんだア、ア、ア、ア、ア、ア!!」

俺は回復を中断し、りんりんさんの元へ全速力で走る。まともに攻撃を受ければ死ぬHPだつてことは分かっている。それでも、やらなくちゃいけないんだ!!

「ウオオオオオア!!」

俺はボスの攻撃を止めようと自分自身が持っている最大威力の攻撃を後ろから当てた。その攻撃を当てるとボスが倒れ、HPゲージが

みるみる減少する。そしてゲージが無くなると、ボスがポリゴン片に変わって消滅した。

「ふう……何とか、守れた」ボタン

「シヨウさん!!」

「大丈夫……緊張が解けたただけだから。それより、みんなの所に戻りましょう」

「そうですね」

元来た道をまっすぐ戻って村に着くと、クエストが完了したことをNPCに伝え、報酬が写っているウインドウがでてきた。

そのまま全員がログアウトし、ネカフェを後にした。

「これで終わりですかね。時間もいい感じになってますし、今日は終わるときですか」

「そうしましょう。明日も私たちは練習がありますので」

「でも、あこは楽しかったですよ」

「あたしも久々にやってみると楽しいもんだね」

「俺も楽しかったですよ」

そうやって俺は帰ろうとした時、燐子先輩に呼び止められた。

「翔斗くん。また誘ったら、一緒にやってくれますか?」

そう言われた。そんなの答えはひとつしかないんだよなあ。

「当たり前じゃないですか。大切な先輩で、大事な友達なんですから」

そうやってRoseliaの皆さんに笑顔を見せた。

## 遊園地は非日常感あつて好き

Roseliaの皆さんとNFOをした翌週末のこと。りみに誘われポピパの人たちと遊園地に行くことになった。

一応呼ばれた身だからさ、約束の時間の30分くらい前に駅前に到着したんだけどそんなことする必要なかったって後悔してるよね。みんなが来るまで暇だわ。

「あつ翔斗くん!!」

「おつ。みんな来たな」

「もしかして待たせちゃった?」

「いや、俺も今来たところだよ」

「そう。ならよかつた」

「翔斗くんなら早く来てそうだけどね」

「俺どんな人だと思われてんの!?!」

「察してくれると助かるな」

「了解。時間も来たし行くか」

というわけで駅の方向に向かって歩き始めました。

遊園地の場所はここら辺から近い場所だからいいよね。引越する前だと近くにそんな場所なかったもん。

電車の中はかなり混雑してた。満員電車っていうほどではないけど座れそうな場所が見つからなかったので、6人とも立つことになった。

「やっぱり休日も混んでる時間帯は混んでるんだな」

「いつもはもうちよつと空いてるんだけどね」

「まあ人が多いから仕方が無いのかも?」

「絶対それだわ」

「まあ2駅くらいだから我慢しよ?」

「次は、○○駅。○○駅」

「おつ、この駅か?」

「そうだな。降りるぞ〜」

乗る時は楽だったんだが、降りるのはすつごい苦労した。やっぱり遊園地に行く人は多いんだね。

駅から降りて遊園地に向かう時に一瞬思った。これは敷地内に入者が多く居そうだな……と。

「着いた〜」

「どれ乗る?」

「まあまずはジェットコースターでしょ」

おたえがそう言った。あんまり好きじゃないけど、早い目に乗っつけば後が楽そうだよな。2回乗らない限り。

「ジェットコースターは人気だろうし待ち時間的にも先に行こっか」

まずジェットコースターに乗ることにした。

120分後ー

「次、6人どうぞ」

「やっとなら順番がきたよ」

「そ、そうだな」

「荷物はこちらに、貴重品はこちらに入れてください」

カバンを入れる。つまり逃げ場は無くなったというわけだ。

「翔斗くん、並び始めてから少し顔色悪くなってるけど大丈夫?」

「だ、大丈夫だ。も、問題ない」

「それ大丈夫じゃないセリフじゃないか」

「足も震えてるし」

「それより、早く乗ろう!!」

「腹括りですか。それで、ペア分けはどうする?」

「もうジャンケンでいいんじゃない?」

サイショハグー ジャンケンポン

「おお、1番後ろか。珍しいこともあるんだな」

「そうだね」

隣はりみになった。前におたえと有咲。その前に香澄とさーやが座ることになった。りみにしか見られないのがすっごい助かる。

「それでは、行つてらっしやい!!」

ジェットコースターはゆっくりと動きだした。

段々と上昇していく。不安と恐怖から安全バーにしがみつく。先頭が最高地点にたどり着き、降り始めるとまだ登りきってない後ろの方も速度が上がった。

「ひっ!!ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「あー楽しかった」

「もう……だめ」

俺は情けないくらいに叫びまくった。

「無理しなくても良かったんだよ」

「ここまで苦手だったなんて思ってたよ」

「すまんなおたえ。ジェットコースターだけは、いつになっても慣れないんだよな」

「まあ、翔斗も人間だったってことだ」

「ほんとに俺はなんだと思われてんの!？」

「内緒」

はぐらかされた。悲しい( ; ω ; )

「次どこ行く?」

「それなら、次はあそこに行こう!!」

そう言つて香澄が指さしたのは、コーヒーカップだった。香澄やおたえと一緒に乗つたら絶望になりそうな予感……

ー数時間後ー

あの後、おたえと香澄と俺の3人でコーヒーカップに乗り、コーヒーカップを超高速で回されて朝ごはんがリバーシしかけたり、りみが提案したお化け屋敷に行ったりした。

お化け屋敷はそこまで苦手ではなかったのですが、なんとも思わなかったのだが、有咲が俺の腕をガツチリ持たれたので、理性の方が危険域に達しかけていた。原因は察しがつくと思うから言わないぞ。

その後、さーやと有咲の提案で空中ブランコに乗ることにした。うん。先3つのアトラクションよりまったりしてよかったよ。上から見たら結構広い敷地面積だったから驚いたのは内緒です。

その他にも、ジェットコースター2連発だったり、メリーゴーランドなどなど。いろいろなアトラクションに乗っていたら夕暮れ時になっていた。

「時間的に次で最後かな？」

「それじゃあ、今まで翔斗くんの乗りたいアトラクションに行つてなかったら、最後は翔斗くんに決めてもらおうよ」

「それいいね」

「翔斗はどこ乗りたいんだ？」

「それなら、俺あれ乗りたいな」

そう言つて指さしたのは観覧車だった。

「その理由は？」

「理由？乗りたいからに決まってるやん」

「それじゃあLET'S GO!!」

観覧車に着いた。この観覧車には少し大きめなゴンドラがあつて、係員さんが気を利かせてくれて、そこに乗せてもらった。ということだから、全員一緒に乗ることにした。

「やっぱり夕日っていいな。昼間見た風景が変わつて見える」

「なんか写真映えしそうだよな。」

「さーや、撮つて撮つて」

「いいよ」

「5人で撮るだろ？」

俺はスマホを取り出した。しかし……

「翔斗くんも一緒にとるんだよ」

「えっいや俺が取る「いいからいいから!!」……わかつた」

6人で夕焼けをバックに自撮りをした。うん、我ながら上手く取れてると思う。

「後で送つてね!!」

「分かつてるつて。グループに送ればいいんだろ？」

「頼んだよ〜」

こんな話をしていたら観覧車が一周したので、ゴンドラから降りると日が落ちきっていて、いい感じのオレンジと紺のグラデーションが空を彩っていた。

「さて、なんかお土産でも買って帰るか?」

「買って帰ろ〜」

「んじゃ30分後に出口前集合な」

そう言っただ各自別行動になった。俺もなんかいい感じのものないかなって思ってたから、ちょうど良い感じのものがあつた。値段は少し高いけど、買えないほどでは無いので即決で買った。それを持って集合所に向かうと、みんな同時に帰ってきた。

「タイムイングバッチリじゃん。それじゃあ安全に帰るぞ〜」

「「「「おー? (・ω・) ?」」」」」

行きと同じルートで帰った。帰りの電車は空いたので全員で座ることが出来た。

そのまま何事もなく電車で降りることができた。

その後、時間も遅かったから5人を家の近くまで送り届けることにした。

ちなみに駅から近い距離順は、香澄、おたえ、有咲、沙綾、りみ、そして俺の順だから、必然的に最後はりみと帰ることになる。

「それじゃあまた学校でね」

「おう!!またなさーや」

予想通りりみと2人で帰ることになったのだが、なかなか会話のネタが思いつかない。だから無言で暗い夜道を進む。

「あの……」

「どうしたの?」

「今日はありがとうね」

「ん……何がだ?」

「私の誘いに付き合ってくれてだよ」



「いやいや、友達の誘いは用事が無い限り付き合おうに決まってるじゃん。それにさ……」

「……？」

りみがこちらを真剣に見ている。ここまで言っちゃったからには、この先も言わないといけないよな。

「転校前の学校には、友達なんてほとんど居なかったからこういう誘いは嬉しいんだよ」

「そっか……」

こんな事を話しているうちにりみの家に着いた。

「それじゃあ、また明日、学校でね」

「おう、またな。りみ」

りみが家の中に入るまで彼女を見つめていた。

「いつかは……この事を包み隠さず言わないとな」

そうボソツと呟きながら家に帰った。その帰り道は雪が少し降り始めてた。

家に着くと少し寒気がしたのですぐにかぜ薬を飲み、パールに餌をやり明日の準備をやって寝ることにした。

## 風邪とお見舞いと過去話

side 翔斗

pipipipi

「朝か……起きなきゃな」

今日は平日の始めである月曜日。という訳で学校に行く準備をするために布団から出ようとした……のだが。

「あれ……立てねえや。しかも、体がだるいな。とりあえず体温計を」  
動きにくい体にムチを打って、リビングのにある体温計を取り体温を測る。

「うへえ38度か。今日は学校を休むことにしよう」

善は急げなので、学校に電話した

「もしもし、1-Aの石崎ですが」

学校に電話をして、羽丘にいと一番信頼出来る人(俺の中でだが)にもGINEで休むことを伝えて安静にすることにした。もちろん伝えた人にはしつかりと口外禁止とは伝えてるよ。

side りみ

先日、翔斗くんに言われたことが気になったので、翔斗くんと一緒に登校しながら聞き出そうと少し早く家を出てきました。少し前に翔斗くんの家を聞いていたので、前振りなしで行くことにしました。彼の家についてインターホンを鳴らすと、顔色が悪い翔斗くんが家から出てきました。

「お、おはよう、りみ」

「おはよう、翔斗くん。もしかしてだけど調子悪い……よね？」

「うん……朝測ったら体温が38度あったから学校は休むことにした」

「そっか。今日は一緒に行こうと思ったけど、また別日だね」

「わざわざごめん。せっかく来てくれたのに」

「ううん、今は休むことの方が大事だからね。今日学校終わってから、お見舞いに行ってもいいかな?」

「ありがとうな、りみ」

「それじゃあ、私学校行くから、お大事にね翔斗くん」

「ありがとう」

そう伝えて、翔斗くんの家を出た。

数十分後学校についてから翔斗くんが休むことを香澄ちゃんたちに伝えた。

「あれま、翔斗くん風邪ひいちゃったんだ」

「そうらしいの。今日は学校昼まででしょ?だから放課後お見舞い行くことにしたんだ」

「それなら翔斗にお大事になって伝えといてくれ」

「あつ、私もお願いしとこうかな」

「私も〜」

「行った時に伝えとくね」

こんなことを話してたら担任の先生が来たので全員席に戻り、朝のHRが始まりました。

少し時は流れ放課後

私は授業が終わって翔斗くんの家に向かうことにしました。チャイムを鳴らしても反応がなかったので、そつとドアを開けて中に入りました。

中に入り、私が真っ先に向かったのは翔斗くんの部屋でした。

「翔斗くん、起きてる?」

ドアをノックし声をかけて確認したけど、反応がないので多分寝てるんだと思います。

「入るね?」

そつとドアを開けると、翔斗くんはぐっすり寝ていました。

寝てるってことなので、行き道で買ってきた食材たちを使って色々作ることにしました。

side 翔斗

「暑つつい……いつの間にか汗かいてるし。とりあえず水とタオル……」

机の上に置いてある水を取ろうとしたら、部屋のドアが開いた。

「あつ、翔斗くん。起きたんだ」

「りみ!?いつから家にいたんだ!?!」

「かれこれ30分前くらいからかな。勝手に入っちゃったけど大丈夫そう?」

「まあ、あんまり良くないけど……今回は特例だぞ」

「良かったあ。とりあえずお粥作ってきたけど、今食欲あるかな?」

「あんまりないけど、食べないと治らないもんな。ありがたく頂くよ」  
そう言ってレンゲを持つとしたら、りみに止められた。

「病人は安静にっていうでしょ?ほら、あーん」

これは甘えろつてことか?

「そ、それじゃあお言葉に甘えて。あ……あーん。美味しいよ」

「良かったあ。もうちよつと食べる?」

「も、もういいかな」

「そ、そう……わかったよ」

りみは少し悲しそうな顔をしながらお盆を置いた。

(危ない危ない。羞恥心で余計に体温が上がるところだった。というか、なんで悲しそうな顔をするんだ?)

「な、なあ……りみ?」

「うん、どうかした?」

「お、お見舞いに来てくれて……その、ありがとうな。多分だけど、学校終わってから来てくれたんだろ?」

「ううん。大事な友達だもん。これくらいは全然構わないよ」

「……そっか」

大切な友達……か。今なら話しても大丈夫そう……かな?けど、その前に。

「そういえば、他のみんなが来たりとかはするの？」

「花咲川の人は私だけかな。羽丘の方はわかんないかな。誰かに伝えてたりする？」

「一応1人だけには伝えてる。もしかしたらその子が『ピンポーン』……んと、誰か来たな。玄関行ってくるから待っててくれ」

「う、うん分かった」

俺はマスクをつけ、玄関に向かった。

「はい……つとつぐみか」

「翔斗くん。風邪は大丈夫そう？」

「朝よりかはマシになったかな。ってか羽丘も今日は午前中だったのか？」

「その言い方的に、翔斗くんの学校も……」

「ああ。うちの学校も今日は午前中だったんだ……ってかここで長話するのもなんだから中入って？」

マスクしてるから伝わりずらいけど、極力わかるように笑顔を見せた。

「う、うん。そうさせてもらうね」

そう言われたからつぐみを家にあげ、部屋の中に入れた。

「つぐみもお見舞いに来たん……だよね？」

「うん。りみちゃんに先を越されたのはびつくりしたけど」

「翔斗くん、もしかして翔斗くんが伝えたっていう子は……」

「お察しの通り、つぐみだ。誰かに言ってなかったら羽丘でこのことを知っているのはつぐみ1人……のはず」

「だ、誰にも言っていないよ」

「そりや助かる。こんな姿見られたらみつともないからな」

今までの俺ならこんなこと言わなかったのに……とも付け加えて言った。

少しだけ気持ちを落ち着けたあと、俺は口を開いた。

「2人には俺の過去を話してもいい……かな？」

2人は驚いた顔をしてたけど、すぐに頷いてくれた。

「それじゃあ話すね。あれは小学4年生くらいの事だったかな……」

俺には幼馴染がいた。

その子の名は青樹 権（あおき もみじ）ちなみに女の子。

権は当時の俺の性格とは真逆な活発な子だったけど、俺の唯一の友達だった。

「翔くん、早く行くぞ!!」

「待ってよ、権!!」

その日は、青木家と石崎家の二家族で遊園地に行ったんだ。

敷地の中にいた時は特に何も無かった。事故は帰り道に起きた。

「今日は楽しかったね」

「そうだね。また一緒に行けるといいな」

今思えばこんなことを言わなきゃ良かったな。

「今日はありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

6人で歩いて帰っていると、信号が青になったので信号を渡ろうとした。

ブオン

トラックが信号無視をして猛スピードで突撃してきたのだ。

「翔くん危ない!!」

権にそう言われて突き飛ばされた俺は歩道に入ってたのでかすり

傷などの軽傷で済んだのだが……

「権!!目を覚ましてくれよ!!俺、俺は……!!」

権は目を覚まさなかった。正確に言うと、植物人間になってしまっていた。

先生の診断によると、脳に大きな衝撃が加わったことで脳が正常に働かなくなったようで、いつ目覚めるかも分からない状態に置かれている。

そのことをについて俺が権の両親に謝りに行った。

「翔くんは悪くないのよ」

とだけ言ってくれた。それが本心なのか、俺を傷つけないように言った言葉なのかは、俺にはわからなかった。

それだけで終わればよかったのだが、その2週間後に父親が死んでしまった。建設工事中の不幸な事故だったとしか言われなかったの、父の詳細な死因を教えてくれなかった。

その2つの不幸な事が重なって俺は学校に行ける精神状態じゃなかったたので、当時の担任に伝えて休学させてもらった。

その事件から1年が経った頃、久しぶりに復学した俺を待ち受けていたのは、いじめだった。

ちなみに、女子が主犯である。

復学した当初は何も無かったのだが、2学期の途中の家庭の時間で調理実習をした時に、俺が包丁を使っている時に驚かして指を切るといふ事件が起こった。幸い、こちらの怪我は軽傷だったのだが、それがそいつの癪に触ったらしく、そこからいじめがスタートした。

そいつがやった事と言えば、俺に向かって暴言を吐いたり、俺の上履きの中に画鋲を入れたり、机の中にある教科書をゴミ箱の中に捨てたり、挙げ句の果てには教室に入ろうとした瞬間に水をかけられたりだ。

もちろん、先生にも相談した。けど、主犯の子が学校長の孫だったらしく、先生も放置していた。

中学生に上がっても、いじめは続いた。しかし、内容はエスカレーターしていった。いじめの規模がクラス規模から学年規模になったり、主犯の子から暴力をされたりもした。

それが3年間続いた。だからこそ高校に進学する時に、誰も友達がない高校に行こうと必死に勉強した。

そして高校進学をしても環境が変わることは無かった。

俺をいじめている主犯が同じクラスということもあり、俺の捏造された噂を真に受けたクラスメイトからいじめがを受けた。

さすがに俺の心が持たなかったたので、担任の先生と三者面談をして転校することを決めた。

「これが俺の過去だよ」

「……………」

そつとふたりの顔を見る。その表情は驚き半分、後悔半分って表情だった。

「そっか。そんな辛いことが翔斗くんあったんだね」

「だからなのか、初めてここに住んでる人と会った時は少し恐怖を感じてたけど…………」

俺は今できる精一杯の明るい声色でこう言った。

「皆がみんなアイツらみたいな性格の奴だけじゃない。りみやつぐみみたいな優しい人もいる。それだけで嬉しかったんだ」

そういった後、俺の頬に冷たい感触があった。それを擦ると俺の目から涙が出ていることがわかった。その涙は、どれだけ拭いても止まることは無かった。

そんな時に、左右から抱きつかれた。

「翔斗くん…………泣きたい時は泣けばいいんだよ」

「そうだよ。泣きたい時は泣いて、いつもの翔斗くんの笑顔を見せて」  
正直、この言葉だけで涙腺が崩壊しかけた。

「…………2人とも、ちよつと肩貸してくれ」

そう言って、2人の腕の中で泣きまくった。

泣き始めてから10分程度経ち、顔を上げたら、外は綺麗な夕焼けに染っていた。

「さて、今日はありがとうな」

「ん？私はまだ看病するよ。お母さんに許可は貰ったし」

「へっ!？」

「つぐみちゃんもそうなんだ。私も一緒に親に許可貰ったからしっかり治るまで看病するよ」

「明日は祝日だから良かったけどさ、もし平日だったらどうする気だったの…………？」

「もちろん、学校休んでも看病するに決まってるよ!！」



「……つまるところ、明日学校ある無いに関わらず看病する気だったと」

「うん」「もちろん」

「……早く体調戻さないといけないな」

その後……りみとつぐみの看病によって、祝日明けの学校にはしっかりと登校していたことは言うまでもないだろう。

突発。水族館デート!?

俺の名は石崎翔斗、ただの男子高校生だ。ちなみに、先輩との待ち合わせ中である。どうして待っているのかと言うと……数日前に遡った方がいいだろう。

数日前、翔斗のGINEにて。

“翔斗くん、一緒に水族館行かない?”

“俺は構わないですけど、俺なんかと一緒にいいんですか?”

“翔斗くんだから誘ってるんだよ”

“左様ですか。いつ行きますか?”

“それなら今週の土曜日とかどうかな?”

“その日に特に予定は入ってないので行けますよ”

“それじゃあ土曜日の10時に駅で集合にしよう”

“了解しました(???)”

現在に戻る

「そういえばだけど、現地集合にしちやっとな……迷ってなきやいいけど「翔斗くん!!」っと花音先輩!!」

待ち合わせしていた人は花音先輩だ。

「ここに来るまで迷いませんでしたか?」

「うん。気合いでマップ読んできたから」

それをいつもしてほしいなんて思ったけど、そんなこと言ったらダメな気がしてきた。

「それなら良かったです。それじゃあ行きましようか」

そう言っただけ進もうとした時、花音先輩に手を握られた。横を見ると恥ずかしそうな花音先輩が見えた。

「はぐれないように、今日は一日手を繋いでもらってもいいかな?」

「……わかりました」

そのまま電車に乗った。その時、同じ車両に乗っていたお客さんの視線が温かい目をしていたのは言うまでもないだろう。

それから半時間程度が経ち、水族館に着いた。俺自身、水族館にあまり行かない……というか、近くに水族館がなかった覚えがある。

「それじゃあチケット買って来るので、少し待っててくださいね」  
「うん。わかった」

チケット売り場に行き、高校生料金で入園チケットを買った。そのまま入館し、マップを見ながらどこへ行くか相談した。

「花音先輩、始めはどこへ行きたいですか？」

「始めはクラゲの所へ行きたいかな」

俺は了承し、はぐれないようにしっかりと手を繋ぎながらその場所へ向かった。

「おおくスゲエ!!」

「いつ見ても可愛い〜」

「そうですよね。なんかフワフワと浮かんでいるのを見てるとなんだか癒されるので、好きなんですよね」

「えっ、翔斗くんもなの？私もクラゲ好きなんだ〜」

「そうなんですか。何かクラゲに関する雑学とかってあったりしますか?」

「もちろん、いっぱいあるよ。どれにしようかな?」

そう言つて10秒くらい考えてた。

「これは知ってる?クラゲって脳がないんだよ」

「マジですか!?!」

「そうだよ。代わりにクラゲの全身に散財神経を張り巡らしてるんだって」

「へ〜そうなんですね。他には何かありますか?」

「うーん他にはね……」

こんな感じの雑学をいっぱい教えて貰った。しかもクラゲを見ながら1時間くらい。

「他にもね」

「花音先輩……クラゲが大好きなのはよく分かりました」

「そこまでわかりやすいかな?」

「ええ。だってクラゲの話してる時の花音先輩の表情はめちやくちや楽しそうに話しますもん」

「は、恥ずかしい／＼」

「恥ずかしがらなくてもいいじゃないですか。好きな物に熱中できてるって証拠ですよ……まあ、そろそろ次の場所には行きたいですね」

「そうだね。そろそろ別の場所に行こっか」

「それじゃあ時間的にもいい感じなのでイルカショー見に行きませんか?」

「私も行きたいなって思ってたところなんだ。一緒に行こう!!」

「えちよ、花音先輩。そっちじゃないですよ!!」

「ふええ。また間違えた〜」

そんなことがありながらも、何とかイルカショーをやるステージに着いた。

ちなみに、席は一番前に座った。

「やったね、翔斗くん。1番前だよ!!」

「珍しいこともあるんですね。こうなったら思いっきり楽しみますか」

「うん!!」

花音先輩の笑顔には裏がないから見ててホッコリするなく。

他の客もだんだんと増えてきた。

「やっぱりイルカショーって人気なんだね」

「確かに……っと。そろそろ始まるっぽいですね」

結論から言うと、めちやくちや楽しかった。久しぶりに見たのもあるかもしれないけど、イルカたちの色んな面を見てよかった……最後の大ジャンプの時の水しぶきがこちらに飛んできたこと以外は。

現在、花音先輩にタオルを貸して、2人とも髪の毛とか濡れてるところを拭いているところだ。

「めちやくちや濡れた……あんなに大きな水しぶきは想定外ですね」

「そうだよね。今まではこんなに水しぶきが飛んでこなかったから油断してたよ……っと。翔斗くん、タオルありがとう」

「どういたしまして。あとこれ着といってください」

そう言つて予備で持ってきた白いパーカーを花音先輩に渡す。

「どうしてこれを？」

「単純に水に濡れて寒そうにしてるからっていうのと、周りの人の理性が保てなさそうからですね……水に濡れて単純に色っぽくなってるからですけど」

「ありがとう、翔斗くん／＼／＼」

俺は寒くないのかつて？まあちよつと寒いけど、前に風邪ひいた時とは違って上着替えたし大丈夫でしょ。

そのままペンギンのふれあいブースだったり、ドクターフィッシュの触れ合いだったり色々見てきた。それから、ポピパやアフグロのメンバーにお土産と、花音先輩に今日のお礼としてプレゼントを買った。

そのまま帰っていると、渡すタイミングがなくなりそうだったから駅の前で渡すことにした。

「花音先輩!!」

「うん。どうしたの？」

「これあげます」

そう言つて花音先輩にあげる予定であるプレゼントを出した。

「わあ、クラゲ柄のタオルだ。翔斗くんありがとう!! 大事に使うね!!」

花音先輩の笑顔が夕日の光以上に眩しく見えた。眩しすぎて目を逸らしてしまった。

「あ、ありがとうございます……」

「うん……翔斗くん顔赤いよ？」

「っ!?! な、なんでもないですよ……」

「そ、そうなんだ……?」

まただ……また、いつも見ている花音先輩より可愛く見えたような気がした。

そのまま帰宅し、ついさっきの花音先輩が可愛く見えた現象について考えてみたけど、上手いこと考えがまとまらないのでそのまま寝る

ことにした。

その後、ポピパのみんなにお土産を渡した時は何ともなかったのに、アフグロのみんなにお土産を渡したら、つぐみが頬を膨らませながら怒ってた。ついでに彼女たちとも遊びに行くことになった……俺の奢りで。何故だ？

## 翔斗、C i R C L Eへライブを見に行く

1年の終業式が終わって、家に帰ろうとした時に香澄に呼び止められた俺。いつもの事なら練習見に来てってことを言いに来るんだろう。ただ、香澄の口から出てきた言葉は、想定外なことだった。

「翔斗くん私たちライブするんだく!!」

「へく。いつするんだ？」

「えつとねく。明日!!」

「ふくん……って明日?!」

「うん、明日」

まあ予定入ってないからいいんだけどね。

「いきなりすぎだよ香澄ちゃん。はい、翔斗くん。もし来るんだったら、明日このチケット持ってきてね」

「お、おけです」

ただだどしく返事をした俺。よくよく考えたらライブに行ったことがないから不安でしかない。香澄から聞いたのだが、出演バンドは《Poppin Party》《Afterglow》《Pastel\* Palette》《Roselia》《ハローハッピーワールド》の5バンドらしい。知ってる人しかいなくて驚いたのは言うまでもないだろう。

彼女に「なぜ前日にこのことを言ったのか」と聞くと、「サプライズ」と答えられた。有難いサプライズだから手土産でも持つていくか。

翌日。場所も調べたし、何時からやるかも聞いたから、開始時間の1時間前にライブ会場である《C i R C L E》に向かった。

家から徒歩10分くらいの場所にライブハウスがあったんだなく。ここカフェも併設してるのか。さぞ従業員は多いんだろう。

中に入ると、受付に1人しか人がいなかった。

「いらっしやいませ」

「すみません、ライブ見に来たんですけど」

「それでは、チケットの提示をお願いします」

そう言われたのでチケットを見せる。

「プレミアムチケットの確認ができました。それではこちらに名前を  
願います」

そう言われて出された紙に名前を書く

「ふくん。君が噂の言ってる石崎くんか？」

「うん、どうしましたか？」

「いえいえ、こちらの話だから気にしないでね？」

「あっはい……後、これ差し入れしたいんですけど大丈夫そうですね？」

「どちらに差し入れしますか？」

どちらに……か。よくよく考えたら5バンドしか出演してないか  
らなんて言おう？

「もしかしてですが、出演者全員に……って感じですか？」

「え、ええ。そうですね、大丈夫そうですね？」

「大丈夫ですよ。ライブが終わったら1度受付の前に戻ってきてくれ  
ますか？」

「わかりました……けど、何故ですか？」

「今確認したチケットはプレミアムチケットと言ばれるもので、ライ  
ブが終わったあとに控え室に入れる事になってるんですよ」

「へーそんなチケットだったんですね。それなら終わってからここに  
来ますね」

「うん。それでは、ライブの開始まで今暫くお待ち下さい!!」

受付が終わったあと、サービスでくれた飲み物を飲みながら待つこ  
とにした。

一方その頃、控え室では……

「翔斗くん来るかな？」

「香澄、ソワソワしすぎだぞ!!集中しろ!!」

「だつて〜」

「まあ、香澄の気持ちはわからなくはないかな？」

「あれ？石崎が見に来んだ」

「そうなんだあ〜」



「香澄、その話詳しく聞かせて!!」

〜少女詳しく説明中〜

「それでよく翔斗はOK出したよな」

「ほんとにね〜。前日にそんなこと言われたら、予定とか入ってそうだけどね」

コンコン「はい、どうぞ〜」

「みんな〜。お客さんからの差し入れだよ〜」

「えっ、どんなお客さんですか!!」

「石崎くんから貰ったよ。5バンド分あるらしいから1つずつ食べてね」

まりなさんが左手に持っていた紙箱を机の上に置いた。中身はマカロンである。

「そしてもう1個。あと5分くらいで開演するからポピパの皆は舞台袖よろしくね〜」

「二二「はい!!」二二」

〜元に戻ってライブ会場内〜

開演時間まで飲み物を飲みながら待っていると、開場したようで会場内に案内された。チケットで指定された席に行き周りを見ると人しか居なかった。

「人多いな……人気のあるバンドが集まっているから納得はできるんだけどさ」

少々人の多さに酔いそうになっタイミングでP o p p i n P a r t yのみんながステージ上に出てきた。

「皆さん、こんばんは〜!!」

香澄がそう言って挨拶すると同時に1曲目のイントロが始まる。始まった途端、この会場にいたお客のボルテージも最高潮になった。

そのまま1番に入る。確か……『二重の虹』<sup>ダブルレインボウ</sup>だったよな。CDでは何度も聞いてきたけど、生で聞くのは初めて。

初ライブということもあり、俺の気持ちも周りと同じくらい高まっ

ていた。

時間が過ぎるのも早く感じていて、この時間を少しでも長く過ごしたいと思ったのは初めてだ。

　　5バンドのライブ後

「いや、楽しかったな」

終わってすぐの一言がこれであり、終わったことが少し悲しく感じってしまった。

そう思った時と同時に、受付の人にチケットを持ってきてって言われてたのを思い出したので、すぐに受付に向かった。

「すみません。チケット持ってきました」

「はい、チケットの確認できました。それでは控え室に向かいますね」  
「お願いします」

そのまま受付にいた人……いや、まりなさんと呼ぼう。名前を教えてもらったからね、俺も教えた。

受付から距離が近かったので話も短めだった。

「ほらほら早く入りな!!皆が待ってるよ」

「コンコン」「し、失礼します」

「あつ、来た!!」

いきなり香澄が抱きついてきた。

「おっふ!!いきなり抱きつくなくなっていつも言ってるだろ?」

こんなことを言ってるにも関わらず、こころ、はぐみやイヴも抱きついて来てた。

「おめえらな……まあいいや。差し入れとか食べたりしました?」

「ああマカロンね。美味しかったわよ」

「どこのお店の?」

「私も教えて欲しいな☆」

「わ、私も!!」

「あくあのマカロンね。あれは自作だよ?」

「」「えっ……」「」

みんなの声が一瞬で消え去った。えっ、俺何かした? (無自覚)

「「「エエエエエエエエ!!!」」」」

と思っただけ急に驚かれた。!!!

「えっ、みんなどうしたの?」

「あのマカロン自作だったの?」

「はい、そうですけど……なにか変なところとか……もしかして、お口に合わなかったとかですか?!」

「ううん。そんな訳じゃないんだ」

「そうだよ。手作りにしては美味しかったからだよ」

「翔斗くんって料理上手なんだね」

「羽沢さん、ありがとう。ちなみに、味は全25種類あったの気づいた人」

「ふえ!?!」

「それホントなの?」

「マカロンの色変えてたし、仕切りもしてたから分かる人には分かんなくて思っただけ……流石に分からないよね」

「ちなみに味は何があつたの?」

「イチゴ、チョコ、ホワイトチョコ、キャラメル、コーヒー、バニラ、抹茶、ピスタチオ、アーモンド、マロン、ラムレーズン、柚、黒ゴマ、ゼラニウム、マンゴー、カシス、フランボワーズ、レモン、アールグレイ、ローズ、ハーゼルナッツ、ラズベリー、ミント、バナナ、ブルーベリー、メロンの25種類かな」

「ほんとに25種類あるじゃん」

「なんでこんな所で嘘つかなきゃならんのですか」

「それもそうだなw」

「それよりさく今日のライブはどうだった?」

「めちやくちや良かったよ!!発表してるカバーでもデュエットしてる人が違ったり、未発表の曲もあったから興奮しまくりよ!!」

「それは良かったわ」

「それじゃ俺帰るn「逃がさないよ!!」……へっ?」

「これから打ち上げだから、翔斗くんも強制参加だよ!!」

「俺は観客だろ。参加者でも人が行っても良いのか!?!」

「「「うん（ええ）!!」「」」」

「……満場一致ですか。しゃーねえ、俺の奢りだ!!」

「えっ、いいの?」

「みんながいい演奏してくれたからな今すぐできる俺なりのお返しだよ」

「このまま打ち上げ（焼肉）に行った。金額?そんなものは知らないですね。」

## 突撃、翔斗の家!!

「昼作るのだるいな」

俺以外誰もいない空間でそう呟きながら考えていた。そんな時……

「ピンポン」 「んにゃ。宅配とか頼んでたっけか? まあいいか、今出ますよ!!」

外にいる人にそう伝えて(聞こえてるかは知らん)、俺は玄関に向かう。

「は〜い、どなたです……か」

ドア前にいたのは、紗夜先輩と日菜先輩だった。

「えっ!? 何でここに……というか、どうやって俺の家知ったんですか?」

「細かいことは気にしないの!! とりあえず上がるね〜!!」 ε≡(\*ノ、<3<、)ノ

「えちよ日菜先輩!! 紗夜先輩も何か言ってください……よ」

「わ、私もお邪魔しますね／＼」

日菜先輩に甘い。今日はこんな感じだろうな。紗夜先輩の中のストッパーが機能してない……

「わかりました。とりあえず、リビングに日菜先輩と居てください」

2人を家の中にあげた。日菜先輩は、中に入って5秒も経たないうちにパールとじやれつき始めた。その光景を保護者のような目で見ると紗夜先輩……傍から見たら家主ですらここが家の中ってこと忘れそうだな。

一応、昼前に2人が来た(アポ無し)ので、もしかしたらお昼食べてないのでは? まあ、俺が食べてないから何かしら作るんだが、一応聞きますか。

「紗夜先輩、日菜先輩。お昼つてもう食べてたりしてますか? 食べてないならリクエストあれば作りますよ」

「えっほんと!! それじゃあポテト作って!!」

「じゃがいもあつたっけな……あつたわ。紗夜先輩はどうします?」

ズン「私もポテトでお願いします」

「は、はい。サクッと作りますか!!」

冷蔵庫の中から、大きめの新じゃがを10個ほど取り出し、水で洗って皮をむく。

「ポテト大好きな2人がいるから、かなり多めの量にしたけど……これでも足りなかったらどうしょ……痛っ!!」

皮をむき、細切りにしてる最中にそんなことを考えてると、指を切ってしまった。

「絆創膏は……っと。近くに救急箱置いて良かつた」

傷口を流水で洗い、消毒をしてから絆創膏を貼って調理を再開する。

その後は、細切りにしたあと、3袋くらいに分けて、袋の中に小麦粉や片栗粉を入れて混ぜる。ついでに油の準備も並行して行う。

〜5分後〜

「うっし、油の準備完了!!ポテトの準備もおk。行くぞ!!」

「ゴポゴポ ジュワー」 「おっいい音じゃん!!あとは数分待てば」

ピンポン” ……今日は来客が多いこと多いこと」

家事にならないように火を止めてから玄関へ向かう。

「はーい、どなたですか」

「来ちゃった!!」

「翔斗、今大丈夫か?」

玄関にいたのは、沙綾と巴だった。

「今度は幼馴染コンビか……ってあれ、あこは?」

「あこなら、つぐん家で蘭たちと話してるはずだ」

「巴もそっちに行きそうなものだが」

「あたしは朝から和太鼓の練習してたから、今日は別行動」

「それじゃあさーやは、店番終わってからこっちに?」

「うん。今日は午前中で上がらせてもらえたから、商店街ぶらぶらしてたら巴とばったり会って……」

「今に至ると。とりあえず中入って〜なかに仲がめちやくちやいい姉妹いるけど気にしないで!!」

「おっ邪魔しま〜す!!」

2人がリビングに入って、真っ先に目を疑ったのは4人が仲良く話していることだよな。バンドもバラバラだし、学校も花咲川と羽丘が2人づつ……まあいいかポテトの続き〜。

キッチンに戻り、火を付け直す。余熱で少々揚がっているポテトがあるので、それは引き上げ、残ったポテトは様子を見ながら引き上げる。

「第2陣、投入〜!!」

2袋目は特に何も起きずに引き上げることが完了した。因みに、3袋目は揚げないことにした。

「紗夜先輩、日菜先輩。出来ましたよ〜」

「おっ、出来たんだね!!お姉ちゃん、一緒に行こ!!」

「ええ、行きましよう!!」

机の上にポテトを置いて、塩やオーロラソースなど合わせたら美味しいだろうなってやつを後付け調味料として置いておく。

「巴とさーやも食べる?」

「あたしはいいや。気遣いありがとう!!」

「私もいいかな。ご飯食べてるし」

「了解した」

ということとで、3人で2袋分。じゃがいも換算で6個分のポテトを食べた。

「それじゃあ……」

「「いただきます!!」」

結論、お店で食べるより美味しかった。自分好みの味にカスタマイズできるから、なんかいいよね（語彙力崩壊）。

「しかしまあお2人で作った分の八割を食べたのか……」

そう。彼女たちは2人で皿の上にあった八割分を10分足らずで食べるというヤバイ胃袋を披露していた。

「あー美味しかった〜!!」

「お口に合って良かったで、ピンポン」……日菜先輩、誰か呼んだ

りしてないですよね?」

「何であたしに聞くの〜!!」

「1番警戒すべきな人だからです……まあ見てきますか。お皿は台所に置いてください」

俺は三度玄関に向かう。

「はい、今度はどなた……つてええ!!」

そこに居たのは彩先輩、千聖先輩、花音先輩の3人だった。

「今日は来客が多いもんですな。俺何かしたっけ?」

「あら、私たちの他に誰かいるのかしら?」

「今居るのは氷川姉妹とさーやと巴ですね。とりあえず、中にどうぞ」

「二お邪魔します」

「つてことで8人いる訳だけど……ゲームでもします?」

「翔斗、アレあるか?」

「ちよつと巴。あれつて言われても翔斗分から「多分あると思う」何故か伝わってる……」

巴に言われたアレを取り出す。

「そうそうこれだよ!!てか、太鼓コントローラーもあるのかよ」

「なんかあったから買ったただけだお。んじゃバトるか?」

「バトるぜ!!」

巴からの希望で、家庭用ゲームの太鼓の○人S w ○ c hバージョンで点数勝負をした。

「それじゃ最初はこれな!!」

「巴!!これ最初にやる曲じゃねえ!!指破壊させる気か!!」

とか言いながら勝つんだけどね。ちなみに不可1つ分。

見てた6人に引かれかけたのは内緒だ。

「んじゃ、次どれ投げるかなー」

「翔斗くん、これいいんじゃない?」

花音先輩が指定したのは先程のより2ランク下の楽曲である。

「おつ、いいですね。巴、花音先輩からの司令だ。これをツインフル……あわよくばツイン全良するぞ」



「了解!!足引っ張んなよ!!」

1発でツイン全良しちやったよ。巴が投げた曲に比べて2ランク下の楽曲とはいえ、1回で終わると思っただけでなかったからハイタッチしたよな。

「ふく良かった。苦手な部分が一発目から通って焦ったわ」

「翔斗、前より上手くなったんじゃないか?」

「へへっ、だろ!!」

ここまで来て、紗夜先輩たちを放置していることに気づいた。

「あつ、紗夜先輩たち……1回やって見ます?」

「私はやってみようかな?」

「やりたーい!!」

やりたいって言った人は、彩先輩、日菜先輩、花音先輩の3人。あとの紗夜先輩、千聖先輩、沙綾は鑑賞だった。

〜半時間後〜

「それじゃあ簡単な曲でセッションしますか」

「3人はふつうで。俺と巴はおにで目標をツインフルで頑張りましたよ」

「三三(・▽・)／おー!!」

「まさかまさか1発で終わるとは……」

「しかも花音先輩は普通とはいえ全良ですもんね」

「えへへ(\*、▽、\*)」

「やっぱりドラムの人は才能あるのかな?」

「さあ?でも、花音先輩だけじゃなくて彩先輩も日菜先輩もしっかり初見フルコンしてるのはすごいと思いますよ」

次のゲームを準備しながらそう伝えた。

「次何やる?」

「次は全員でできるゲームですよ」

そう言って、無線コントローラーを全員の前に置いた。そしてソフトを起動する。

「おー。スマ○ラか〜」

「いや、これ以外に8人でできるゲームないでしょ」

「ちなみに、初挑戦の人？」

こう聞くと、千聖先輩、花音先輩の手があがった。

「とりあえず、花音先輩と千聖先輩は1回見る専で……他の人は設定とかいじる人いじってもらって、戦いますか」

〜2時間後〜

「さすがだね〜翔斗くん!!」

「ひ、日菜先輩こそ!!」

「……」

いきなりここからですまん。状況は8人でトーナメント戦の決勝戦で、使用キャラは俺がカー○イ。日菜先輩はゼ○ス○サムス。お互いに最後の1ストック。パーセントは俺が30%、日菜先輩が0%である。

(日菜先輩ならどの手で来る?あの人なら、この土壇場でメテオだったりヤバめなコンボをやって来るかもしれない。)

(翔斗くんは、多分下通常で転倒させてからの横スマでくるかな。上手いこと回避して、上に浮かせたいな。)

カチャカチャ「……」カチャカチャ

お互いに少量のダメージは気にせず、ステージから浮かないように立ち回っていた。

「……っ!!ヤバい!!」

「これは貰ったね!!」

カー○イが宙に浮かされて、逃げ場もない。しかも、したからゼロ○ムが上Bを打っている。

(回避が入ってくれ!!) ガチャガチャガチャ  
当たる寸前で回避コマンドが入り、ストレスで回避できた。

「……嘘っ!!」

そのままステージに戻ろうとするゼロ○ム。それを逃がす訳もな  
く……

「喰らえ!!」

俺は下Bをゼロ〇ムの直上で発動し、下に突き落とした。

「な、何とか勝てた……」

「あく負けちやったか。ねえ翔斗くん、もう1回やる?」

「集中力持たないので他の人とやってください……ああ喉乾いた」

そう言っつて、冷蔵庫の中からお茶を取りだし、コップに注いで一気に飲み干した。

「そういえば、時間を見てなかったが何時だ?」

時計を確認すると、6時頃だった。スマ〇ラのスタート時刻が3時頃だから、3時間はしているのか……まあ日菜先輩に再戦を挑まれるんだらうけどさ。

テレビの場所に戻り、紗夜先輩を呼んだ。

「どうかしましたか?」

「これ持って帰ってください」

そうそう言っつて渡したのは、昼間に作り置きだけしておいたポテトの揚がる前の状態のじゃがいもの袋だ。

「まあ昼のやつ之余りなので味は保証しますが、早い目に食べた方がいいと思いますよ?」

「あ、ありがとうございます」

喜んでくれて何よりだと思っつていたら、紗夜先輩に頭を撫でられた。

「ふえ!?えっと、紗夜先輩!」

「少しだけこうさせて下さい」

「……分かりました」

何分経っただらうか……少なくとも20分は経っているはずだ。

「あの……そろそろ恥ずかしいんですけど」

「……はっ、すみません。撫で心地が良かったもので……」

「そろそろお開きにします?」

「そうですね、日菜、帰るわよ!!」

「うん分かった」

それからそろそろと家を出て、サクツとお開きになった。1人で居

るリビングでふと疑問に思ったことを呟く。  
「そーいや、なんで俺の家知ってるんだ？」

翔斗、花見しようぜ!!

「暇だ〜」

いきなりこんなこと言ってすまん。でも異常なくらい暇なんだ。  
ピロン「んお、誰かから連絡来た。誰からだろな〜」

スマホの電源をオンにし、GINEを開く。Afterglow+  
俺のグループにメッセージが来てた。

「にやるほど……こつちで送るってことは俺にも何か用事かな?」

そう呟きながらメッセージ画面を開いた。

「みんな、今週末お花見行こ!!」

「いやめつちや急やん」

「おお、それいいな。あたしは賛成だ」

「あたしもさんせ〜い!!」

「いいねそれ」

「わ、私も!!」

「満場一致……仕方ないな。俺も行くよ」

「やった!!」

「それで、これは誰のお願いを使うんだ?普通に考えたら、発案者のひまりのなるけど?」

「えつ、もちろん全員分だよね( ( ( ; . 、 ㇿ . ( ) ) カタカタカタカタカタカタカタ」

「そんなに無くしたくないのか、その権利(。 | ㇿ | )」

「俺からしたら、早く無くして欲しいんだが……」

「なんで〜?」

「いつ、どんな無茶振りされるか分からんからな……」

「( ( ? ∇ ? . . . ) ア、ハハハハ……」

「まあいいけど。場所は決めてるのか?」

「一応候補はね……ここがいいなって!!」

「おつ、そこ私知ってるよ!!」

「おお〜どうだった?」

「うん。桜の種類が多かったし、全部満開だったから綺麗だったよ」

“：φ(◎◎へ) ホオホオ：”

“それじゃあひまりの意見に賛成の人”

“はい(・ω・)ノ”

“(＊・▽・＊)ノ ハイ”

“\ハイ／”

“ノ”

“全員賛成だな。土日のどっちの日で何時からするんだ?”

“わ、私土曜日に用事あるから、日曜日でもいい?”

“流石に1人を放って行けないな”

“んじや日曜日に決定くあとは、何時からしてほしいとか希望ある人いる?”

“出来ればいいんだが、夜桜を見たいから4時半くらいに羽沢珈琲店集合でいいかな?”

“(ー■□■)へイトモ!!”

“そこまで見てスマホを置く。”

「よし。花見の準備をしますか。小さめのリュックはどこ置いたっけな……」

「NI☆TI☆YOU☆BI」

「へー、Afterglowの皆とお花見行くんだ」

「そうなんですよ。しかもバイト終わってから2時間後からなので、めっちゃ楽しみなですよ!!」

「現在時刻14:30。最近新規で始めたCIRCLEでのスタッフをこなしながら、利用客があまりいないので、まりなさんと喋っていた。」

「でも、女子が苦手な翔斗くんが女子とお花見か」

「ちなみに、まりなさんには俺が女子を苦手に行っていることは話してある。」

「そうですね。でも、ポピパの皆……と言うより、俺と関わってくれてる人たちは、俺を受け入れてくれているので、最近はある程度の対応はできるようになってきている様な気がします」

「ならよかった。今日は15時までだけど、早く上がっていいよ」  
「えっ、それはありがたい話なんですけど……お店の方大丈夫そうですか?」

「大丈夫大丈夫!!君が来るまでずっと1人でやってたんだよ?それに、今日は15時以降も利用客は少ないから1人で捌けるよ」

「……分かりました。また別のタイミングでお手伝いします。お疲れ様でした」

「お花見、楽しんでくるんだよ!!」

「分かっていますっ!!」

バイトが早く終わり、家に直帰した俺は服を着替え、先日準備したカバンを持って集合場所の羽沢珈琲店に向かった。

カランカラン「いらっしやいませ、って翔斗くん!!」

「よっ、つぐみ。ちよつと早く来ちゃったけど、いつもの席って空いてたりする?」

「うん、こちらにどうぞ」

そう言って案内されたのは、カウンター席。俺が1人で来る時はだいたいこの席だ。

「ご注文はお決まりですか?」

「ブレンドコーヒーで」

「かしこまりました」

そう言って、つぐみはマスターにオーダーを伝える。伝えてから、つぐみはマスターに何か言われたようで、裏口の奥に入っていった。多分、早く上がらせてもらったんだらう。

数分後、つぐみが俺の隣に座った。

「早く上がらせてもらったんだな」

「うん。だって、この後は皆でお花見の約束だもん。私、楽しみにしてたんだよ?」

つぐみは笑顔でそう言った。ヤバい、守りたいこの笑顔。

「そっか。つぐみたちは毎年行ってるのか?」

「うん。Afterglowを結成してからは毎年行ってるよ。翔斗くんはお花見行くのいつ以来なの?」

「俺、俺か……多分中1以来な気がするな。それ以降行ける機会が無かったし」

ちよつと遠い目で、マスターがコーヒーをドリップしているところをぼんやり見ていると、急につぐみが両手を握ってきた。

「それじゃあ、今日は最高の思い出をいっぱい作ろう!!」

「そうぞぞ」

声のした方に振り向くと、マスターがコーヒーを持って来てくれた。いた。

「君の過去に何かがあるかを私も娘も知っている。だからこそ、その記憶を超えるくらいの楽しい思い出を作って来るんだ」

「マスター……」

確かにそうぞ。過去ばかり見ても今は変わらない。なら、今を全力で楽しむだけだよな。

「今日のお花見。全力で楽しもうな、つぐみ!!」

「うん!!」

持ってきてくれたコーヒーは少しだけ甘い味がした。ブラックのはずなんだけどな。

そのまま少し喋っていると、俺がコーヒーを飲み終わったタイミン  
グで、A f t e r g l o w 全員が揃った。

「全員揃ったな……それじゃ行くか!!」

「……うん（ああ）!!」

そのまま最寄りの駅まで向かい、電車に乗る。時間も時間だから6  
人で座れる席が空いていたので、周りを確認してから座った。

「そういうえば、翔斗くんはなんで夜桜を見たいの?」

「それは……昼の桜はよく見るから、たまにはいつもと違う時間帯の桜を見てみたいなって思ったからかな」

「いいじゃん、石崎らしくて」

「ありがと、美竹さん」

俺は電車の窓から見える夕焼けをぼーっと眺めてた。周りではなにやら会話をしているようだが、俺の耳には届かなかった。

「次は、  
× 駅。× 駅です。お降りのお客様は……」



「ごこだね、ひまりちゃん」

「うん。つぐ、翔斗くんに教えてあげて」

「翔斗くん、この駅で降りるよ」

「……………」

「…………翔斗くん!!」

「うおっ!!ごめん、つぐみ」

謝ったてすぐにドアが開いたので、急いで電車を降りる。

そのまま、ひまりの先導通りに進むと、綺麗な桜並木が目飛び込んできた。

「…………おおく…………」

俺たち感嘆の声をあげた。ふとひまりの方を見ると、ドヤアという効果音が付きそうなほど見事なドヤ顔をしていたので、すかさず巴が手刀をひまりの頭に打ち込む。

「痛っく何するの巴!!」

「悪い悪い。ひまりのドヤ顔にちよつとイラツとしたから、ついやっちゃった」

「…………フツ、ハハハハ!!」

笑っちゃうのね。ウザかったとはいえ、笑っていいもんなの、これ？

「みんな酷いよく!!翔斗くんも何か言つてよ!!」

「…………うん、まあ、ウザかったのは事実だから、素直に受け入れた方がいいと思うぞ」

「そんなく!!」

落ち込むひまりを横目に見ながら、俺はデジタルカメラを取りだし、桜の写真を撮る。

「うん。いい桜だ」ボソツ

「翔斗くん、奥に行くよく!!」

「ん、分かつたく!!」

先に行く5人を追いかけて、見晴らしのいい所に着いた。近くにお店も出てるから買いに行くのも困らないだろう。

「それじゃあここでお花見しよつか」

「ここだな。ほい、レジャーシート。敷くから少し待っててくれ」

「それじゃあ、私たちは色々食べ物買ってくるね」

「ん、了解!!」

レジャーシートはすぐ敷き終わったので、5人の帰りを待っている  
と、パスパレの皆さんと遭遇した。

「あつ、翔斗くんだ〜!!」

「ごぶっ!! 日菜先輩……倒れたらどうする気なんでしょうか!？」

「ご、ごめんね。そんなつもりじゃ……」

「あつ……言いすぎましたね。ごめんなさい」

日菜先輩が泣きそうになってたので、一瞬で謝る。日菜先輩の後ろ  
にやばいオーラをまとってる人がいるんだよな。

「翔斗くん、買ってきたよ……つてパスパレの皆さん!! どうしてここ  
に!？」

「ついさつき、こちら辺でのロケが終わったから、ついでに花見しよっ  
て言ったらみんなが乗ってくれたんだ〜」

「なるほど……それじゃあ一緒に楽しめますか？」

「えっ、いいんですか？」

「はい。レジャーシートはもうひとつありますので、みんなと一緒に  
楽しみましょう?」

「「「はい!!」」」」

それから、Afterglow+Pastel\*Palette  
俺でお花見を楽しんだ。こんな光景を見られたらファンに殺される  
ぜ。

## 羽沢珈琲店でのお手伝い

「本日の予定は……つと」

とある休日の朝。基本的にはバイトが入ってるので、毎朝本日の予定を確認していた。確認さえすれば忘れることは少ないからな。

「うーん……今日はバイトが両方とも無いのな」

そう、本日はまるまる休みとなっていた。現在時刻は朝の7時を少し過ぎたくらい。ひとまず体を起こして、顔を洗うことにした。

とりあえず、朝にやることはひとまず済ませた。これからどうしようと考えていた時、とあることを思い出した。

「最近、羽沢珈琲店に行つてねえや。久々に行くのでしょうか」

そう言いながら、財布をいつものカバンに入れ、家を出た。

家から商店街はそこまで遠くはなく、羽沢珈琲店には約徒歩10分で着いた。

なんやかんやで羽沢珈琲店に着くと、外に少しだけ行列ができていた。中をちらつと見ていると、席は満席。そして、従業員は3名。詳細は、若宮さんをつぐみのお母さんがホール。マスターことつぐみのお父さんがキッチンだ。

「これは、中に入ってから手伝った方がいいのか？まあ、とりあえず中に入つてからだ」

数分したら、中に入れたので若宮さんに案内してもらい、いつものカウンター席に座った。そして、マスターにこう伝える。

「マスター、手伝った方がいいですか？」

「手伝ってくれるならありがたいが……」

「なら、喜んでやりますよ。もしかしたら、つぐみにサプライズ的なこと出来そうですし」

「……分かった。すぐに制服を持ってこよう」

そう言つてマスターは中に行く。入れ替わりでつぐみのお母さんが厨房に入った。

3分くらいしたあと、マスターが戻つてきて、羽沢珈琲店の制服とエプロンを持ってきてくれた。

「この埋め合わせはいつかするからね」

「その言葉信じてますからね」

そう言つて厨房の奥に行きササツと着替えて、マスターの元に行く。

「それで、俺は何すればいいんですか？」

「そうだな……若宮さんと一緒にホールをお願いしたい」

「ホール……ですね。やれるだけやってみますよ」

「頼んだよ。あと、うちの嫁にキッチンに来てくれって言つていけないかな？」

「了解です」

そのままホールに出て、つぐみのお母さんに要件を伝え、若宮さんと一緒に仕事をする。

「すみませーん」

「はい。少々お待ちください」

「ブレンドコーヒーとショートケーキーっ」

「かしこまりました。ブレンドコーヒーとショートケーキですね」

「シヨウトさん。これを3番テーブルに持つて行ってくれますか？」

「分かった。代わりに、2番テーブルの人の注文渡してきて」

「分かりました!!」

「おーい、兄ちゃん!!」

「少々お待ちくださいい〜」

忙しすぎね?この仕事。いつも2人でこなせる量じゃないでしょ……と思いつつもピークが過ぎるまで頑張つて過ぎした。

その間に……

カランカラン「いらつしやいませ!!」

「おや、今日は翔斗くんが働いてるんだね。うーん、儂い」

「でも、翔斗さんつて本来ここで働いてないのでは?」

「薫さん、麻弥さん。色々あつてピンチヒッターなんですよ。まあ、一応店員なので何かあればお願いしますね。それでは席にご案内します」

薫さんと麻弥さんが来たり……

「いらっしやいませ!!」

「やつほく!!翔斗」ドスン

「ノブツ……一応仕事中なんだが、こころ」

「あら、そうだったの?それはごめんなさい」

「こころ、待つてよ!!」

「ごめんね、美咲!!待ちきれなくって!!」

「いや、走らなくても喫茶店は逃げないから……」

「お疲れ様です、美咲」

「あれ?翔斗つてここで働いてたっけ?」

「まあ、色々あるんですよ……察してください」

「わ、わかった……」

「それでは席にご案内しますね」

「こころと美咲が来たり……他にも色んな人がやつてきた。

それから数時間が経ち……

カランカラン「いらっしやいま……」あれ、翔斗くん。なんでここに?」つぐみだったか。朝から忙しそうだったから、手伝ってるだけだよ」

「ごめんね、翔斗くん。もう上がってもいいよ?」

「いや、1度引き受けた仕事だ。最後までやるさ」

「それじゃあお願いするね」

そのまま、若宮さんの代わりにつぐみが入って、運営を続けた。

その後数時間が経ち、仕事に慣れてきた頃……ある事件が起きた。

「おい!!何だこのコーヒーは!!不味いんだけど!!金返しやがれ!!」

俗に言うクレーマーが現れた。どこかで見たことがある気がする。

俺は厨房で仕事をしながら、クレーマーの人とどこで出会ったのかを考えながら対処をしに行こうとしていた。

「も、申し訳ございません!!」

俺が動き始めた時には、羽沢さんがそこに行っていた。

「誰かと思えばこんなガキを出しやがって……お前は俺を舐めてるのか、ああ?」

「そ、そんなことは……」

「大体、この店の雰囲気になんか食わねえし、珈琲も不味いし、それに、お前みたいなクソガキが働いてるんだ……本当に最低な店だよな!!」

プツン……俺の中で何か切れたのを感じた。あんまり人前では怒りたくないのだが、流石に友達のことをクソガキとか言われたらキレるわ。できるだけ冷静かつ丁寧な言葉で話しかける。

「なんとか言ったらどうなんだ？黙ってることしかできな「お客様、そこまでにした方がいいですよ」……ああ？なんだテメエ」  
「翔斗くん!!」

思い出した。こいつ、俺をいじめてたうちの一人だわ。

「よお、石崎。ここでバイトでもしてんのか？」

「……それがどうした？」

「ここで一発殴らせる。そして、この珈琲の代金はお前が支払え」

「……断るといったら？」

「血祭りにあげて、土下座させるだけだな」

そう言いながら殴りかかってきた。それを右に軽くいなし、こういった。

「お前はあれから変わってないんだな……残念だよ長谷川」

「お前!! いっぺん死にやがれ!!」

そう言って刃物を取り出す長谷川。さすがの俺も刃物は想定外だ。そして、奴の動きが思っていた以上に早い。本当は刃物を持っている方の手首を掴みたかったのだが、掴めなかったので、刃物を俺の左手で受け止め、逆の手で手刀を落とす。手刀とは思えないほど鈍い音と長谷川の悲鳴が店内に響き渡った。

「いっ!! 暴力で訴えてやるからな」

「訴えられるなら訴えてみなよ。その場合、俺はこの映像を警察に差し出すからな」

そう言って、防犯カメラを指さす。

「この場合、多分正当防衛になるからな……さて、不味いとは言ったが1度口をつけたものだ。さっさとコーヒーの代金を支払って出ていけ!!」

俺は声を大にしてそう叫んだ。長谷川は舌打ちをして外に出て

いった。金は支払わずにだ。この件も踏まえて俺は警察に連絡することにした。

「ふう……大丈夫そうですか?」

後ろを見ると羽沢さんが泣きそうな顔でこつちを見てきた。

「私は大丈夫出し、お客さんも大丈夫だけど、翔斗くん……大丈夫?」

「大丈夫、じゃないかな……主に左手」

そう言いながら指を指すと、左手からポタポタと血が流れていた。

「応急処置用の包帯を俺のカバンから持ってきてくれないかな?」

「う、うん。すぐに持ってきてくるよ!!」

つぐみが持ってきてくれる間に、厨房で傷口を洗い、つぐみのお父さんが持ってきてくれた消毒液で消毒をし、絆創膏を貼った。

全てが終わったタイミングでつぐみが包帯を持ってきてくれたので、包帯を巻いた。

「翔斗くん、さっきの人って……」

「思ってる通りだと思う。昔俺をいじめてた人の1人だよ。なんでここにいるのかはわかんないけどさ」

「やつぱりそうなんだ……」

「そういえば、つぐみはあいつに……長谷川に何もされてない?」

「うん。何もされてないよ」

「なら良かった。それじゃあ、残りの仕事も頑張ろうか」

そう言って、残りの時間仕事をこなしていた。途中、思ったより傷が深く、痛みを伴った時もあったが、どうにかして手を止めずに頑張った。

「お疲れ様だよ、翔斗くん」

「お疲れ様です、マスター」

「それと、娘を守ってくれてありがとう」

「いえいえ。こちらも、いつも助けて貰ってますから」

「ははっ。そういう事しておくよ。それより、はい。本日の給料だよ」

そう言って茶封筒を渡される。中身は、1万円が入っていた。「こんなに貰ってもいいんですか?」

「ああ。時給1000円×9時間分+娘を守ってくれたお礼だよ」

「あ、ありがとうございます!!」

「それじゃあ気をつけて帰るんだよ」

「はい。今日はありがとうございます!!」

そう言つて帰宅している途中、お高めのお店に入つて夕飯を食べたのは別のお話……

くおまけ 翔斗がいないグループでの出来事く

“そういえばだけど、今日つぐの店にクレーマーが来たんだって？”

“聞いた聞いた。お店の方は無傷だけど店員さん1人負傷したって話でしょ?”

“それ、ホントか?”

“つぐみ、大丈夫?”

“クレーマーが来たのは本当出し、負傷者が出たのも本当だよ?”

“その負傷者つてつぐみじゃないよね?”

“私じゃないんだけど、翔斗くんなの?”

“因みに、怪我の内容つて?”

“ナイフの切り傷だよ。幸い、そこまで深くないつて本人は言つてたけど……真相はわかんないかな”

“とりあえず、翔斗のことは少しの間様子を見ておこう”

“ほかのメンバーにも伝えておきな!!”

“巴ちゃん……お願ひするね!!”



翔, s cooking. 始動!!

現在午前8:00頃。本日の予定は特に無い休日。外を見ると生憎の曇り模様だった。

「本日は曇りですか……こんな時に限って人来ないよな?」

「まあ外に出る予定が買い出しだけ……と思っていたところに

「ブーブー ブーブー」

電話が来た。

「もしもし、石崎です」

「もしもし、翔斗さんの電話であつてるよね?」

「おお、りみか。何かあつたか?」

「えつとね、今日の練習がお昼までだから、お昼ごはんを食べに翔斗くんの家に行つてもいい……かな?」

「急な風の吹き回しだな……」

「別に構わないが……りみ以外のメンバーは来るのか?」

「えつとね……全員行くつてさ」

「おけ。なら、俺が迎えに行こうか?」

「えつ、迎えに来てくれるの?」

「ああ。終わりそうなタイミングで連絡さえしてくればだけど」

「なら終わるタイミング分かったら連絡するね」

「了解。それじゃまた後でな」

「うん!!」

さて、買い出しの前だったから良かった。今から買い出しに行くか。

〜数分後 近くのスーパーにて〜

「さて、何買うかは決めてるし……さつさと買うか」

そう小声で呟くと、野菜を売っている場所に見知った人が見えた。

「麻弥先輩!!」

「しよ、翔斗さん!? きゅ、急にどうしたんですか!」

「何も無いですよ。買い出しでたまたま見かけたから読呼んで見た感じです」

「そ、それならいいんですけど……びっくりして寿命縮むかと思いましたがよ〜」

「アハハ…それはすみません。それより、何買ってたんですか?」

「ジブンは、パスパレの皆でロケすることになったから買い出ししてきてつて千聖さんに言われたので、買いに来ただけです。そう言う翔斗さんは何を買いに来たんですか?」

「実は……ポピパの皆が来るのが今朝決まっていますね。自分も買い出しに来たところなんですよ」

「そうなんです。何作る予定なんですか?」

「とりあえず人数多いので焼きそばでも作ろうかと。家にホットプレートもありますし」

「なるほど〜つとそろそろ集合時間迫ってきたのでジブンはこれで」  
「わかりました!!ロケ頑張ってください」

麻弥さんと別れ、黙々と買い出しを済ませていると……

「あれ、翔斗じゃん!!」

「リサ先輩!!」

なんとリサ先輩と会った。

「見た感じ……お昼の買い出しだよ。誰か家に来るのかな?」

「まあそんなところです。リサ先輩も買い出しって感じですけど……お菓子でも作るんですか?」

「よく分かったね!!まだ薄力粉と砂糖しか買ってないのに」

「いやいや。砂糖は砂糖でも、リサ先輩が買おうとしているの粉砂糖じゃないですか。普通の料理なら粉砂糖はあまり使わないと思っただけなので」

「言われてみればそうだね。それじゃ、早く帰って試作したいから……またね」

「はい、またねです!!」

リサ先輩と別れたあと、俺は麺と野菜を買って自宅に帰った。えっ、肉は要らんのかって?家にあったから買わないことにした。

帰ってる途中にりみから電話が来た。

「もしもし」

「あつ、翔斗くん。練習終わったよ!!」

やけにハイテンションなりみの声がスマホから聞こえる。後ろもちよつと騒がしいような……?」

「お疲れ!!んじや俺はどこに迎えに行つた方がいい?」

「うーん……それじやあ有咲ちゃんの家に迎えに来て」

「了解。荷物持ちながらになるが構わないか?」

「うん!!10分程度で着いてくれたら、皆の片付けがちようど終わると思うから出来るだけ早く来てね」

「分かった。着いたら連絡するから待つてろよ」

「「「はーい」」」

まさかスピーカーだったとは……まあいいか。距離的にはそこま  
で無いけど、今の時間的にめつちや暑いから早めに行こつと。

少年移動中

「さてと……目的地に着いた訳だし、りみに通話しなきゃな……つと  
思つてたら来たんだが(●。☒。●。)」

「もしもし、もう着いたかな?」

「うん。今着いたけど……よく着いたことが分かつたな」

「だつて見てるもん」

「えつ、どこから!?!」

「横見たら分かるよ」

そう言われたのでスマホを耳に当てながら横を見る。すると……  
「「やつほく!!」」

そう言つて香澄とおたえが飛びついてきた。

「えつちよまつ……アッアッアッアッ」

俺は咄嗟に荷物を避け、2人を受け止めようとしたのだが……耐え  
切れる訳もなく後ろに倒れてしまった。

「イテテ……危うく買ったやつが潰れるかと思つた」

「大丈夫?」

「何でやつた本人がこのセリフ言うんだよ……まあ大丈夫だけどさ」

「ごめん翔斗。止めれなかつた」

「有咲が止めきれないほどの勢いで飛んできたのかよ……まあいい。

早く行くぞ」

「私もうちよつとこのままがいい」

「早く避けないと2人の分だけ昼飯無くなるけどいいのか？」

「それはダメ〜!!」

「皆、早く行くよ」

『昼飯無くすぞ』って言ったたら、手を翻したかのように俺の手を引っ張る2人にちよつと笑ってしまったのは内緒だ。

「分かったから引っ張んなって。さーや、荷物もってきてくれ!!」

「了解〜」

香澄とおたえに引っ張られながら家に帰った。

「ただいま〜」

「二二お邪魔します!!」二二」

「皆はりビングで待っていてくれ。俺は料理作る準備するから」

「わ、私も手伝おうか?」

「今はいいよ〜後で手伝ってもらう時が来るから」

「分かった!!」

そう言ってからホットプレートを机の上に出し、いつでも使えるように準備する。

「さてと……料理開始だ」

人参は皮をむいてから短冊切り、玉ねぎは薄切り、キャベツはざく切りにし、ポウルに入れておく

豚バラは食べやすい大きさに切っておく

ホットプレートにオリーブオイルを引き、ホットプレートが十分に温まったら豚バラ肉を入れる

お肉がいい色になったら切った野菜をホットプレートに入れる

野菜がしんなりしてきたら麺と水を入れ少しほぐし蓋を閉め3分ほど待つ

待ってる間に醤油・料理酒大さじ2、鶏がらスープの素小さじ4、塩小さじ1、ニンニク・しょうがチューブ各4cm程を混ぜ合わせ、合わせ調味料を作る

3分経ったら蓋を開け麺をほぐしながら合わせ調味料をかける。

「いい匂い〜」

「翔斗くん、完成した?」

「ああ!! 今日作ったのは塩焼きそばです。お好みで塩コショウ使ってね」

皆が使う用の皿と箸を料理名を伝えながら準備する。

「」「」「いただきます!!」「」「」

5人がそれぞれのペースで食べる。

「美味しい」

「野菜が硬すぎず……」

「かと言ってしんなりしすぎてる訳じゃない」

「こんなに美味しい焼きそばは初めてだよ」

「くっ……負けた」

何と戦ってるんだ、若干1名。

「ご好評なようで何より。それじゃあ俺も食べるか、いただきます……うん、初めて作ったけど美味しくできてるようだな」

「えっ、これ初めて作ったの!?!」

「ああ。前々から作りたいって思ってたんだけど、機会がなくてな……皆が来るんだったら丁度いいって思って作ってみただ」

「翔斗くん。後でレシピ教えてくれる?」

「了解。何ならホットプレート使わない手順のやつ教えるよ」

「ありがとう、翔斗くん!!」

「代わりに、またライブする時にいち早く教えてくれよ?」

「もちろん!!」

皆が食べ終わってからレシピを渡し、俺の家で遊んで帰ったとき。

みんなが帰ったあと、5人のGINEにほぼ同時に塩焼きそば作ってたって報告と写真が届くとは思わなかったけどねw

それに、家で飼ってるパールとポピパの皆が一緒に遊んでる動画(計50分ほど)を友希那さんに送ったら、初めの1分で尊いって隣の家のリサ先輩の部屋まで聞こえるぐらいの大きい声で連呼しながらもがき苦しんでたらしいですよ? (リサ先輩談)

## ライブと出会いとお手伝い

「……えっ!?!」

「だーかーらー。私たち、ポピパの皆と合同ライブすることになったから、翔斗くんに見に来て欲しいの!!」

「……はい!?!」

いきなりどうしたんだって?これは5分前くらいに遡る……

「翔斗くん!!」

「彩先輩。どうかしましたか?」

「えっとね……」

「あ、彩先輩?」

「……」

「なんで無言なんです?」

「……」

「もしもし」ゞ( ☒?☒ )フリフリ

4分くらい経っただろうか……?何も無いのかなと思っていた時に彩先輩の口が開かれた。

「わ、私たち、ポピパの皆と合同ライブする事になったから、見に来てくれりゅ……」

あつ噛んだ……だいたい言いたいことは分かるけどここで噛みますかね。

「……えっ!?!」

「だーかーらー!!パスパレとポピパが合同ライブするから、翔斗くんに見に来て欲しいの!!」

「……はい!?!」

返事をしたタイミングでちょうど理解したため、驚きが反応に出ってしまった。

「えっ、アフグロとかロゼリアとかハロハピはいなくて、2バンドの合同ライブってことですよね……?」

「うん、思ってる通りだよ……と言うか、それ以外ないと思うな」

「見に行くかどうかは、日程によるな……としか今は言えないな。何

時あるんですか?」

「今週末の12時からだよ」

「ちよつと待ってな……その日のその時間は空いてるから見に行きま  
す」

「それならくはい!!このチケット使って!!」

「ありがとうごさいま……す!!ってこのチケットプレミアムチケット  
じゃないですか!」

「そうだよ!!」

「こんないい物貰っても「翔斗くんだからあげたんだよ」……なんで俺  
なんかに」

「バイトの時とか私失敗することが多くていつも翔斗くんの手伝って  
もらってるでしょ?」

「それはそうですけど、それだけの事で……?」

「それだけの事って言わないで!!」

珍しく彩先輩が声を荒らげたので、俺は肩を震わせてしまった。

「翔斗くんから見たらそれだけの事かもしれないけど、私からしたら  
助かってることなんだよ!!たくさん迷惑もかけてるんだよ!!私の今  
出来る精一杯の恩返しをさせてよ!!」

「……………」

昔も権に似たようなことを言われたな……

「翔くん!!」

「権、どうかした?」

「これあげる」

権から貰ったのは映画のチケットだった。今話題沸騰中のアク  
シヨン物の作品で、3枚貰った。

「これ、貰ってもいいの?」

「うん。お父さんが3枚貰ってきてさ、私そういうのに興味無いから  
翔くんにあげようと思って。それに、いつも翔くんには色々手伝って  
もらってるから、私からの第一の恩返しだと思って……ね!!」

「第一のつて……これから第二、第三の恩返しって続きそうだね」

「だって続けるつもりだもん」

「……分かった!!僕もいっぱいお手伝いしなきゃね。」

そう言つて、2人笑つていた光景を。

(あれから何年経ったかは忘れたけど、こんなこと思い出すなんてな……しつから受け取らなきゃな)

「……おい、翔斗くん?」

「……分かりました。しつかり見させてもらいますね」

「ありがとう、翔斗くん!!」

週末の予定が思わぬ形で決まった。

〜数日後 週末〜

「今日か、一応場所の確認しといて……つと近いとも遠いとも言えない距離にあるなあ」

現在時刻朝8時。12時からライブつてことなので、しつかり準備して行こうと思ひ、差し入れから作る。

「あの人たち何が好きなんだろう……まあ適当に作るか」

まあ何作つたかはどうでもいい話だから置いておこう……んえ? そんなことないつて?……後で分かるからちよつと待つてくれ。

というか、前回のライブでも思つたんだが……皆なんでプレミアムチケツトくれるんだろう?

そんなこんな考えてたら差し入れするものが出来たので、そいつをカバンに詰めて時間を確認する

「11時頃か。今から出たら間に合うな!!」

忘れ物がないかを確認して向かい始めた。

「……だな!!」

30分くらいかけて今日の会場まで行つたら、既に多くの人並んでいた。

「うわつ、遅かつたかな……ゆつくり待つてしますか」

幸いなことに、外はそこまで暑くなかつたので、待つのはそこまで



苦ではなかった。

数十分が経過した頃に俺の番が来た。

そこから難なく受付を済ませ、会場の中に入り自分の席に座る。まあ受付の人に驚かれたのは内緒だ。

「アイドルのライブだからか、やっぱり人が多いな……」

少し場違い感を感じつつ、ライブが始まるのを楽しみに待っていた。

照明がつき、パスパレの5人がライトアップされた。

「こんにちは!! 私たち……」

『Pastel\*Paletteです!!』

「今日は私たち主催でのPoppin Partyさんの合同ライブにお越しいただき、ありがとうございます!!」

「ウオー!!」

「精一杯頑張るので、応援よろしくね!!」

「皆さん、しっかり目に焼き付けておいてくださいね」

「私達色に染めちゃうからね」

「しっかり着いてきてくださいツス!!」

「ブシドー!!」

「ウオー!!」

「彩ちゃん神々!!」

「千聖様くこっち見て」

「それでは一曲目……『しゅわりん☆どりーみん』です」

その一言から、ライブが始まった。

ついさつきライブが終わったから感想を簡潔に伝えようと思う……神だ。これを友達に言ったら発狂すると思うくらいいいセトリだと思った。

ライブが終わってから、プレミアムチケットだからなにか特典がないかと思いきや受付へ向かったところ、このチケットはパスパレとポピパ

両方の楽屋に入れる特典付きだったらしく、パスパレの楽屋の前にいた。

「ω・( )?」 コンコン 「どうぞ〜」

「失礼します」

「あつ、翔斗くん!!来てくれてたんだね!!」

「行かないわけではないでしょ。超簡潔に伝えるけど前聞いた時より上手になってると思う。まあ、彩先輩は噛まなければ完璧だったと思いますよ」

「それは言わないで〜!!」

「まあ彩先輩らしいからこのままでもいいんですけどね。後、差し入れます」

そう言つて差し入れを渡す。今回は袋を変えて誰に渡すかをはっきりさせたのですんなり渡せた。

渡し終わったと同時にドアがノックされた。

「どうぞ〜」

入ってきたのは2人の少女だった。

「はっ!! P a s t e l \* P a l e t t e の皆さんが知らない男の人と喋ってらっしやる!!」

「落ち着けパレオ!!あの人も私たちと一緒に、プレミアムチケットを持ってたんだよ」

「あつ、パレオちゃんにますきさんも。来てくれてたんだ!!」

「はい!!パスパレの皆さんがどこどこでライブをやっても見に行きますので!!それでですな……」

めちやくちや目がキラキラしながら喋ってるよ。しかも一人一人にちゃんとコメントしてるよ。

俺はサツと離れ、壁際にいたもう1人の少女に話しかける。

「えつと、彼女はいつもあんな感じなんですか?」

「ああ。パレオはパスパレに関わることならよくこうなるんだよ」

「貴方は行かなくていいんですか?」

「まあパレオが落ち着いたら話に行くかな……つと自己紹介してなかったな。名前は佐藤ますき。 R A I S E A S U I L E N

“っていうバンドではマスキングって名前で活動している”

『RAISE A SUILEN』チュチュユさんが作ったバンドで、あの『Roselia』とも引けを取らないくらいの技術力を持っていると俺は思っている。

「貴方があのマスキングさんでしたか。俺は、石崎翔斗って言います。RASのライブなかなかチケット取れなくて見に行けてないんですよね」

「おっ、私たちのこと知ってくれてたんだな!!ライブ見たいなら私と連絡先交換しようぜ!!翔斗の席を確保しといてやるよ」

「マジですか!!ますきさん神すぎる〜」

「これでよし……っと。あたしも混ざってくるぜ」

ますきさんが話の輪に入ったのと同時くらいに、パレオさんがこちらにきた。

「パレオさん、もういいんですか?」

「はい!!十分お話ししましたので。今からは翔斗さんの話を聞きたいなと思って」

「俺の話って……特に話すことないと思うけど」

「いいえ、パスパレの皆さんとの関係を話してもらいますよ!!」

「ええ……」

パレオさんの尋問が10分くらい掛かったそうなの。

「パレオ、そこまでにしとけよ」

「まだ聞きたいことがいっぱいあるのですが……また後日にしましょう」

「まだ聞きたいことあるの……?」

「勿論です!!」

俺は悟った。パレオからは逃げられないと。

「それじゃあまた来ます」

「またね〜、翔斗くん、ますきちちゃん、パレオちゃん!!」

楽屋を出てから2人とは別れ、ポピパの楽屋に向かった。楽屋の前に着くと、1人の少女が扉の前に立っていた。

「入らないんですか?」

「あつ、えつと……入ろうと思ったんですけど、勇気が出なくて」  
「それなら、一緒に入る？」

「……お願いしてもいいですか？」

「了解。なら俺の後に入ってきてくれ」

「ω・(・)?」 コンコン 「どうぞ」

「お邪魔するぞ」

「お、お邪魔します」

「あつ、翔斗くんにましろちゃんだ」

「香澄先輩、お久しぶりです」

「2人は一緒に来たの？」

「んいや、たまたま扉の前で見かけて一緒に入っただけ。ついでに差し入れ」

「そつかく。ところで翔斗くん、ましろちゃんの事どこかで見たことあるでしょ」

「見たこと……あるわ」

そう。前にC i R C L Eでポピパ主催のライブをした時に見に来てた子だわ。

「翔斗さん」

「んいや、どうしましたましろ？」

「先ほどはありがとうございました」

「どういたしまして」

ライブ見に行ったら楽しい思い出と新しい出会いが沢山あって忘れられない一日になった。

頑張ってる彼女に素敵な一日を（羽沢つぐみ誕生日  
回）

「準備できてる？」

「ああ、バッチリだ!!」

「翔くんにも連絡にしてる？」

「もちろんやってる。そろそろ来ると思うけど……」

「☒?☒」ノ「IOガチャ

「来たよ」

「来たね(???)」

「えっ……どしたの？」

「それじゃ主役呼ぼつか」

「そういえば……つぐが見えない。なるほどな」

「えっ、聞いてないの!!」

「そりや急に呼ばれたからな……何も知らないよ」

「すぐにできることとかある？」

「そんなこと言われても……」

「蘭。なんて伝えたの？」

「えっ……用事があるからすぐに来て」とだけ

「つぐの誕生日のことは？」

「伝えてない」

「とりあえずどうするかだよな……」

「それじゃあつぐをここに呼んできてくれない？」

「了解」

「そのついでにプレゼント買ったらしいと思うよ」

「確かに……そうするわ」

「ゆつくり来てね」

「はい」

まじかく今日つぐちゃんの誕生日だったのかよ……何も聞いてないから誕プレなんて準備してなかったよ。何がいいのかも全くわ

かってないしき……

とりあえずつぐの所行くか。

「—☆／＼（・）（・）コンコン」失礼します……マスターあけましておめでとうございます」

「ああ、おめでとう翔斗君。今日はどうしたんだい？」

「ええと……蘭たちからつぐを呼んでくれてと言われまして……」  
「なるほど……少し待っていてくれ」

そう言うとマスターは店の奥に入っていった。待ち時間の間スマホを見る。

「つぐには場所伝えてないから回り道して連れてきてもいいからね!!」

「ちゃんとプレゼント買ってくるんだよ!!」

「わかってるよ」

「どうしたの、翔斗くん？」

急につぐが現れたため、咄嗟にスマホを隠す。

「い、いや。何でもないよ」

「それより、どこに向かう？」

「それなんだけど、寄りたいところあるんだけどいい？」

「いいよ!!」

「ありがと。時間も惜しいし、早速行こっか」

前に進もうとすると後ろからコートの裾を掴まれた感覚がした。

後ろを振り返るとつぐが裾を掴んでいた。

「ふ、2人の間だけ手繋いでもいい……かな？」

そんな上目遣いで見なくても……ね。

「……いいに決まってるよ!!」

そう言つてつぐを隣に寄せ、握った手を自分のポケットに入れる。

「わっ、ありがと!!」

そう言つて可愛い笑顔を見せる。人によってはこの笑顔だけで悩殺出来るのでは……? (ちなみに、投稿者は死にます)

そのまま目的地に進む。その間に通った花屋の前を通つたので、少  
し外で待つて貰つて帰り道に花を受け取るようにしておいた。

目的地はショッピングモールにあるアクセサリ店。ここでつぐに似合うアクセサリを贈ろうかなと思っている。そのついでに自分が買いたい本を買おうとした。もちろん内緒でね。

「似合うものわからんな……?」

「どうした?」

「つぐに似合うアクセサリとかあるかなって思ってた……ってええ!? あああああ有咲!」

「そんなに驚くことか?」

「いや、後ろから声掛けられたら驚くだろ」

「悪い悪い。んでつぐに似合うアクセサリか……ブローチとかどうだ? ほら、あそこにある花の形をしたブローチとか……あそこにあるネックレスとかどうだ?」

「いいね……でも、あそこにあるあれはどうだろう?」

「あれは……意外と似合うんじゃないか?」

「有咲がいいって言うならそうするか……いいこと思いついた」「何を思いついたんだ?」

「内緒」

「まあいい。喜んでくれるといいな」

「そうだな……」

「……不安か?」

「当たり前だろ? 女の子にプレゼントあげたことないからさ」

「まあ何あげても喜ぶだろうな」

「なにか言った?」

「何も」

「そうか。ならいいか」

「私用事あるから帰るな」

「ああ、ありがとうな!!」

そのまま有咲と別れ、つぐの元へ向かった。

「おーい」

「買いたいのを買えた?」

「おう!! それじゃあ次の場所に向かうか」

「次はどこに向かうの？」

「次で最後だな。それじゃあ行くか」  
「う、うん」

そのまま誕生日会場に向かった。そこに向かう前にGINEで、今から向かう」と打ったら一瞬で既読が4着いた。その時に全員気が気じゃないんだろうなと思いつつそつとスマホを閉じ、隣にある顔を見る。やはり満面の笑みを浮かべているつぐが目に入った。

(ほんとに可愛い……この笑顔守らなくちゃ)

「翔斗くん、どうしたの？」

「い、いや……早く行こうか。みんなが待ってる!!」

「み、みんなってどういうこと〜!？」

途中で予約を入れた花屋に寄って受け取ったあと、急ぎ足で会場に向かう。

「おっやつと来たな!!」

「つぐに内緒でお祝いしたいなあって思ってた」

「まりなさんに相談したらカフェテリア貸してくれるって言われたから、ここでやろうって話になった」

「まあここでは軽めにだから本番はつぐのお店だけだね〜」

「まあそういうことだ」

「ほらほら、みんながお祝いしてくれてるよ!!」

まりなさんがつぐを押ししてみんなの所に連れてきてくれた。その間にまりなさん以外の5人がクラッカーを持ち、まりなさんが押し終わったところでクラッカーを鳴らす。

「」「」「つぐ(つぐみちゃん)!!誕生日おめでとう!!」「」「」

「まりなさん、みんな……本当にありがとう!!」

「まずは、私からのプレゼント!!」

「ありがとうございます!!わあ〜綺麗なペンダント!!大切に使います」

「次は私たちからだな……じゃーん!!」

「これ、みんなで作ってくれたの？」

「そう!!つぐの誕生日ケーキ!!」



「モカとひまりにめちやくちや綺麗に飾ってもらったから綺麗だね」

「うんうん。味もつぐパパに見てもらってるから大丈夫だ!!」

「それじゃあ、いただきます……うん、美味しい」

「最後は俺だな。俺からのプレゼントは……これだ!!」

そう言って、先程買ったアクセサリの入った入れ物を出す。

「開けてもいい?」

「どうぞ」

「これって……ピアス?」

「そう、ノンホールピアス。つぐに似合うかなって思ってた」

「つけてもいい?」

「おう。なんならつけようか?」

「お願いしようかな」

「喜んで」

思った通りつぐに似合っていた。うん、いつも見ない姿もいいと思っただ。

「ついでにさ、俺も似たようなもの買ったんだ。これを俺につけてくれないか?」

「うん、いいよ!!」

つぐに俺にもうひとつのノンホールピアスをつけてくれた。

「これでお揃いだね!!」

「自分で思いついたことながら……ちよつと恥ずかしいけどな」

「い、言わないでよく／＼／＼」

そんなこと言い合ってたらまりなさんがカメラを持ってきてくれた。

「それじゃあ写真撮るよくはいチーズ!!」

つぐを中心にみんなで囲み写真を撮った後、ケーキをみんなで食べた。

その後つぐの店でいっぱいご馳走を食べたのは別のお話……あつ、買った花は、お店に置く花としてお店で渡したよ。

## 後悔と1つの希望

purururu ……ガチャ

「もしもし」

「朝早くからごめんね……」

「いや別に気にしてないからいいぞ。んで、要件は？」

「テストでいい結果とったら1つお願い聞いてくれるって約束してたよね」

「そういやそんなことあったなあ……ここでそれを言うってことは、何にするか決めたのか？」

「5人分一気に使って旅行行きたいって話になったんだ」

ほう……旅行か。最近行ってなかったから行きたいと思っていたところにこの連絡……もしかして、ついてる？

「別にみんながいいって言うならそれでいいんだが、俺も個人で旅行に行く計画立ててたから全員のお願いにしなくてもいいぞ？バイト手伝えとか、勉強教えてとか、飯食わせろとか、そういうのに使ってくれてもいいんだぞ」

「ううん。みんなで決めたことだからいいの」

「ならいいんだが……日程と場所は決まってるのか？」

「日程はまだだけど、場所は決まってるよ!!」

「そうか。なら、来月と再来月の日程送るから日程立てといてくれ」

「わかった!!詳細決まったら連絡するね!!」

「了解、他に何か言っとくことあったりする？」

「特にない……かな。お父さんから“たまには店手伝ってくれ”とは言われてたけどね……」

「了解……近々お手伝いに行くってだけ伝えといて」

「わかった!!それじゃあね」

「またなく」プツツ

「旅行か……前回は行ったのこっちは来る前だな？」ボソツ

そんな事がありながら時間は過ぎ、予定の時間まであと数分というところになった。

「そろそろ行くか……」

俺はそそくさと準備を始める。準備が終わり次第バイクに跨り目的地へ向かう。風を切りながら走ることに数10分程……駅の近くにある病院に着いた。

その中に入り、近くにいた看護師さんにお見舞いに来た旨を伝え、ゲスト用通行パスを受け取り、とある人が待っている部屋に向かう。

「入るぞ……」

返事は無いが、看護師さんに許可を貰ってるので中に入る。

「最近は来れてなくてごめん。前回来たのは引越し前だったよな」

「……」

「新しい高校には慣れたよ。あと、この病院の近くに学校もある。もしかしたら新しい友達連れてくるかもだからその時はよろしくな」

「……」

花瓶に入っている花を取り換えながら話すも、彼女からの返答は無い。

「まあそくだよな……わかってた」

「……」

俺は彼女が寝ているベッドの横に椅子を置き座り、話を続ける。

「俺さ、あの時のこと後悔してるんだ」

「……」

「だって、俺がトラックに轢かれかけなければ……お前は、こんなことにならなかつたはずだろ？」

「……」

「2人でバカ笑いできたり、テスト勉強できたりした訳だろ？」

「……」

「俺を助けたことでお前自身の人生狂わせて、本当にゴメン」

その時俺の手に何か当たった感触がした。慌てて手元を見ると、彼女の手が傍にあった。

「えっ……ま、まさか!!」

その手は少しづつ俺の手の上に重なっていく。前に触った時みたいに冷たい手ではなく、ほんのり温かい手が俺の上に乗っていた。

ふと顔を見ると、目は開いていた。俺の顔が彼女の瞳に写っていた。

俺は急いでナースコールを押し看護師さんと呼ぶ。駆け付けた看護師さんは椀の姿を観察して、直ぐに医者を呼んだ。駆け付けた医者はずぐに検査をし、俺にこう言った。

「石崎さん!! 椀さんが目覚めましたよ!!」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ!! まだ声ははっきりと聞き取れないと思われませんが、しっかりと意識があります!!」

俺は急いで外に出て、椀の両親に連絡を取る。

「もしもし」

「石崎くん。どうかしたのかい?」

「落ちて聞いて聞いてくださいね。椀が……」

「椀がどうかしたのかい?」

「……椀が目を覚めました!!」

「……ちよつと待ってくれ!! 本当に言っているのかい?」

「本当なんです!! 自分は今彼女の病室にお見舞いに行っているんです!!」

「わ、わかった!! 直ぐに向かおう!!」

「お願いします!!」

直ぐに病室に戻り、椀の様子を見る。彼女はベッドを傾け座っている状態のまま夕日を見ていた。

「椀!!」

声に反応したのか、彼女がこちらを向く。俺は急いで近づき彼女の目の前に立つ。

「覚えてるか?」

「……し、しよう、くん、だよ、ね?」

小声ながらも、しっかりと覚えていてくれたことに、俺は喜びを隠せなかった。

「ああ!! 翔くんこと石崎翔斗だ!!」

「よか、った。まちがえ、て、たら、どう、しよう、かと……」

「無理して話すなよ」

「わか、った。あい、かわらず、やさ、しい、ね」

「そうか？そう言ってくれるのは権くらいだ」

「そう、いえ、ば、がっ、こう、は？」

「今日は休み。そうだそうだ……俺引越したんだ」

「えっ、そう、なの？」

「ああ!!ここの近くにある高校に通うためにな」

「そっ、か。あの、ね……」

権がなにか言おうとした時、聞き覚えのある声が聞こえたと同時に部屋の扉が開いた。

「権!!」

「お、かあ、さん？」

「そうよ!!目覚めてよかった!!」

「お、とう、さん、は？」

「お父さんは今向かってるって。すぐに来ると思うわよ」

「そっか、それなら、よかった」

「お母様、少しお話したいことがあるので……」

「わかりました」

医者の方と権のお母さんが部屋を後にする。また2人だけの空間になった。

「それで、さつき言いかけてた事って……?」

「ううん。なん、でも、ないよ。それ、より、翔くん、の、はな、し、

きき、たい、な」

「そうだな……引越し先が元女子校だった話でもするか」

「そう、なの？」

「そうだ。そのおかげか、女の子の友達が増えたよ」

「なんにん、くらい？」

「ざっと数えただけで30人くらいかな？」

「すごく、ふえたね。いまは、たのしい？」

「ああ前居た学校と比べると、天と地ほどの差だよ」

「わたしも、はやく、なお、さな、いと、だな」

「ああ!!また一緒に遊びに行きたいからな!!」

「そつか。というか、じかんは、だいじょうぶ、なの?」

「時間……今日は休みだけど明日もあるからそろそろ帰るわ」

「そつか、がっこう、がんばっ、てね。」

「また顔出しに来るよ」

「たの、しみに、して、るね」

そのまま部屋を後にする。帰り際に権のお父さんと会ったので会釈しておいた。そのままバイクに股がって帰った。家に着いたあと、バイクを停め家の中に入ろうとした……のだが。

「何で鍵が開いてるの……?」

特に取られるものも無いはずだが、念の為リュックを肩から下ろしておく。

ガチャ

「おかえり〜」

「な……なななななんで母さんが!」

「今日あなたの家へ行くって言ってたでしょ?」

「言ってたには言ってたけど……着いたなら連絡くれない?」

「ごめんなさいすっかり忘れてたわ〜それで、機嫌がいい様だけど何かいい事あった?」

「そうそう……実はな、権が目を覚ましたんだよ!!」

「えっ……権ちゃんってあの権ちゃん……?」

「そうだよ!!それ以外の権さん知らないしw」

「なんで伝えてくれなかったのよ〜!!」

「普通に嬉しすぎて忘れてた」

「私明日行くから!!貴方も来るのよ!!」

「明日は平日だから学校だわ」

「終わってからに決まってるじゃない」

「知ってた……わかったよ」

「そうと知ったからには、今日は赤飯よ!!」

「いや、俺がなにかめでたい事した訳じゃないからそこまでしなくても……」

「という訳で準備したのがこちらです」

「準備はや!! って話聞いてた?」

「聞いてたわよ」

「絶対聞いてないじゃん」

「聞いてたわよ」ガヤガヤ

今日も石崎家は平和です。

甘え甘えられる関係っていいよね

椀が目覚めてから数ヶ月経ったある日。夏休みというのに、俺……というか俺たち生徒会の人々とはある書類を生徒会室で作っていた。その自身はと言うと……

「花咲川・羽丘・月ノ森合同体育祭・文化祭」

これである。いきなり何事だ!? と思った人。俺もそう思ってる。しかし、これに関しては海より深……いかどうかは分からないが、まあ日菜さんの思い付きからの即行動の賜物である。何故かつぐみが乗り気だったのには驚きだったが、全ての教師陣はOKを出したらしい。教師陣がOKならば断る必要が無いという感じで、この話は6月半ばくらいから進んでいる話だ。

一旦それは置いておこう。今日この部屋にいるのは我らが生徒会長の燐子先輩、しっかり者だからよくお手伝いを頼むことが多い風紀委員長の紗夜先輩、俺と同年ながらしっかり者すぎて書記に抜擢された有咲と俺の4人だけだ。まあ紗夜先輩と有咲はお昼から用事が入っているため途中からは2人になるのだけど。

「紗夜先輩、有咲。そろそろ出なくて大丈夫ですか?」

ふと時計を見ると13時を回っていたので声をかける。

「そうですね……私はそろそろお暇させて貰いましょう」

「了解です。今日は日菜さんとお出かけですか?」

「ええ……まあそんな所です」

「素直に認めた……だど!?!」

「明日台風来るとかないよな?」

「台風どころか槍が降るかもしれんぞ」

「私が素直に認めるのがそんなに珍しいですか?」

「はい」「ええ」

「なんで2人揃ってそんなこと言うんですか!!」

「それだけ紗夜さんが素直に日菜さん絡みの予定を伝えることが珍しいってことですよ」

「し、白金さんまで……」



「まあ紗夜さんは帰りながら自分の胸に手を当てて考えながら帰れば  
自ずと答えは分かると思います。それより有咲も帰るか？」

「そうだな……香澄の宿題の進み具合が不味いから、今日もポピパで  
勉強会することになってる」

「だから夏休みの宿題がチラツと見えたのか」

「そそ。てことで私も帰るわ」

「お2人とも夏休みなのにありがとうございます」

「お2人も、無理だけはしないように」

そう言つて2人はこの部屋から出ていった。自然訪れる静寂とあ  
まり2人だけではないことがない現実を突きつけられ……

「……………」

無言になっていた。

(いや気まずっ!!これはかーなーり気まずい。何か話題を出さなけれ  
ば……)

「あの人、隣子先輩。2人帰ったところですよそろそろお昼でも食べ  
ますか？」

「そ、そうですね」

そのまま少し遅めのお昼になった。取り出すは行きのコンビニで  
買ったサラダうどんだ。最近夏バテ気味だから食べやすいものと調  
べたらサラダうどんと出てきたので試しに食べてみるとそれはもう  
美味しかったので、最近のマイブームである。作るの簡単だし、アレ  
ンジも効きやすいのでほぼ毎日一食食べている品物だ。

ちなみに隣子先輩は隣でちゃんとおにぎり食べてた。この人……  
さてはあまり夏バテしてないな？

「隣子先輩、そのおにぎりの具ってなんですか？」

「えっと……おかかだね」

「他にあつたりするんですか？」

「今日は……梅と昆布だね。そういう翔斗君はそれだけ？」

「そうですね。あまり食欲わかないので……」

「男の子なんだからちゃんとおべなきやダメだよ？」

「頭ではわかってるんですけどね……夏バテしてて食事がなかなか喉

を通らないんですよ」

「で、のどごしの良いうどんという訳ですね」

「そういうことです」

こんな他愛のない会話をしてたらスマホが鳴っていることに気づく。慌てて画面を見ると有咲からだった。

「すみません隣子先輩。有咲から電話来たので少し席外しますね」

「分かりました」

部屋の外に出て通話を受ける。

「もしもし」

「翔斗、悪い!!ひとつ頼まれてくれないか?」

「どうした?急ぎか?」

「緊急!!今すぐお菓子買って蔵まで来てくれ!!」

「はあ!?!有咲からそんなこと言うなんて……頭でも打ったか?」

「私じゃねえ、香澄とおたえだ!!」

「その2人か……さしずめご褒美ないからやる気出ないとかだろ?」

「お前なんでわかるんだよ!!」

「約1年一緒にいたからある程度理解した。んで何系買って行けばいいんだ?」

「ポテチとか、クッキーとか……とりあえず大人数で分けられるやつ!!」

「アイスはいるか?」

「多分欲しがると人が多いだろうからそれもよろしく」

「飯食い終わったら速攻で行く!!」

「了解!!待ってるからな」

電話を切り、中に入ってうどんを平らげたあと隣子先輩に簡潔に説明した。

「隣子先輩。有咲から香澄とおたえのためにお菓子とアイス買っているんですけど、隣子先輩もなんか欲しいのあったりします?」

「じゃあパピ〇で」

「即答で……了解です少しの間お願いします」

そうやって俺は真夏の真昼間にコンビニに買い出しを実行した。

誰だこんな罰ゲームチックなの考えたやつ!!

猛ダツシュしたからか、5分ほどでコンビニに着き、店の中に入るとバイト中のリサさんが居た。

「いらっしやい!!」

「リサさんもモカと一緒にここでバイトしてたんですね」

「そうだよ、翔斗くんは用事？」

「有咲に頼まれてお菓子とアイス買ってるんです」

「なるほどね、はい袋込みで1358円ね☆」

「これでちょうどだと思いまーす」

「はいちょうどお預かりします」

「レシートいらないから!!」

「ありがとうございます」

アイスが溶ける前に猛ダツシュ!! ついでに有咲に電話つと。

「もしもし」

「もう着いたか？」

「あと1分ほどで着く、外出て準備してくれ」

「了解!!」

そのまま進むと大きな蔵が見えてきた。その前に有咲もいる。俺を見つけたら手を振ってくれた。

「待たせたか？」

「いや、今出たところ」

「はい、これ頼まれたもの」

「お金返さ「いいよいいよ。俺のささやかな差し入れて思っ」……  
わかった」

「んじや俺行くから」

「待て待て、これお前が買ったやつだろ？」

「やっべ隣子先輩注文忘れて帰るところだった……サンキュ有咲」

「あとこれ、家にあるポ〇リ。夏場に外出して倒れられたらこっちが困るからな」

「ありがと。じゃあまたな」

そのままUターンして学校まで急いで戻る。戻った時には2時を



「あ、ありがとうございます。あと、この背中にかけてくれてるのつて」

「それはたまたま持つてきてたブランケットですね……そこエアコンの風が直当てなので寒くならないように掛けたんですよ」

「仕事といいこれといい、色々ありがとうございます」

「燐子先輩最近忙しそうでしたのでたまにはゆっくりしてください」

燐子先輩は少し考えた後こういった

「……じゃあ翔斗君に癒してもらおうかな」

「癒すつて……何すれば？」

「なんでもいいですよ。お任せします」

「なら冷凍庫にパピ○入れてるんで食べながら何かしましょうか」

そう言つて冷凍庫の方に向かうと燐子先輩が制服の袖を掴んで

「少しだけ……お姉ちゃんつて呼んでくれないかな」

「……………えっ？」

マジ？別に一人っ子だから呼ぶのは構わないし……燐子先輩みたいなお姉ちゃんいたらいいな〜と思うことはあるけど……ちよつと理由聞きたくなつたなあ

「答えにくかつたら答えなくていいんですけど、なんか理由とかあつたしります？」

「なんか急に甘えたくなくなつちやつて……ダメですか？」

そんなこと言われたらやるしかないじゃないか!!

深呼吸をしてからパピ○を冷凍庫から取り、右手に持つて燐子先輩をバツクハグした

「えっ、えっ（；×？× 三 ×？× 三 ×？×；）」

「一度しか言わないんでちゃんと聞いてくださいね」

「う、うん」

「燐子お姉ちゃん、一緒にパピ○食べよ!!」

「（。？。ゴフツ）」

「お、お姉ちゃん!!しっかりして〜!!」

「我が生涯に一片の悔い無し!!」（昏睡）

「り、燐子せんぱーい!!」

お姉ちゃ……いや、燐子先輩が起きるまで30分もかかった。もちろんパピ○は溶けてしまうので再度冷凍庫に投入し、起きるのを待った。まあ起きた途端……

「翔斗君!!もう一回……もう一回やって!!」

「もう一回やったらパピ○食べる時間無くなるんですけど……」

「……翔斗君のケチ」

「……時間的に食べたなら帰りますよ」

「うそ!!もうそんな時間なんですか!?!」

「はい。なので早く食べて帰りますよ」

燐子先輩にパピ○を渡し、自分の荷物をまとめる。途中で燐子先輩からパピ○を半分頂いたので食べながら準備を進めた。

食べ終えたらすぐ外に出て鍵を返し帰路に着いた。

「今日は色々ありがとうございます」

「やることは少し減りましたか?」

「そうだね。まだまだやることは多いけど……」

「まあそれは仕方ないですって……」

できるだけ日陰を通りながら2人で帰る。

「あ、あの……ブランケットって洗って返した方が……」

「大丈夫ですよ……ていうかそれあげます」

「ええ!?それは悪いよ……」

「俺がそうしたいから上げるんです」

「そういうなら貰うけど……」

「良かった……元々燐子先輩にあげる予定だったものなんで」

「あ、ありがとうございます」

こんな話をしているうちに分かれ道に差しかかる。

「そういえば……あれはもう一回してくれないの?」

「あれは一度きりの予定だったんですけど……」

「もう一回やってくれたらやる気出るんだけどなく」

そんな言い回しどこで覚えたのこの先輩……リサさん情報か?

相当おつかれなんだろうなと思ったので、もう一回だけやってあげる事にした。

「燐子先輩、手を出てくれませんか？」

「こ、こう？」

「燐子先輩、毎日仕事に勉強に練習に、色々お疲れ様です」

「えっ、どうしたの急に……？」

「これから俺も色々頼るかもしれないし、みんなからも頼られることがあると思います」

「それは、私の立場的に仕方ないことで……」

「俺、そんな燐子先輩をすごく尊敬してます」

「あ、ありがとうございます……ございます？」

「精一杯仕事・勉強・練習をして疲れちゃったなって……時は」

燐子先輩の耳元でこう囁いた

「またぼくに癒させてね。燐子お姉ちゃん!!」

「フア!？」

「じゃあ俺こっちなんで。ではまた」

そのまま逃げるように帰った。後ろをちらりと見ると顔を真っ赤にした燐子先輩が呆然と立ち尽くしているのを確認できた。

翌日、有咲から「昨日はお楽しみでしたね」というGINEが来たことによつて俺の理性が壊れたのと言うまでもないだろう。

くおまけく

似たようなことを他の子にもやってみた

1 山吹沙綾

「いつもお疲れく」

「えっどうしたの急に？」

「いや、いつも頑張ってるから労いの言葉かけたくって」

「そうなんだくありがとう」

「ただ、勉強と家の手伝い……両立してたら疲れるでしょ？」

「そりやまあ……」

「なら疲れた時はぼくに任せてよ。沙綾お姉ちゃん!!」

「えっ……」

「じゃあなく」

「……………急にどうしたんだろう？」

## 2丸山彩

「彩先輩!!」

「どうしたの？」

「いつもお疲れ様です」

「あ、ありがとう」

「毎日アイドルと学業とバイトでお疲れでしょう」

「そ、そうだね」

「でも、辛くなってきたら」

「……………」

「ぼくを頼ってね。彩お姉ちゃん!!」

「ンジャニヤパ!?!」

「じゃあこれからも頑張ってください!!」

「……………毒でも飲んだのかな？」